
またあした...

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

またあした…

【Nコード】

N0694L

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

崩壊間もない、粉雪舞う2月の夜。灰原哀は突然この街から姿を消した。彼女を失うことによって、絶望や不信感でいっぱいだった彼が、元来の彼の姿に戻っていく様子をしかと見届けてやっってください（笑）この作品は、私が副創作人として3年努めていた哀ちゃんメインサイトCandlelightさんが閉鎖することにより、移行した中学生コ哀メインの長編小説です。（以前コナン小説リングで投稿したもののリメイクですが・笑）実は、完結せずに終わってしまったのですが、今度こそ完結できるようにがんばり

ます。

プロローグ1：追憶（前書き）

こんにちは&お久しぶりです&はじめまして、こつぶです。

えーと、あらすじにも書きましたとおり、ひよんなきっかけにより、3年間サイト副創作人として哀ちゃんメインの小説を書かせて&載せて&一緒に活動させていただいていたCandlelightさんが近々閉鎖になるということで、そちらに載せていた小説をこちらへと移行させていただくことになりました。

その第1弾がこれです。実は完結してないという・・・。

『雨と老女』もまだ完結してないのに、これもまだで、大丈夫かい！？って話でしょうが・・・（笑）

がんばります。相変わらずスランプですが・・・。

それでは、これからよろしく願います。こつぶでした。

プロローグ1：追憶

——おまえはもう、…『自由』なんだぜ？

あなたが言ったあの言葉、目を閉じると今も聞こえる。
もう、6年も前の話なのにね。

でもね、工藤君。

今も変わらないわよ、この気持ち。

私には、自由なんてない。

私のための自由だなんて、どこにもないの。

そう、どこにも。

プロローグ1 追憶

雪が降っていた。

灰色の空から降る雪は、コンクリートの道路の上に落ちては消え、
落ちては消えの繰り返しで。けれど一向に止むことはなく。家を出
る前に聞いたテレビの天気予報では、季節はずれの薄い布地のピン

クのワンピースを着たアナウンサーが、これから夜はさらに冷え込むでしょうと、にこやかな顔で言っていた。

きつと明日の朝には牡丹雪に変わり、町一面真っ白に染まっていることだろう。

その中で緋色の髪を持つその少女は傘も差さずに、ただ固く冷たく濡れたコンクリートの道路を一步一步踏みしめるようにして歩いていた。少女は黒のコートを羽織り、頭を同色のフードですっぽり覆い、何とかその寒さを凌いでいるように見えた。

時折その柔らかな頬を掠める北風に、少女は思わず立ち止まり、縮こまるようにして体を竦める。それから冷たい素のままの両手を口元に付け、はぁ、と体の奥のそのまた奥から暖かい息を吹きかける。その刹那、白い息が辺りに立ち込めた。一瞬だけではあるけれども手元に温かさを感じ、少女は安心したように口元に笑みを浮かべ、再びその道をゆっくり歩き始めた。キラキラと白く光る雪景色を見て、楽しむこともせず、ただ表情を変えずにただ、黙々と。

そして時折足を止めて、周りの風景をしっかりとその瞳に焼け付けるように捕らえていく。まるでカメラのシャッターを切るように、一つ一つ、ゆっくりと。

学校、校庭、銀杏並木、商店街、交番、郵便局、公園……。そして、少女はふと立ち止まり、ゆるゆるとそれを見上げた。

大きな屋敷がそこにあった。

だれもいるはずのない暗く、薄気味悪いと評判が悪い屋敷。

今では時折夜、人の気配がすることがあるということで、幽霊屋敷と言われているほどである。

彼女は以前2度、そこに訪れたことがあった。

2度とも少女がまだ一人の黒に染まった科学者で、彼をまだ被験

者としか見ていなかったとき。そこで初めて、彼女は彼が生きているのではないか、という僅かな疑惑が生まれた。

…そして、彼が生まれた場所。そう、１７年間、彼は確かにここ
で――

「ごめんね、工藤君…」

少女は小さく呟いた。

その声は、ひどく掠れていた。

そして彼女は小さくひとつため息をつく、再び道を歩き始めた。

++++

自分はどこに行きたかったのだろう。何をしたかったのだろう。
今、何をすべきなのだろう。――全てがわからない。

しんと降り雪のように頭の中が真っ白になっていて。
しかし、まだ家には戻りたくなくて。

だって、戻ってしまったら、全てが終わってしまう気がする。
すぐに『明日』になってしまう気がする。

それが怖かった。

だから――

覚束ない足取りで道なりに歩く。とぼとぼと、力ない足取りで。

もうどこへ向かうこともなかった。

学校、校庭、銀杏並木、商店街、交番、郵便局、公園…。

もしかしたら同じ道をたどっていただけかもしれない。

けれど、それでもよかった。

まだ、歩きつづけていたかった。

歩いて、歩いて、この道を、この町を、ここにいる人々全てを心の中に留めておきたかった。

ここにいる大切な人々を。この瞳で、この心で――

「…灰原？」

不意に彼女のすぐ傍でその少年の声が聞こえた。

彼の声に一瞬泣き出しそうな表情をして、慌てて全身を奮いたたせる。そしていつもの大人びた顔を作り、そこでようやく振り返った。

「…工藤君」

「やっぱり灰原だ。どうした？ ぼーっとそんなところで突っ立って」

案の定、そこには彼女が思い描いていたとおりの彼がそこにいた。いつものように、悪くもないのにメガネをかけて少年のフリをしつづけている男。包帯で右腕をつり、頬には大きな絆創膏。右足は負傷し、松葉杖について。見るからに痛々しいその姿。

全て、自分の所為で――。

少女の表情はそこでまるでビデオの停止ボタンを押しているかのごとく固まった。

「…どうした？」

彼はもう一度同じ質問を、今度は少女の瞳に問い掛けてくる。

その真っ直ぐで少しも濁りのない瞳で。黒く何処までも深いその瞳で。

少女はその瞳から逃げるようにして視線を逸らし、ゆるゆると口

を開いた。

「何時、退院できたの？」

「…ついさっき。灰原、見舞いにも来てくれねーんだもん」

彼は少しの間の後、そう答えてから、恨めしそうな視線で両手を頭に組み、灰色の空を仰いだ。

そのあとで、まあ、しかたねえけど。と付け足して。

少女はそんな彼の横顔をただじっと見つめるしかなくて。

「ごめんなさい」と無意識のうちに、それは彼女の喉から零れ落ちた。目の前の彼は、少しだけ驚いた顔をして見せてから、表情をふっと緩ませた。

「バー口」

そう小さく呟いて。

「忘れちまったのか？俺は好きでやったんだ。オメーは俺を何とかして止めようとしただろ？それなのにそんなオメーを振り切った。組織を見つけて、みすみす泳がすなんて真似は俺はどうしてもできなかったからな」

彼の表情はいつにも増して優しい表情をしていた。

彼は自分を気遣ってくれている、ということとは、少女にはわかっていて。だから余計に心が痛かった。ジクジクした痛みがココロの中を渦巻いて。思わず自分の服をぎゅっと掴んだ。

「・・・大丈夫だって。こんなのすぐよくなっから・・・」

彼の言葉が少女の耳を通り越していく。

少女は力なく首を横に振った。

そして彼に聞こえないように、ほんの微かな声で、違うの、と呟いた。

本当はそれだけじゃなかった。

自分が本当に彼に対して心の底から謝りたいのは
もう一つ……

永遠に許されないこと。

本当はそのことを彼に話さなくてはならないはずだった。
それが例え目の前の彼を苦しめる結果になろうとしても。

しかし、それは今の自分にはできなかった。

そしてその後の過程を見届ける自信も今の自分にはなかった。
きつとこれからもないだろう。だから……

だから――

「……ごめんなさい」

少女は再び呟いた。

声が震えて、それは一つの言葉としてはかなり聞き取りにくいものであり、言いながら、少女はその柔らかな下唇が裂けるほどに噛み締めていた。

長く伸びた爪の先が手のひらに食い込んで、突き刺すような痛みを感じながら、尚も彼女はそれらの力を緩めることはできなかった。
「灰原……？」

彼はそんな少女の様子に気づき、心配そうにその顔を覗き込む。
それからふつと苦笑して、しゃーねーな、と呟いた。その後でそつと手を伸ばし、優しくその緋色の柔らかな髪を撫で上げる。

びくり、と体を硬くして、少女は思わず俯いた。それからそつと一瞬だけ、彼の顔を覗き見た。

穏やかな表情。

優しい表情。

でも、心が。

心がとても痛かった。

ぐさりとナイフで刺され、傷口を抉られるような感覚。

少女はまた、彼から逃げるように視線を外した。

見られなくなかった。

見て、欲しくなかった。

穢^{けが}れた私の気持ち、今の貴方に見せなくなかった。

見ないで。…お願いだから。

このまま、返して…。

そのとき。突然、少女は、固いのか柔らかいのかよくわからない何かに頭をすっぽり包まれるような感覚を覚えた。それは、少女の頭を包んでいたものは、彼の腕。細くて華奢だが、優しく温かい力強い彼の腕。そしてぐつと彼の胸に引き寄せられて。

気がつけば、彼の胸板に顔を押し付けられて。息が出来なくなってきた。――

「ちよっ、工藤君!」

動揺する少女の顔。手をじたばたさせ、彼から逃れようとしたが簡単にはそうさせてくれなかった。だんだん体が熱くなってくる。

「や、やめてっ。離して!」

顔が火照っている。

おそらく自分の顔が熟れたリンゴのように真っ赤になっているだろうことは、少女自身、その顔の熱さで容易にわかることができた。「そうそう。その顔だよ、その顔」

彼はいたずらボウズのような顔でくすくす笑うと、ようやく少女を自分の許から開放する。

相変わらずの彼に、彼の思い通りにされたことに、聊か不満も感じたが。でも胸の高鳴る鼓動の方が勝っていて。動揺の所為でうまく言葉を返すことができなかった。

「なあ、灰原」

彼が言う。

「もう組織はなくなっただ、ジンもウオツカも、『あの方』なんていう、ふざけた名で呼ばれてた大ボスも。おまえを苦しめるものはもうこの世には何もねえんだ。おまえはもう、・・・『自由』なんだぜ?」

彼は笑っていた。

いつもの、優しい微笑みで。

計算しているように見えて、全部素のままの、その優しさで。そんな彼の表情に、少女は放心したようにただボンヤリとその憎らしい顔を見つめていた。

それは、抱きしめられたからでなく。

それが証拠に火照った自分の体が再びひんやりとしていくのを少女は肌でしっかりと感じていた――。

「…ほら、帰るぞ」

彼はそつと怪我をしていない方の手を差し伸べると、少女の小さい手を握った。

その温もりに、はっとして少女は我に返る。

「こんなところにずっといると、風邪引いちゃうぜ? オメーが病気したら困る奴が多いんだからな。わかってるんだろーな」
いたずらっぽく彼は笑う。

「…わかってるわよ」

少女はポツリ、と答える。

喉が震えている。この微妙な変化に、彼は気づいているだろうか。
「そっか？ならいいんだけどよ」

言葉では納得して見せても、それでもまだ、彼は心配そうな顔を
して暫く彼女の顔を見ていた。

「大丈夫よ、心配しないで」

私はうまくやっていくから。

そんなことを言ったら、貴方はまた余計な心配をしてしまうでし
ょうけど。

――貴方は優しすぎるから。

「そっか。……じゃあ行くぞ」

少女の言葉に、彼はようやくほっとした顔を見せて、それから少
女の手をくいと引つ張った。

少女はこくりと小さく頷くと彼に手を引かれ、ゆっくり歩き出す。

「……何だか、オメー今日やけに素直だな」

「そう……？」

戸惑った顔で自分の顔を見る彼の視線を感じながら、少女はわざ
と顔をそむけた。

洞察力が鋭い彼に、自分の心の動揺をもうこれ以上見透かされぬ
ために。

雲が降る中、その少年と少女は傘も差さず、冷たいコンクリート
の道路を歩いていた。

少女はずっと彼の手を自分から解くことはなかった。

きつと、この手にもう触れることがないかと思うと、とても哀し
かった。

鼻の奥がつんとしてくる。目頭が熱くなってくる。胸の奥から熱いものが込み上げてくる。

- - -でも、泣くわけには行かなかった。
自分には、泣く資格なんてないんだから。

「...じゃあ、また明日な」

その少女が住んでいる家の前まで彼は彼女を連れてくると、眩しいほどの笑顔でその言葉を口にした。

「...そうね、『明日』」

いつもと変わらぬやり取り。

でも明日からはもう2度と交わすことのないやり取り。

明日、彼はこのやりとりが、この些細なものだったはずのこの約束が少女の決意によって破られたことを知るだろう。

そう思うと、少女の心はちりりと痛んだ。

「風呂入って体温めて早く寝ろよ」

一度少女から背中を向けて歩き出した彼はふと足を止めると、振り返ってこう言った。

「ええ。...貴方もね」

少女は口元に笑みを浮かべて返す。

「おう。じゃあ...おやすみ」

「おやすみなさい」

少女は平静を装って別れの挨拶を言った。彼が再び背中を向けて去っていく。いつもと同じ足取りで、ゆっくりと歩いていく。

少女は、その後ろ姿をじっと見つめていた。彼が角を曲がってもそこに誰もいなくなっても、ずっとその幻影を見つめていた。目を閉じれば、まだ彼の姿が見える気がして - - -

しんしんと高い空から降る雪は相変わらず落ちては消え、落ちては消えしていた。

しかし今ではその霽雪は粉雪に変わっている。きつと明日の朝には積もっていることだろう。

少女は彼の姿も幻影も何もかも見えなくなると、はあ、と白い息だけ外に出して、諦めた様に玄関の方へ向いた。そして合鍵をポケットから取り出そうとしたとき、かちゃっ、と合鍵が内側から回りのきい、と音を立ててそのドアが開いた。

「おかえり、哀くん」

優しい表情で少女を迎えてくれたのは、初老の男性。少女はにっこり笑ってこう言った。

「ただいま。博士」

少女がこの町から、そして彼の前から姿を消したのは、その翌日のことだった。

プロローグ2：失われた記憶

2月も終わりに差し迫っていたある夕暮れ時、その少女は廊下を全速力で走っていた。その水色のプリーツスカートをひらひらと揺らして。

明日の朝までに提出しなくてはいけない進路調査のプリントを机の中に入れたままだったのを今になって思い出したのだ。

校内に鳴り響くのは下校5分前を知らせる音楽に、彼女は俄か表情を顰める。

「やばいなあ・・・」

ようやく2年B組の教室まで辿り着くと、その少女は急いで自分の机の中からクリアケースを取り出した。中にきちんと、その3枚構成のプリントが入っているのを確かめて、それを大切そうに鞆に入れる。

そしてまた急いで教室を飛び出した。

廊下を走り、階段を下って。

あまり慌てすぎて転ばないように、地面ばかり目にいつて。パタパタと廊下中に鳴り響くその音もそのままに。

下り階段を一気に駆け下り、次の階に差し掛かろうとしたとき、ふと開けた目の前に思わずその勢いを止めた。急ブレーキをかけた車のように。

そこだけ。

そこだけ、普段、クリーム色の階段が、まるでその色の絨毯を余すところなく敷き詰めたかのように、淡い緋色に染まっていたのだ。

夕陽のマジック。

さっきまであまりに急いでいたので、階段のことに気をとられたことはなかったのかもしれない。

それとも、自分が教室に行ったあの数分間の間に夕日が移動したのだろうか。

ともかくにも、透明の大きな窓から、全身で滑り込むようにして緋色の光がそこに差し込んだ。

——あなたらしくていいんじゃない？わりと好きよ、こういうの・・・

ふいにあることばが頭の中に浮かんできた。

懐かしい、優しい、耳に心地よい女の子の声。

しかしそれと相反したような、どこか大人びたような口調・・・

いつか、このことばを聞いたような気がする。

大好きだった、この声で。

そしてこのことばを口にしたその表情は優しい笑顔だった気がする。

そしてその女の子のことを、自分はとっても好きだった気がする。

けれど、それが誰が口にして、いつ、そして何故そのような状況になったのか、彼女にはどうしても思い出すことはできなくて。まるで自分の知らないだれかが、その記憶だけを何かオブラートのようなものでそっと包み隠してしまったかのように――

「下校時刻3分前です。校内にいる人は早く準備を終えて下校してください」

学校内に放送されるアナウンス。

少女はそれを聞くや否や、我に返ると、あわてて滑るように階段を下っていったのだった。

帝丹中学校2年B組。現在は5時限目。社会科の授業だ。

今の時期はカタカナ人名が多い世界史分野を習っているうえに給食を終えたばかりなので、クラスの大半は寝ていた。しかもその教科の担任が難しい話をするくせに、ほとんど板書をしないので、よけいに性質は悪い。クラスの成績は落ち込む兆しが見えていた。

しかしそんな中でも必ず必死にノートをとるものがある。

この時期の定期テストや授業態度がが内申に響き、今冬の推薦に影響を及ぼすことをしつかり胸に据えているからだ。いびきや、携帯電話のメールを打つ音の中、休む暇なく、カリカリとノートをとる音が微かに聞こえていた。彼らの頭の中には今の時期、『勉強』それしかないのかもしれない。

その中の一人が円谷光彦だ。廊下よりの左から3番目。前から4番目の席。ここから黒板はよく見える。まあ、この授業は黒板が見えなくてもさほど支障はないが。

「ツッピー！またあとでノート、コピーさせてね」

右隣でプリクラ帳を眺めていた栗色の髪の女の子に、かわいい顔でこっそりそう言われて、彼は板書していた手を思わず止め、「あ、はい…」と呟いた。それからまたか、と苦笑する。

毎回この授業は、彼女のためにノートにとっているようなものと彼は思う。自分では纏められないから、と彼女は光彦と席が隣になったその週から彼に頼っていた。しかし光彦は何も文句を言ったことがなかった。

ちなみに、「ツッピー」。彼のあだ名だ。そう呼んでいるのは彼女を中心とした一部の女子の間だけなのだが。前はそう呼ばれていたことに抵抗はあったが、今は別にそれこそ気には留めなくなっていた。

彼女の名前は、赤西真弓。透き通るような細い栗色の髪は、天然の色であるけれども、とても綺麗で。さらさらと流れるようなその髪の毛を持ち、柔らかな曲線を描いた眉と、くりくりとした丸い瞳そしてちよつと低めの鼻とぶっくりとした唇がまた可愛くて。ツツピーと呼ばれても怒らなくなつたのはそんなかわいい彼女だからこそか。

自分も男。そういえば昔から可愛い女の子に弱かつたなあなんて思わず苦笑する。あのときから自分はマセていた。まだ小学校1年生だというのに、真剣に人を想っていて。そして、あれからその気持ちは少しも変わっていない。彼女たちを好きな気持ちは少しも衰えず。…たとえもう一人の女の子が姿を見せることがなくても。もう2度と会えることがなくても。

彼は二人の少女に、確かに恋をしていた。

暫くノートを取ることに集中していたせいか、突如体に倦怠感を覚え、手にしていたシャーペンを机の上に置く。タイミングよく、目の前の教師の話は脱線した方向に行っていたから、余計に力が抜ける。何だかずきずきと頭が痛んだ。勉強のし過ぎだったのかもしれない。そう思い、彼は気休めに人間観察を始めることにした。

まず手始めに、隣の席の真弓に目をやる。先ほどまでプリクラを見るのに夢中だった彼女は、いつのまにか携帯電話を机の下に隠し、だれかとメールを楽しんでいる。時折クスクスと忍び笑いもこめて教師の話も授業も全然聞いていない。そんな彼女に、彼は深いため息をつき、その視線をまた別に向けた。

次に目をやったのは彼の席のひとつ前の女の子。彼女は光彦と同じ学級委員。髪を短く刈ったちよつと体格のいいボーイッシュな女の子。元気のよい子で、頭の回転が速い、クラスの人気者だ。ソフトボール部ではキャプテンを務めてる彼女は既にお疲れのようで、教科書の上に突っ伏して男らしく(?)眠っている。そんな彼女に、光彦は思わず苦笑すると、今度は後ろを振り返った。

1つ左隣の列の、一番後ろの席。一際クラスの中で目立つ体をもつ丸坊主の少年。体重は90キロはあるうかという体格を持つ彼のことを光彦は幼稚園のころから知っていた。彼はさつき給食全てのメニューを2巡ほどおかわりしたはずなのに、それでも物足りなさそうな顔でおなかをさすっている。普段は3巡するところを、ある少女にダイエツトしなさい、と言われたことで我慢していたのだらう。

それから光彦はまた視線を他に動かした。

廊下から1番目の列、後ろから2番目の席。空っぽの机。

- - - 日もいらない。

そのうち埃がたまっていくのじゃないか、と真剣に考えてしまうほど、その机の主が現れたのは随分と前のことだった。光彦は大きくため息をつく。仕事に熱を入れるのはいいけれど、珠には学校にも来てほしい。最近の彼は、自分たちと程遠い場所に行ってしまう気がして。昔一緒によく遊んだ、あの笑顔が今では懐かしかった。彼の隣にはいつもあの子がいたけれど……。そんなやるせない思

いを抱きながら、そのままの表情で最後に窓際の少女に目をやった。

窓際の一番後ろの席の女の子。白いカチューシャで肩までの髪を綺麗に纏めている、くrikuriとした丸くて大きな黒い瞳が印象的な彼女だ。この子も幼稚園からずっと一緒だった、幼馴染。そして、彼女があこのころから恋焦がれていた二人の女の子のうちの一人で。

――少しだけ『あるもの』を失ってしまった女の子。それは他の誰かが、それを失ってもさほど支障はなかったかもしれない。

でも、彼女がそれを失ってはならなかった。

きっとそれをもう一度取り戻すことができるのは、きっともうないことなのかもしれない。

そう感じ、半ば諦めていた。

そう、そんなときだった。彼女の変化を見たのは。

光彦は彼女を見たとき、すぐに、あれ、と思った。

肩までの髪を触りながら、彼女はただぼんやりと窓の外を見つめていた。いつもは授業を授業を熱心に聞いている彼女が。

（歩美…ちゃん？）

彼はノートの端をびりりと破いて、なにやら書きこみ、それを丸めて彼女の机に向かって投げつけた。

――ナイスシュート。

それは無事、少女のノートの上に着地する。

しかし彼女は気づいてくれなかった。視線は依然窓の方をぼんやり眺めたまま、こちらに振り返ることもない。光彦はがっかりして再び頭を教諭の方へ戻したとき――

がたたつ

椅子を動かすその音にはっとして光彦はまた振り返った。さっきのカチューシャの彼女――幼馴染の吉田歩美だった。光彦だけで

なく、クラス全員の視線が歩美に集中する。

「…吉田、どうした？」

その教諭は、ずり下がったメガネを上げながら驚いた表情で尋ねた。しかし彼女は彼の声が聞こえなかった様子で、しばらく校庭を凝視したまま凍りついたように動かなかった。何かに驚いた表情で、彼女は一点を見つめつづけていた。

いったい、その場所には何があるというのか。

「…ちゃん？」

光彦は歩美がぼそりと呟いたそのことばに一瞬耳を疑った。

席がそんなに近いわけでもないのに、いつもはこんな小さな声、聞こえるはずなのに、なぜかその言葉だけは耳は拾い上げた。

「吉田…？」

メガネ教諭は恐る恐るもう一度彼女の名前を呼んだ。

彼女ははっと我に返ると、バッグも持たずに突然教室を飛び出した。ざわざわとクラスが波立つように沸き起こる。

「よ、吉田っ…おい、こら、待ちなさい！」

そのメガネの教諭はあわてて彼女の姿を追いかけて廊下に出るが、既に彼女は遙か彼方へ消えていた。しかし彼はめげずに追いかける。56歳で運動不足で足に持病を抱える彼と、陸上部エースの歩美と比べたら、歩美が勝つのは必然だろう。

クラスメートもその教諭に続き、席を立てて入口と出口に群がった。それはまるで深夜、白熱灯にわらわらと群がる夜光虫のように。光彦は何人かの仲間とともに窓側へ生き、彼女の姿を探した。ここからだ歩美がどの方向へいくのかわかるから。そのつもりで窓から校庭を見たのに…。

学校の校門の向こうに、黄色いタクシーが止まっていた。

そしてその傍で立っているのは…。

（まさか…）

ウェーブがかった緋色の髪の少女が、寂しそうな彼女の顔が、自分に微笑みかけるその優しい表情が彼の脳裏に鮮明に浮かんた。そして、タクシーに乗り込もうとするその女性の髪も、思い出の中の彼女とまったく一緒だった。

（まさか…）

車のドアがぱたり、と閉まる。

「はい…ばらさん？？？」

光彦はポツリ、とつぶやいた。その瞬間、ずしり…と急に漬物石を何個かまとめて体の上に載せられたように重くなった。さつき、入り口と出口にいたクラスメートたちである。光彦の上に2人、まるで体重をかけて乗ってきたのだ。

「お、重いですよ、つぶれてしまいます…」

彼が小さく悲鳴をあげる。そして次の瞬間、さらに体は重くなる。ちょうどインド象がティラのザウルスにでも踏まれたかのように。もちろん乗っているのはさっきの巨漢の少年――小島元太だ。ぎやあぎやあ、と光彦の上に乗っていた2人の少年は早急に避難し、光彦だけが逃れられず、彼の被害にあっってしまったのだ。

それから何とか彼から逃れると、はあはあと息を上がらせた。

「…歩美は？」

野太い声が光彦の耳に響く。

「まだいけません。それより、見てくださいよ。あのタクシーの…」
途中まで言いかけて、彼ははっとした。タクシーがゆっくり動き出していた。

「待って！」

その声に、光彦、元太、そして多くのクラスメートは窓から身を乗り出した。

歩美が昇降口を飛び出し、校庭に出ると、校門に向かって全速力で走っていた。

あの黄色いタクシーを追って。

光彦は確信した。

彼女も――吉田歩美も見ただ。

あの、タクシーを。

緋色の髪を持ったあの少女を。

そして、思い出していたのだ。

彼女の記憶が、蘇ったのだ。

大切な記憶が。

宝箱の中に、嚴重に鍵をかけてしまわれていたはずのその記憶が。

彼女の中から。

蘇った。

黄色のタクシーは、止まることもなく、あっという間に見えなくなっていく。

光彦は何も言えず、ただ、取り残され、泣き崩れる歩美を、校舎の窓から見下ろすことしかできなかった。

+++

「何、本当かね。光彦君」

その男は大変驚いた顔で彼を見つめた。

時刻はもう18時を過ぎてあたりはすっかり暗くなっていた。こ
こはその男の自宅で、光彦はほんの30分ほど前にここに訪れたば
かりだった。すっかり訪れていなかったこの場所。その男は、彼が
来訪したことをとても喜んでいた。思い出話に花が咲く。

もちろん、話題を持ち出すのは、光彦でなく、いつも目の前の彼
であつたけれども。

そう、その男。

頭は薄く禿げ上がっていて、恰幅もよく、セーターの上に白衣を
まとい、見るからに博士という雰囲気醸し出したその男。昔と変
わらない人のよさそうなその表情。何年かぶり彼の家に訪れ、彼の
顔を見たとき、思わずほっとしたものだった。

「それで？本当に君は彼女を見かけたのかね」

彼はさつきよりまた一段と声を荒げて光彦に尋ねた。

「ええ、今日学校で……」

「本当に、本当なんだね」

何度も確かめるように彼は光彦の顔を見る。そして彼の目頭には
熱いものがあふれていた。

彼の名は阿笠^{ひるし}博士。今では著名な天才発明家で、昔はよく彼らの
ために発明品を作ってくれたりしていた。彼らが少年探偵団として
活躍していた時代に。そう、彼は七年来の親しい間柄なのだ。しか
しその探偵団が解散してから、光彦自身は彼の家に行くことを躊躇
していた。他の『2人』はどうだか知らないけれど。

「…バ一口。それがあいつだって確信はねえだろ」

突如2人のすぐ後ろで、その声は聞こえた。アルトとテノールの中間のような少年の声。

まだ声変わりの途中なのだろう、それでもその口調の雰囲気はどこか大人の匂いを感じさせるような。

刹那、二人は同時に振り返った。

そこにいたのは、やはり光彦が思っていた人物、黒縁メガネをかけて、黒い厚地のコートを羽織った彼。その名は――。

「おお、コナン君。遅かったのう。3時過ぎには帰ってくると言
つてたから昨日蘭くんにいただいたケーキを残して待っていたのに
今、2人で食べてしまったぞ」

はかせ
博士はそういうと、大げさにおなかをさすって見せた。その言葉に驚いて、光彦は3分の2ほど食べてしまったシフォンケーキを申し訳なさそうに見つめた。そんな2人を見て、コナンと呼ばれたその少年は思わず苦笑する。

「聞いたよ。2時にはもうこっちに戻っていたんだけど、今まで毛利探偵事務所に寄ってたんだ。そのときケーキを食ったから」

彼は形よくコートをハンガーにかけると、そのあとでかちこちに固まっている光彦に声をかけた。

「よお、光彦。ひさしぶりだな」

「…え、ええ」

ソファに座っていた光彦は、少しだけ緊張して居住まいを正した。確かに彼の姿を見るのは2週間ぶりだった。しかもその日も、職員室に入る彼の姿を見たというだけのこと。彼と直接話すのはいったいどれくらい前のことになるだろう。テレビや雑誌で工藤新一の再

来だ、とか、天才的中学生探偵とか、いろいろ騒がれている彼を見て、何だか雲の上の存在になったような気がして。

それが光彦には寂しかった。

彼の名前は、江戸川コナン。光彦の小学1年の時からの親友だ。

入学してまもなく帝丹小学校に転校してきた少年で、お化け退治をきっかけに仲良くなった仲間である。最初は自分よりずっと小さくて、がり勉ぽくって、一見虚弱そうな、それでいてスポーツ万能で、女の子に、自分の気になっている女の子である吉田歩美に気に入られている彼をいけすかない男だと思っていた。

だけど実際はそうじゃなかった。

勇敢で、優しく、頭がよくて、推理が得意で、困ったときは助けてくれて。そんな彼にあこがれていた。

少年探偵団になってからいろいろ冒険をした。TWO-MIXのメンバーを誘拐事件に協力して、そのご褒美にコンサート会場であこがれのみなみちゃんと歌と一緒に歌うことができたり、博士の初恋の女性の行方を辿るためにあちこち探し回ったり、キャンプに行つて青の古城を見つけたり、鍾乳洞で殺人をした犯人グループとばつたり遭遇したり、快盗キッドに遭遇したり、サッカーの優勝パレードに行つて爆発事件に巻き込まれたり…。

何度か危ないこともあったけど、いつも彼が助けてくれた。だから少年探偵団も一生続くと思っていた。

それなのに…。

——やめにしてーんだよ、もう。終わりにしてーんだ…。

ある日彼は言った。

の奥に染み入るような悲痛な声で…。

しかし、誰も反対などするものはいなかった。

光彦が帰って、既に1時間が経過していた。

阿笠邸宅、地下室。

江戸川コナンはぼんやり机に向かっていた。何を考えることもなく、ただぼんやりと。

そして机の引出しを静かに開けると、中からあるものを取り出した。それは――

古ぼけた茶封筒。

封の開けてない封筒。

6年前に彼宛に届けられた手紙。

差出人は――灰原哀。

彼は徐に錠^{はしり}を取り出すと、封筒の部分に刃をあて、さらにチョキリと一回鋏を入れたところで、彼ははたと我に返った。それから思わずふつと自嘲的な笑みを浮かべて、その手を止める。

「……一体俺は何がしたいんだか」

彼はポツリと呟いた。

いまさら、その封筒を開くこともない。

開く意味もない。

それなのに、自分は――

彼はその茶封筒を再びもとの引き出しに戻すと、大きく深いため息を吐いたのだった。

++++

地下室を出て居間に行くと、博士が一人ソファに座り、朦朧と虚空を見つめていた。空になったケーキの皿も、コーヒーも何もかもそのままに。そんな彼の様子にコナンはほんの少しだけ表情を曇らせた。そして、ふうとため息をつく、「…おい、博士」と彼の名前を呼んだ。しかし彼は何も反応することはせず、ぼんやりと宙を見ているだけで。

「おい！」

コナンはさらにもう一度、今度は先ほどよりも強く彼に呼びかけた。

そこで博士ははっと我に返ると、コナンの姿を見つけ、「何じゃ、いたのか」と驚いた表情で呟いた。そんな彼の様子にコナンは再びため息をついたが、彼が言い出したその言葉については、何も返さなかった。

「…食ったもんくらい自分で片付けろよ」

博士から目をそむけ、ぼそりとその言葉を吐き捨てるように言うと、テーブルの上に置いてあった新聞を開き、目を通し始めた。

「ああ、すまんすまん」

彼はよっこらせ、という掛け声と一緒に、テーブルの縁に手をかけてソファから立ち上がると、それら全てをお盆に乗せて、のそのそと台所に向かい歩き出す。まだギリギリではあるが、50代であるというのに、その後姿はあの日からますます年老いて見える。

コナンはそんな博士の後姿を視線で追いかけ、それからゆっくりと新聞記事に目をやった。

「なあ、博士」

そのままの視線で、新聞に目を向けたまま、それとなしに出される言葉。

「…光彦のいうことだけど。…そんな期待すんなよ」

「っ!？」

案の定、博士は彼の言葉を聞くや否や、立ち止まると、驚いたよ

うな表情で振り返り、コナンの顔をまじまじと凝視した。その視線に気づき、彼は思わず新聞から目を外すと、その新聞を再びテーブルに戻して、博士の方へと体ごと向ける。博士は自分が何を言い出すか驚いていることはわかっていたから。あまり言いたくはない言葉だったけれども、この発言をしたときに言わなくてはならないことは既に覚悟は決めていた。

「ただ雰囲気似てただだったかもしれない？ イマドキ髪を染めた女なんかたくさんいるんだし。あの色だって今じゃ珍しい色じゃないんじゃないのか」

その言葉に、確かに、と言いかけて、はたと彼は口を噤んだ。

認めたくない、という心理が働いていたのだろう。コナンは猫背にしてぼんやり床を睨んでいる博士を見て、「まあ、その女性が灰原であったと信じたい気持ちはわかるけど」とため息混じりに呟いた。

だって。

「あいつらはずっと灰原を待っていたわけだから・・・」

彼の目は少し顔を上げ、思わず口を緩ませた。

「・・・コナンくん、灰原さんを一緒に探しましょう！ 僕ら、米花少年探偵団じゃないですか！ 警察が捜さなくなつて、僕らがいれば彼女の消息だつて掴める筈ですよ！

「・・・お願い、コナンくん！ 力を貸して！ 歩美、哀ちゃんとこんなお別れするのなんて、絶対嫌だよ！

「・・・灰原がいねー少年探偵団なんて、うな井に七味や山椒のねえ井のようなもんなんだよ！

当時の子供たちの言葉が昨日のことに浮かんでくる。目に涙を浮かべて訴える子供たち。

「灰原、か・・・」

コナンは口の中でその名前を呼んでみた。

「この名前を口にするのも、何年ぶりかな」

思わずふつと苦笑する。その笑みに何かを含んでいたのを

「...新一は、恨んでいるのかの？哀くんを」

博士は心配そうに彼の顔を覗き込む。それは彼の顔ではなく、内面を探っているかのように見えた。

「...さあ、な」

遠い目をして、彼は答えた。

「どう、なんだろうな...」

何も言わないで、自ら自分たちの許から去っていった女。

前日、雪の降る前日、自分は彼女と逢ったのに。言うチャンスはいくらでもあったのに。

何にも話してくれないで。

彼女がいなくなったことを知ったあの日の衝撃。悲しみ。怒り。その入り混じったあのときの感情は、今も忘れることはできない。

だけど・・・

「ま、今になって、昔の、しかも、どこにいるかわかんねーやつ
の話をしたってしゃあねーけどな」

コナンはあっけらかんと笑ってその言葉を博士に向けると、新聞を元のテーブルの上に戻し、ソファから立ち上がった。

「っ!？」

「悪いけど、博士。俺、暫く寝るから。昨日ほぼ徹夜だったから
すごく眠いんだ」

何か言い足そうな博士を尻目に、コナンは地下へと繋がる階段へと歩き出した。

「新一！！」

「それと」

博士の言葉に、彼は立ち止まり、振り返る。

「いつも言うようだけど、…わりーけど、オレは新一じゃねえ。

”工藤新一”は、この世にはもういねーんだ。…そうだろ？」

「…っ」

博士を一瞥し、踵を帰し再び地下室へと消えていくコナンの姿に、博士は一瞬後を追いかけたが、思い直すと途方にくれたようにその禿げ上がった頭を撫で上げた。そして諦めたように頭を2、3度振ると、再びソファに腰を下ろし、ため息をついた。そうしたあとではたと我に返る。

「歩美くんは、大丈夫じゃるか…」

光彦によれば、灰原哀らしき少女がタクシーに乗ろうとしているところを見つけて、『哀ちゃん！』と叫んで。タクシーを追って、校舎を飛び出した。追いつけずに、誰もいなくなった、ただただ広い校庭の真ん中で、一人肩ひざをついて泣き崩れていたという歩美。

はたして、彼女は本当に哀を見たのだろうか。

それ以前に、彼女は本当に、『哀ちゃん！』と叫んだのだろうか。その少女を『灰原哀』と認識した、というのだろうか。

だったら、いつから？

いつ、彼女は、灰原哀を自分の記憶から呼び起こした？？？

彼女を失ったその衝撃から、一切『灰原哀』のキオクを失ったはずだったのに。

『ねえ、この女の子。誰？どこのお友達？？すごく可愛いっ。ずるいよ、いつ知り合っただの？』

久しぶりに博士の家に訪れ、キャンプに行ったときの写真を手に、頬を膨らませ、拗ねて少年探偵団に問いただす彼女の姿を、彼は5年経った今でも、忘れることができなかった。

光彦が帰宅したのはすでに7時をまわっていた。

2月も終わりになると、12月の冬至に比べれば日は長くはなかったが、まだまだ辺りは真っ暗で、彼は少し早足で歩いていたので、門の前にその人物がいたのはさすがに驚いた。

「・・・歩美、ちゃん」

そう、彼を待っていたのは——白いカチューシャが似合うくりくりとした黒い瞳の女の子、吉田歩美だった。

先ほど、消えいくタクシーの姿を見つめ、声を上げて泣いた歩美の姿。今でもそれは強烈に目の中に焼きついていて。

クラスの子たちに支えられて保健室に連れられて。確か早退

したと聞いていたが。

「大丈夫ですか？ ゆっくり休んでいないと…。疲れてるはずですから。さっ、早く中に」

連日卒業式、入学式などがせまっているこの時期、その準備や会議に追われて、教員である両親は家に帰ってくるのが遅い。きつと今日もそうだろう。去年就職した姉は、今は都内のマンションで、数人の男女とルームシェアをしていて。今、ここにいるのは自分と彼女しかないわけだが。

やましいことを考える余裕は、今の自分には少しもなかった。奥の客間に通すと、歩美はソファに腰をゆっくりと下ろした。

「あ、じゃあホットココアでも出しますね。あったかいものを呑むとココロもぽかぽか温まりますから」

（だからそんな顔、しないでください。）

光彦はさっと立って、キッチンに向かおうとした。そのとき。

「…ねえ」

消え入りそうな声で、歩美が言った。思わず彼は足を止め、踵を返した。

「…6年前のこと、覚えてる？ 私が入院したときのこと・・・」

（来たっ）

彼は思わず下唇をきゅっと噛み締めた。それから、彼女の問いに、光彦は「はい」と言って、ゆっくりと頷く。

「君は一人で犯人と接触し、その拳句…」

こくり。と言葉を飲み込んで、喉を潤す。その先を口にすることを躊躇っていた。

歩美はそんな彼の瞳を見つめたまま、その続きを口にした。

「犯人にがけから突き落とされて意識を失ってしまったのよね」

彼女の瞳は哀しくゆらゆらと揺れていた。水の入った洗面器に浮

かぶ、小船のように。

意識を失って1週間。

歩美は奇跡的に目覚め、みるみる回復を遂げた。しかしある記憶だけがぱつさり削り取られていた。その記憶というのが、灰原哀。その事件の10日前に、何も言わず姿を消したという彼女。

歩美だけではなく少年探偵団全体がふさぎこんでいたのは確かだったが、その事件が起こったことで。彼女と過ごした1年間、彼女と触れ合ったその時間が、全て歩美の中から消えうせてしまっていた。

それを気づいたのは、すぐ後のこと。

哀がいなくなる前に少年探偵団で行ったキャンプの写真を見せた時、彼女は不思議そうに尋ねた。

――ねえ、この女の子。誰？

光彦にとって、そのときの彼女の様子は奇異にさえ思えたほどだった。

最初は可愛い可愛いと、写真を見て黄色い声を出す歩美がいて。けれど、何も言っただけであがることができなくて、光彦も元太も、そし

てコナンも。ただそんな彼女の様子を見ていることしかできなかった。

けれど、すぐに歩美自身もすぐに奇妙なことに気づくことになってそのキモチの変化が、光彦にも手にとるようにわかった。

自分は知らない相手。

けれど、写真の中では、自分とその女の子が仲よさそうに写っているから。安心しきった表情で。まるで姉妹のような。

キオクの相違。それはとても彼女にとって恐怖であって。

それに気づいたとき、家にある写真という写真全て引っ張り出して食い入るように見ていたという。

それは小学校1年生のとき、ある時期から突然写真の中に現れてきた彼女。

そしてある時期を境にまたぶつとりと姿を消してしまった彼女。

……この子は一体誰！？誰なのよっ？！……ねえ、教えてよ、コナンくんっ！生きているんでしょ？だったらどこにいるの、何で私は覚えてないの？！

何も言わない少年探偵団に、泣きじゃくりながら食ってかかった歩美。

あんな歩美の姿を光彦は見たことがなくて。とても辛かった。そして彼らは灰原哀の情報を少しも教えることはしなかったし、

歩美自身思い出すことがなかったので、少しずつ、彼女はその話も触れることもなくなつて。

そんな彼女を見ていたから、光彦は元太と『灰原哀』のことは彼女の前では何があつても口に出さない。そう決めていたはずなのに。

「…私ね、やつと思ひ出したんだ。あの写真の子が誰だか」

歩美が穏やかに口元を緩ませて、その言葉を口にした。

「…哀ちゃん、だよ。6年前、私たちの前から突然姿を消した女の子、灰原哀ちゃん。大人っぽくて優しいお姉さんのような女の子。」

赤っぽい茶色の髪がふわふわ綺麗だった女の子。ときどき寂しそうな表情をしていた女の子。私の大切な友達…」

歩美は一つ一つ、かみ締めるように言った。光彦が呆けたように彼女を見つめる。

「…そして、コナンさんの…」

歩美はそこまで言うと、淡いピンク色の唇をきゅっとかみ締めて少し俯いた。そのかみ部分だけが深いピンクに変わった。

「コナンさんのくんの…」

彼女の唇が震えていた。

「…歩美ちゃん？」

光彦は怪訝な顔をして歩美の顔を見た。

「いちばん、たいせつなひと」

彼女は、言った。

阿笠邸 地下室。

その少年、江戸川コナンは電気もつけずにごろりとベッドの上に仰向けに寝そべると、両腕を枕にして、高い天井を見つめていた。現在は夜の11時を少し回ったところで、こんなに早く眠ることができるなんて最近では珍しかった。

なぜならば、いつもどこかの事件に彼は助っ人として呼ばれているから。7年前忽然とこの世から姿を消したあの高校生探偵と同じように。

その奇妙な失踪を遂げた高校生探偵の名は、工藤新一。

約2年の間、何百もの凶悪事件、迷宮入りした事件をスピーディーに解決した男。日本の救世主といわれた男。

・・・そしてそれは今の江戸川コナンという彼の、言わば『前世』でもある。

生きながらにして体験してしまった2度の人生。工藤新一という人生を17年生き、そこで果て、江戸川コナンというもう一つの人生を今は生きている。

そして彼が工藤新一ではなく、江戸川コナンとして歩んでいる今の人生に多大な影響を与えている人物こそ、『灰原哀』その人であり、その事実是否定しようにも変えようがない事実だった。

なぜなら彼を江戸川コナンという人生を歩ませてしまったのは、彼女自身だったから。

それが例え彼女の意味で始まったことではないとしても、今の今までこの姿でいるということを考えれば、まだまだ彼女の存在は尾を引いているわけで。

――そう。今もまだ彼女の所為で、彼女のために彼はこの姿で、『江戸川コナン』として生きなければならぬ運命に晒されている。なぜならば、彼を『彼』に戻す唯一の救いである、彼女がここに居ないから。自分の意思で、彼の元から去ってしまったから。

そう、その全てがもう少しで終わる、と安心しきっていたそのときに。

「またあした・・・」

そう約束したはずの彼女は、朝になればまた何も変わらず逢えると思っていた彼女は、次の日、何処にもいなかった。その、手紙だけを残して。あしあと痕跡だけを残して。

彼女は消えていた。

+++

今でも彼の胸に強く残る、あの日のこと。

6年前の冬、黒の組織はとうとう壊滅した。しかし、その道ははるか遠く、多大な時間を要するものであつて。歴史上類を見ないほどのその組織の凶悪さと、そしてそのくもの巢のような組織の広さ、手口の巧みに、どれほど彼らの手を煩わせたか。

組織捜査中、彼らの手によって証拠も残さず殺された、警察関係者・そしてその家族……。察することすらできず、気がつけばあとの祭り。どれだけ自分を恨んだか。

何度もそのたびに邪魔は入ってきた。しかし組織を追い詰める壁は少しずつ日本警察・インターポールやFBI、さまざまな警察組織の手によって固められていき、ようやくその日を迎えることができたのだ。もちろんその中でも日本は彼のほかに、西の名探偵、服部平次、そしていつぞやの『黄昏の館殺人事件』で知り合ったたたくさんの名探偵たち、アメリカFBIでは赤井秀一、ジヨディ・スタ

ーリング両捜査官などの活躍が際立っていたが。

「さあ、決戦の始まりや」

そう呟いた彼の声のトーンは、少しだけ高く、興奮しているように思えた。あときの彼の声とその表情は、今でも胸に焼き付いて離れない。

そして、江戸川コナンのもうひとつの功績。

それは江戸川コナン自身の手でその薬のデータが入ったフロップィーを奪取することに成功したということ。

それがあれば、全てがうまくいくはずだった。

フロップィーを開き、データを見た灰原哀がA P T X 4 8 6 9の解毒剤を作って、彼は再び工藤新一に戻るはずだった。

しかし彼女が、灰原哀がとった行動は彼の予想を大きく反するものだった。

彼女は、2通の手紙だけ残して、彼のもとからいなくなってしまったのだ。

そう、2通の手紙。

1通は博士宛だった。

内容は、何も言わずに出て行くことを赦してほしい、ということと、博士の健康管理のこと・少年探偵団への気遣い等、12枚にわたって綴られていた。

そして、もう1通は江戸川コナン宛に。

何を書いてあるのかは6年経った今でもわからない。誰も。その手紙を貰った彼でさえも。

なぜなら今でも彼は封を開けることをしていないから。

博士の手紙のように分厚くはない。多分1枚しか入っていないだろう。それほど薄っぺらなもの。

それなのに開けなかった封筒。読まなかった手紙。

何に對しての怒りだったのか、何に對してあんな苛立っていたのか、今となつては自分でもわからない。

ただ、あのときは一生読むつもりはなかった。

なのに――。

「あー、くそっ!」

コナンはがばつと突然体を起こした。そして彼は苛立ちを紛らわせるように頭をくしゃくしゃつとかき回す。

――眠れない。

手紙のことが頭から離れない。今更のことなのに、どうしてもその感情が頭の中にこもつて、出ようとはしてくれない。

彼はそのイライラを紛らわすために部屋を出た。水でも飲んで頭を冷やしたかった。

1階に続く階段をひたひたと裸足のまま上り、居間を通つて――

――そこで彼は足をひたりと止める。

暗い居間にいる怪しい人影。熊のような大きなものがもそもそと動いている。

「……っ!？」

コナンは思わず壁に身を隠し、警戒した。

しかしその警戒はすぐに解かれる。そこにいたのは、この家の家主である博士の姿だった。

安堵の息を吐いて、やれやれというようにコナンは肩を小さく竦める。

どうせ腹を空かせて居間に置いてあるお菓子のストックでも探しているのだろ。相変わらず食い意地が張つて、だなんて失笑しつつ。それでもこの暗闇の中に動くその姿はあまりいいものではない。

「おい、起きてるんなら電気ぐらい……」

言いかけた言葉は、そこで止まってしまふ。
目の前の光景があまりに衝撃過ぎて――。

目が慣れてきた、その二つの目に映し出された真実――

彼は。

博士は、泣いていた。

灰原哀の写真立てを抱いて

肩を、全身を震わせて。

声を押し殺して。

――ただ、泣いていた。

吉田歩美が、円谷光彦が、そして窓から顔を出した帝丹中学2年B組の殆どの生徒が、校門の前でタクシーに乗り込む緋色の髪の少女を見たあの日から既に一週間経っていた。

時刻は夕方5時を過ぎていた。

もうすぐ学校は終わりであるはずなのに、それでも光彦は、真剣な面持ちで今もパソコンに向かって、キーを打ち続けている。ある情報を探して。

ある一人の少女——灰原哀が自分たちの前から姿を消した前後の事件。

6年前、江戸川コナンと灰原哀がともに帝丹小学校を休んだあの日から、彼女が姿を消した日までの2週間。そこには一体何があるのか。自分たちが知らないところで一体何が起こっていたのか。何故彼女が姿を消さなくてはならなかったのか――。

何もわからなかった。それが自分自身もどかしくて、仕方なかった。

一度は諦めたことだった。しかし、一度『彼女』に出会ってしまったらそれを確かめないわけにはいけなくなっていて。

心が騒いでいる。

早くその事実を調べなくては。

”早く、早く……”

目に見えない誰かに背中を押され、急かされているかのように、彼はひたすらキーボードのキーを叩き続けていた。

「…見つかった？」

光彦は長く続いた悪夢から目覚めたようにハッと我に返り、キーを叩く手を止めるとバネが弾いた時のような動きで振り返った。

――歩美だ。

彼女は光彦の隣に立つと、パソコンの画面を興味深げに覗きこむ。そんな自然体の彼女を見ているだけで、強張っていた表情が、気持ちがほんの少しだけ緩まった気がする。

「いえ、それらしいのは未だ…」

力なくその言葉を漏らす光彦に対し、「そつかあ…」と、歩美は落胆した表情を隠せずにいた。

「もう、結構探してるんですけどねえ。…僕が見落としているだけなのかな」

「…やっぱコナンに聞いた方がよかつたんじゃないのか？」

げんなりした顔で、奥の本棚から分厚い本を抱えてやってくるのは元太。そしてそれを重たそうにどさつとパソコンの机の上に置いた。そんな彼に対し、光彦は呆れたような視線を送る。

「甘いですね、元太くんは。コナンくんが教えてくれなかったからこんなことやらずにちゃんいけなくなつたんじゃないですか」

「…6年前に、ね」

歩美が寂しそうにその言葉を補足する。

「…そつか、そつだよな。…でも灰原が帰って来た今なら」

彼はそこまで口にしてから、ま、無理だな…とため息混じりに呟いた。

あの女性は実際彼女なのかすら、誰にもわからないから。

信じたい気持ちではいたけど、確信があるとは言い切れない気持ちではいたのは事実だ。

だからこそ知りたいのだ。自分たちに何も告げずに消えてしまった彼女が、また6年経ってこの場所に戻ってくる意味はあるのか。コナンにも、博士にですら一切連絡を取らなかった彼女が、急にこの帝短中学校に戻ってくることはあるのか、と。

コナンの言うとおり、別人なのかもしれない。来年度転入してくる、髪を染めたちょっとヤンチャな女の子なのかもしれない。一種の願望だったのかもしれない。けれど、歩美も、光彦も、直感を信じた。

彼女は、灰原哀だ、と。

その日から、気がつけば光彦は図書館に閉館までいるようになっていた。パソコンの中にある新聞の閲覧サイトで、コナンと哀が同時期に長期にわたって欠席した空白の3週間だけでなく、その前後数ヶ月にわたって、小さな事件から大きな事件までくまなく探すことにしたのだ。そうして、気がつけば歩美や元太も手伝うようになっていた。歩美だけでなく、気になっていたのは元太だって同じだった。

探しても探しても見つからない。闇の中で空を切る感覚。手がかりなんて何もなくて。

こんなことをしなくても、教えてくれれば全てわかることなのに。

3人の間に、暗い空気が立ち込める。長い沈黙。考えていることは、一緒だったのかもしれない。

「なあ……」

その沈黙を破ったのは他でもない、元太だった。低く、唸るような声で、続けてその言葉を発した。

「俺らってあいつにとってどういう存在だったのかな。灰原もどうして俺たちに相談してくれなかったのかな。何で、何であいつら、自分の中に閉じ込めちゃったんだよ……」

光彦はその言葉に思わず元太を凝視した。元太の人一倍大きい体が、なぜか誰よりも小さく見えた。

「元太くん……」

歩美は元太に近寄り、そつと優しく彼のその厳つい肩に手を置く。『言えなかったんだよ、きっと。いつか哀ちゃん、言ってたじゃない。』『「サヨナラ」はお互いの気持ちに針を刺す哀しい言葉』だって」

歩美の言葉に、元太は激昂したのか、その手を振り切って彼女を睨んだ。

「だからって……サヨナラも言わせてくれねえだなんてずりいよ！何が友達だ、何が少年探偵団だ！コナンだってあれ以来……」

「元太くんっ」

すごい剣幕でその言葉をまくし立てる彼に対し、光彦は慌てて歩美の前に立ち、できるだけ紳士的に嗜めようとした。歩美も既に泣きそうな表情で。

こんなの、いつもの元太ではない。彼はそう思っていた。

「元太くん、その話は6年前さんざんしたじゃないですか。どうしちゃったんですか？少年探偵団だって随分前に活動休止したはずでしょ？今更そんなこと蒸し返すなんて」

最後まで言えなかった。元太が、彼の胸ぐらを掴んでいたのだ。一瞬、ぐえ、と喉が小さく鳴った。ウシガエルのような低い声で。

「だったらオメーだって灰原のことなんか忘れちゃえよ！あいつは俺らに何も言わねえで消えたんだ。もう、俺らと連絡なんてとるつもりはねえってことだろ？そうだ、最初っから俺らなんてどうでも」

「なっ……」

頭のどこかがぶつつん、と切れた音がして。

気が付けば目の前の大きな幼馴染である彼を、その拳で思いつきり殴っていた。彼の巨体が大きくよろけ、机の脚に派手にぶつかる。その衝撃で、机が元の位置より1、2メートルずれたときに生じた音。そして机の上にアンバランスに置いてあった本が2、3冊ばさばさと落ちる音。きやあつ、という歩美の悲鳴。

3人しかいないこの広すぎる図書館にこれらの声や音、耳に聞こえるものが響き渡るのは当然のこと。

「み、光彦」

元太は怒ることも忘れ、信じられないという顔で光彦に目をむいた。

「光彦君」

はあはあ、と息を切らして、ぶるぶる震える拳をそのままに、光彦は目の前の親友を睨みつけて。

「…元太くん、見損ないました…。コナンくんだけでなく、君まで変わってしまったんですね」

どうしても、どうしても言葉にならなくて。
たまらなくなつて、彼は教室を飛び出した。

「光彦君！」

バタバタと歩美が追いかけてくる足音が聞こえる。懸命に自分を呼ぶ声。

しかし、その音を振り切るようにして、彼は駆け続けた。涙が瞳からポロポロ流れていくのを、誰にも、特に歩美だけには見られなくなかった。

彼の中で。

円谷光彦の中で、灰原哀のことを忘れたことは、今まで一度足りとてなかった。

そして永遠に忘れることはないだろう。例え、周りの全てが彼女

を忘れてしまおうとも、自分だけは……。そう彼の中で決め込んでいた。

江戸川コナンと同じ匂いを持った少女。

優しくて、ミステリアスで、魅力的な少女。

ずっと、ずっと子供のころからあこがれていた。

同じ年頃の子供よりも大人びた思想を持つ彼にとって自分よりはるかに理知的で、大人びた彼女がその心を魅了したのはごく自然なことだった。

彼女が消えたとき、彼はとてもショックを覚えた。

泣き叫びたいくらいの衝動。

……でも、泣けなかった。

泣くわけにはいかなかった。

自分より辛い状況下に置かれている人たちがいたから。

その日、彼女が消えたという連絡を受け、彼女が居候していたその男の家に行ったとき、そして、

もぬけの殻になったその部屋を見たとき、彼のすぐ隣には、白い力チューシャの女の子がいた。

同性の中では、最も哀と近づいていた女の子。

彼女をあるときは信頼できるお姉さん、またあるときは誰よりも大切な友達として慕っていた女の子。また、彼女が一番大切にしていた女の子。

泣きじゃくり、哀ちゃん、哀ちゃん、と何度も彼女の名前を呼んでいた。

守ってあげなきゃ、と思った。

そしてすぐ目の前には、彼女と1年と少し、居住生活を共にした男がいた。

放心状態で、ぼんやりその場に突っ立っていたその男。

彼には、何故彼女が本当の家族と生活をせずに、親戚と呼ばれるその男と生活を共にしているのかが

よくわからなかった。彼女が転入すること、自分の家に居候すると言ふことさえも、その男の口から少しも聞かされてなかったから。

離婚とか、両親の死とか、突然のことだったのかもしれない。

それほどまで、彼女は精神的に塞ぎこんでいた。

しかしこの1年と少しの中で、彼女がどんどん笑顔が出てきたのを、彼は知っている。

優しさ、いたわり、彼女が少しずつ彼らに見せてくれたことを知っている。

彼女がその男に見せるその表情、言葉がけ、それは彼自身が自分の両親に向けるそれらと何ら変わりはなかった。

そう、もう2人は家族だった。

それなのに、自分の娘同然に見ていた彼女が手紙だけを残して消えてしまった。

その気持ちはさすがに計り知れない。

そして――。

そして。

隅の壁に力なく身をもたげているのは黒縁眼鏡の少年。

彼女が少年探偵団の中で・・・いや、おそらく彼女が関わってきた全ての人の中で誰よりも信頼していた少年。

お互いを認め、いつも自分たちが知らないところでミステリアスな会話を続けていた。

光彦はうらやましかった。

彼女がその少年を見つめる目。彼女がその少年を語るときの表情。

自分たちに対してのそれとは明らかに違っていたから。

そのときの彼女は、いつも女の子の目をしていた。

その少年を見つめるときの、幼馴染のあの子のような。

もちろん、その少年はその視線の意味に気づいていなかったようだけれど、彼自身、その少年の彼女に対する気持ちもよくわからないままであったから。

- - -しかし、彼はとうとう気づいてしまった。

彼女がいなくなったあの日にその少年の姿を見てしまつてから。

誰からも離れた場所で、一人手紙を握り締め、唇をかみ、身をかがめ、ふるふると肩を震わせて床だけを睨んでいる、その少年の姿を。

ばかやろう、とたつた一言、苦しそうに呟いた少年のその姿を。

そのときに気づいた。

その少年の気持ちを。その少年がどんな風に彼女を見ていたかということ。

きっと、きっと自分とおんなじ気持ち。

そして二人は…。

二人は - - -

光彦はひたすら走りつづけていた。

書室を抜け、音楽室の前を通り、廊下を走り、階段を下り、下駄箱の前まで来て - - -。

思わず彼は、まるで車が急ブレーキをかけたように、強い勢いで立ち止まった。そして信じられない、という表情を浮かべ、息をハアハアと切らせながらも、目の前の光景を凝視するしかなかった。

なぜなら、そこに - - -
そこに彼女がいたから。

その緋色の髪を持った少女は、校門にただ一人立ち尽くしていた。2週間前見たときと少しも変わらないその表情で。背丈とほぼ同じくらいの門に背を預け、ただぼんやりとその古ぼけた校舎を見つめていた。

夕日の逆光で、彼女の顔はよく見えない。

しかし、その背格好、その髪型――どこからどう見てもそのシルエットは1週間前の彼女と何ら変わらない。いや、逆にそれは確信に変わっていた。何の根拠があるわけでもないが。

光彦はあわてて靴に履き替えると、そろりそろりと彼女に近づいていく。校庭の端を通り、緑に身を潜め、もう彼女に逃げられないように、辺りをきよきよと見渡しながらじりじりと間合いを詰めていく。そして彼女にあと3メートルほどまで近づいたとき、ばたん、という車のドアが閉まる音とともに、その声は聞こえた。

「哀くん・・・っ！」

低くしゃがれた、初老の男の声。そしてどたどたと駆け寄る重い足音。

その声に、はっとして少女は振り返る。光彦はその少女の顔を見て、思わず息を呑んだ。先ほどまでその場所からは緋色の髪しか見えなかったが、彼女が顔を動かしたことで、はつきりその顔を確認することができた。

彼女は美しすぎた。

丸みを帯びた逆三角形の輪郭。

透き通った乳白色の肌。

つーっと長く真っ直ぐ横に伸びた形のよい眉毛。

猫のような、大きなアーモンド型が印象的な目。

光の加減で、角度によれば翠がかった色にも見える瞳。

長くつややかに輝^{ひか}るビロード色の睫毛。

鼻筋が通った小鼻。

ぷっくり熟した薄い桃色の唇。

そして――ウエーブがかった緋色の髪。

そう、それは紛れもない灰原哀だった。

1年と少しという同じ時間を共有してきた彼女の、灰原哀のその横顔だった。

「はい…ばらさん」

思わず呟き、涙がこぼれそうになって。

光彦はこくり、と唾と一緒にその気持ちを飲み込んだ。

「哀くん、…哀くん、ワシじゃよ」

彼女を呼ぶ力ない、しかしどこか縋るようなその声がすぐ傍で聞こえる。

光彦の場所からはその主の姿は見えない。

しかし、光彦は始めにその声を聞いた時点で、それが誰なのかはすぐに察することができた。

「はか、せ…」

震える声で、彼女は言った。

やっぱりだ。もう数年も逢っていないはずなのに、彼女はしっかりと覚えていて。

泣いているようで。ズキンズキンと胸が痛んだ。

「哀くん…っ」

男の声と、そして近づく足跡。
もう、我慢できない。

耐え切れなくなり、彼もまた哀の方へ行こうとしたとき。

「ごめんなさい、私……」

掠れた、生気のない声が彼の耳を通っていった。

そしてそのすぐ後で、彼の目の前で彼女がゆらりと動き……。――。

その動きを見るや否や、彼は彼女の許へ駆け込んでいた。

「……灰原さんっ!!」

「哀くんっ」

どさりっ

彼らが駆け込んだときには一歩遅く、彼女はその場に崩れ落ちる
ようにして倒れていた。

++++

阿笠邸 居間。

自分以外誰もいないこの家に、江戸川コナンは携帯電話を片手に、
熱めのブラックコーヒーを飲んでいた。

「……んで？」

コナンは電話の相手に対し、ため息混じりにこう尋ねる。

「俺にどうしろつつうんだ？まさかオメー、その茶髪の子を治し
てやれ、だなんて言うつもりじゃねえだろうな」

「茶髪の子じゃなくて、灰原さんです！そんな不良娘みたいな言
い方やめてくださいっ」

電話の向こうで光彦が声を張り上げる。

その勢いに飲まれ、彼は思わず失笑すると、コーヒーを一口喉に流し込んでから、「まあ、どうでもいいけど」と呟いた。

「どうでもよくないですっ」

案の定、彼の少しトーンの高い声が強く返ってくる。相手は明らかに興奮している。怒っている。しかしそこはあえて聞き流すことにした。

「…大体その女がアイツだって証拠、あるのかよ」

言いながら、あるはずがない、彼はそう思っていた。

またその少女はオメーらの見間違い、あるいは勘違いだと言うつもりだった。大体彼女がいまさらこの学校を訪ねる意味もない。そう決め付けていた。

それなのに彼が聞いた言葉は・・・。

「ありますよっ！だって…博士を見て、灰原さん、ごめんなさい、って…『ごめんなさい、私』って、彼女そう言ったんですよ」

光彦の言葉に、思わずぎょっと目を真開いて、少しも乱れてもないそのさらさらとした髪を苛立たしげにくしゃりとかきあげる。彼の言葉はさらに続いた。

「顔だって、声だって、…掠れてはいますが、でも…。何もかも、あのころの灰原さんそのままなんです！」

切羽詰った彼の声。そんな彼に対して、思わず、ふうっと溜息が零れる。

「それで？その女の容体は？今にも死んじまいそうなのか？まさか不知の病とか、そんなのにかかっているわけじゃねえだろうな」

「いや、それは大丈夫だと思いますが…。多分過労が原因だろう、と」

ふうん、とコナンは呟くと、飲みかけのコーヒーを棚の上に置き、ぼんやり朦朧と卓上カレンダーに目をやった。電話の向こうの彼は、彼の反応にさらに声を張り上げる。

「ふうん、じゃないですよ！彼女、一晩入院して様子見るようですよ…。コナンくんは一体どうするつもりなんですか！？」

「…どうするつもりだったってなあ。何オメーがそこまで興奮してるかわかんねーけど入院してんなら安心だろ」

「ですけどっ」

「あのさあ、光彦。わりーけど」

光彦が何を言いたいかはわかっていた。でも、コナンはあえて言葉を上から被せる。

「おまえらが何を言っても、俺はここにいろし、事件があつたらそっちへ行く。誰だかわからねえ女の看病をする余裕なんて今の俺にはねえから」

彼が言ったその言葉の後に、短い沈黙が流れた。そうして、諦めたような光彦の声。

「わかりました。コナンくんは嫌でも彼女を灰原さんと認めようとしないうです。博士が彼女を灰原さんだと認めても」

その声は淡々としていた。

「バー口、身元証明するもんなんてねえんだろ。それが仮に灰原にの姿形だったとしても…本人かさえもわかったもんじゃねえ。整形だつて今じゃ簡単にできるし、それに」

コナンはそこで言葉を一度切った。たとえ話を言おうとしたが、彼に言うのが憚られたのだ。案の定、怪訝そうに受話器の向こうで光彦が聞き返す。

「それに？何ですか？」

その問いかけに、コナンは、「いや、なんでもねえ」と小さく笑った。そして、

「とにかく、俺はそっちへ行く気はねえから」

と呟いた。受話器越しに、光彦の落胆した深いため息が聞こえる。

「そうですね。コナンくんは忙しいですもんね。わかりました。

僕が…僕が博士と一緒に灰原さんに付き添います。あなたは好きな探偵の仕事でもどうぞおやりになってください。」

「他の奴らは来ねえのか？歩美とか、元太とか…」

訝しく感じて、コナンが訊ねると、何かがありそうな答えが返っ

てきた。

「歩美ちゃんにはもちろん伝えますが、…元太くんとはしばらく顔を合わせたくないんです」

「そっか」

その先は聞かないことにした。何かあったな、とは推測できたが、今の自分はそれを聞こうとする気はなかった。今の自分には心の余裕なんて、なかった。昔の自分だったら違っただろうが。大人になったのか、それとも、心が廃れただけなのか。

「…それでは、お忙しいのにお電話して、失礼しました」

沈んだ声で彼が言う。コナンははっと我に返った。

「あ、おう」

がちやり。

いつになく乱暴な切り方だと感じるのは気のせいだろうか。いや、おそらく気のせいではないだろう。

コナンは深いため息をつく、少し温くなったコーヒーを一気に喉の奥に流し込み、それからソファに体を沈ませるようにゆっくりと腰をおろした。

イラつく心。ざわざわと騒ぐ心。

とりあえずリモコンでテレビをつけてみる。このイライラをどうにかして抑えたかった。

チャンネルを一通り回し、彼の興味を引くものが何もないのを知ると、再びリモコンをテレビに向け、オフにした。そしてちつ、と舌打ちをすると、ソファにリモコンを叩きつける。彼の心の中にあるこのイライラは、一向に治まるわけはなかった。

…だつて…博士を見て、灰原さん、ごめんなさい、って…

先ほどの光彦の言葉が頭に浮かんでくる。コーヒーを再び喉の奥に流し込もうとして、その手を止めた。

「バーロ…謝るんなら、何でもつか行っちゃったんだよ」

そう切なそうに、どこかその苦々しくその言葉を吐き捨てるように呟いた。そしてそれが無意識に出た言葉であることに気づいて、思わず口を押える。

それから、目線を下に下ろし、じつと自分の手を眺める。

あのころから随分成長した、大きい手。

確実に工藤新一であつたころの自分に近づいていく体。

ソファから立ち上がると棚の上にあつた写真立てをそつと手にし、その表面をそつと撫ぜる。

あの日。

ちようど1週間前の夜、博士はこれを抱いて泣いていた。

そこに写っているのは、灰原哀、ただ一人。

小学2年に上がる前だったか、博士が新しいカメラを使いたくて彼女を被写体にしたという、普通のサイズより一回り大きい写真。

写真の中の彼女は笑っている。

小さいままで。

あのころのままです。

コナンは再び大きく深いため息をつく、その手入れが行き届いた写真たてを棚の上に伏せて置いた。

今、頭の中にあるのは、灰原哀のことしかなかった。

考えたくないのに。

またも光彦の一言で自分は惑わされている。

そもそも、これほど彼女のことを考えるようになったのは、1週間前、阿笠邸の玄関で彼のあの言葉を聞いたからだ。

- - 灰原さん、ここにいます！この町にいますよ、博士！

あれから自分の思考回路はいかれてしまった。

今度誰かに哀の話をされたら、今度こそ自分はおかしくなってしまうかもしれない。

それにしても、自分は一体何がしたいのだろうか。

そうして、彼らは何を自分に求めているのだ？

逢わなければいけないのだろうか、その女に。

逢いたいのだろうか、その女に。

もしその女が灰原だったらどうするつもりだ？

灰原じゃなかったら - - ？

- - 頭が痛くなりそうだ。

その日は星がいつもより数段綺麗な夜だった。

彼と私は、土手に二人肩を並べて空を見上げていた。

キラキラと何億もの星が輝く夜空。

一点の曇りもない、澄み渡った紺の空。

その上にポツポツと白い星が置かれていて。

宝石のように、小さくそれでいて自己主張しながら。

私たちは、それを静かに見つめていた。

何を言うわけでもない。何をするわけでもない。

ただ、じっと。

肩を並べ、同じように呼吸をし、けれども一言もしゃべらず。

ただ、じっと空を。

空を見上げていた。

そして私は時折、彼に気づかれぬようにその横顔を盗み見る。

言おう言おうとする言葉。

喉から出掛かっている言葉。

でも、それはなかなか発することができなくて。

彼が私のそんな微妙な表情に気づき、ニカリと白い歯を見せた。

・・・そう、それは組織のアジトに乗り込む前夜のこと。

眠れなかったあの日。

私が何度止めても、どうしても行くと聞かなかったあの日。

不本意にも彼の前で大泣きしたあの日。

家にいつものように何でもないようにやってきて、いつものように会話をする彼を見てられなくて。

それでも明日行ってしまうことは現実で。いつものように、悔しいくらいに冷静で、穏やかな表情をして。

そんな彼が許せなくて。考えをやめてほしくて、何度も何度も彼の肩をゆすりその小さな胸板を拳で叩き、泣き叫んでいた。

行かないで、死なないで、と何度も訴えた。

鼻水も涙もそのままに。

それでも止めたかった。

哀れに思われてもいい。無様な姿を晒してもかまわない。彼に嫌われたって・・・

それでもよかった。

彼が行かない、組織とは戦わない、と言ってくれさえすれば。彼がここに残っていてくれさえすれば。組織と戦うことを諦めてくれさえすれば。

・・・なぜなら、彼に死んで欲しくなかったから。ずっと生きて欲しかったから。

それなのに。

——ごめんな、灰原。俺は行くよ。行きたいんだ。でも、死なねえ。だって…俺を待ってるやつがいるから。

決意を秘めたその言葉。

遠くを真っ直ぐ睨みながら、彼はむしろ自分に言い聞かせるようにそう言った。

それから今までの表情がまるで嘘だったように笑ってハンカチを私にそつと差し出した。

——な、灰原。オメーも、待っててくれるんだろ？

屈託もない優しい笑顔で。

そして私は、彼を送り出すことを決意した。

その先に私たちを別つ残酷な運命が待ち構えているとは知らずに。

+++

その少女が目覚めたのは、見知らぬ部屋のベッドの上でのことだった。

白い鉄パイプで作られたベッド。シンプルな形のベッド。シンプルな棚にシンプルな照明器具、そしてつんと鼻につくようなアルコール系の薬品の匂い。これは消毒液だろうか。少女は目をきよるきよるさせて辺りを窺った。くらくらとした頭で考える。ここは……
「……びよう……いん？」

そう呟いたとき……

「おはよう、ようやく気がついたようじゃのう？」

少女はそのしわがれた声にはっと体を起こした。そして怖々と声のした方を振り返る。そこにいるのは、少女が嘗てからよく知っていた人物。

薄い禿頭、まん丸な顔立ち、丸メガネに、丸くて大きな鷲鼻、そして白い口髭……。一目見て、いや、すぐに彼だとわかった。

特徴的なものは、少しも変わっていない。ただ、実年齢よりさら

に老けて見えるようにはなっていた。それは自分の所為だというのは彼女自身痛いほどわかっていたから、彼の顔を見たたん、ズキンズキンと心臓が疼いた。

「博士…」

少女は呻くように小さくその名前を呼んだ。目の前にいたのは確かに博士だ。そうして、彼はきっと自分のことをわかっていると彼女は確信していた。

「あの…私…」

だから。

だから、謝ろうと思っていた。――いや、謝らなくてはいけな
いと思っていた。うまく言葉が出てこないけれどもそれでも、言わ
なくてはいけないと――。

けれど、彼女の言葉を待たず、博士が震える声でこう言った。

「哀くんなんじゃな？」

「え…？」

思わず聞き返す少女に、博士は強い口調でもう一度その言葉を繰
り返した。

「君は…哀くんなんじゃな!？」

少女はまじまじと博士の顔を見つめ、その真意を探る。

そうして、全てを悟ると、諦めたような表情で、小さく震えなが
ら恐る恐る、こくり、と頷いた。

その行動を見せた次の瞬間、彼のおお、という低い呻きとともに、
彼女の視界は一瞬何かに遮られた。黒い世界。

そう。

きゅうつと力強い彼の太い両腕に彼女のその細い体は引き寄せら
れ、肉厚な彼の胸板に顔を押し付けられていたのだ。

大きくて分厚い手が、彼女の頭を包み込む。

強く、強く。

体が締め付けられるほどの強さで。

「…博士？」

戸惑ったように少女は彼を見上げた。しかし、彼の体は震えていた。彼の瞳から、大粒の涙がこぼれていて、少女の服を僅かに濡らした。

「はか…」

近くにティッシュがないか探そうと体を動かそうとするが、それも彼にきつちり抱きしめられ、何も身動きが取れず、どうしても離してくれなくて。震える肩が痛々しくて。彼の慟哭は暫く続いた。

「…この、親不孝ものめが！」

声にならない声が、涙でくぐもったような声が耳を劈く。

自分を泣きながら叱ってくれている。

家出娘をしかる父親そのもので。その言葉に、涙にどれだけ自分を心配していたか、如実に物語っていた。

「…ごめんな、さい…」

少女——いや、灰原哀は震える声でそう言った。謝るしかなかった。彼女の瞳からも、気がつけば涙があふれ出ていて。

哀の気持ちの中にあるのはただ、後悔だけ。

戻ってきてしまった後悔と、彼を泣かせてしまった後悔と。

極端に言えば二つは反対の位置にあるから、よけいに困る。それでも存在するのだから仕方ない。どうしていいかわからなくて。

「ごめんなさ…」

再び呟いたその言葉を耳にして、彼女を抱きしめる彼の腕の力は急速に弱まった。そして、震えたその太い腕で、哀を自分の体からゆっくりと離すと、袖で涙をこしこしと拭いてふっと微笑する。

「…おかえり、哀くん」

「っ！！！」

その言葉に思わず言葉を詰まらせた。

6年前のあの時と同じ科白。

しかし彼女はあの時と同じようにただいま、とは言うことができ

なかった。それは彼がその言葉を頓使して言ったことではないとわかっていった。それでも。その言葉を聞いてまるで金魚鉢の中の餌を待つ金魚のように、口をぱくぱくさせていることしかできなかった。『ただいま』なんていう言葉、今の自分には言うことができなかった。

「…哀くん？」

博士は怪訝そうに哀を見つめてくる。

その純粋な瞳がどうしても見ることができず、哀はさっと視線を逸らした。

そんな彼女の姿に、博士は寂しそうに静かに笑うと、ああ、そうじゃそうじゃ、と何か思い出したのか、それまでとは打って変わって明るい調子で言った。

「ほんのさっきまで光彦くんが来てくれてたんじゃよ。救急車と一緒に乗ってくれたのも彼じゃし。」

あと10分遅くここに残っていれば、君とこうやって話ができたのにのう…」

光彦くん、その名前に懐かしさを感じ、哀は思わず目を細める。そういえば、昨日、薄れ行く意識の向こうに、精悍な顔立ちの少年がうつすらと見えたような気がした。

あの少年が円谷光彦だったのだろうか。

そう思っていたそのとき、院内放送がメロディーに乗せられて流れてきた。

聞き取りやすい女性の声で。一瞬聞き流した後、とあるフレーズに思わず耳を疑った。

「がさ…ろし様…どがわ様からお電話が入っております」

（…まさか。）

繰り返し言う院内放送に、今度は聞きこぼれないように、耳を澄

ませてみる。

案の定。

『米花町からお越しの阿笠^{ひろし}博士様。江戸川様からお電話が入っております。至急お近くのナースセンターまでお越しください』

――博士あてに届けられた電話。彼の名前を聞くと、胸が再びずきりと痛んでくる。江戸川コナン。彼はこの場所を知っていて、いつでも来られる状態にいるのだ。そう考えたら、俄か現実感が帯びていく。

6年前のあの日、たった一つついた嘘。破られた約束。
あの時の感情は、罪悪感は、時が流れて広がる一方で。
思わずぎりり、と下唇を噛み締めた。

「…新一から電話じゃ。珍しいな、何じゃろ？」

博士は哀を抱きしめていたその手を解くと、首をかしげて呟いた。
「哀くん、そこでおとなしく待つとるんじゃないぞ？その体でどこか行こうだなんて思うんでないぞ？」

気持ちを察したのだろうか、彼は心配そうに哀に忠告した後、よたよた入り口の方へ向かった。そして名残惜しそうに一度踵を返し、彼女の存在を確かめるようにじっくり見つめてから、ゆっくりとした足取りで病室を後にした。哀はそんな彼の後姿をぼんやり眺め、小さくため息をつく、毛布をかぶり、ごろりと横になる。

逃げる気はなかった。

これ以上博士を悲しませたくない。

別れるときは、今度はきちんとこの口で言うつもりだった。

もう、これ以上誰かの涙なんて見たくない。

だから。

彼女はゆっくり目を閉じた。

しばらくはこうやって体を休めておこう。
今はこうして・・・

米花総合病院から目と鼻の先にある喫茶店『MERRY』。

江戸川コナンは、そのレトロな喫茶店の奥の席で一人ケータイのゲームをしながら時間を潰していた。カランコロンというドアベルそして「いらつしやいませ」という店員の声に、彼はケータイを弄りながら、ゆっくりと視線を上げる。そこには彼が誘った相手、阿笠博士が少し不機嫌そうな顔をして立っていた。そんな彼に対して、コナンは思わず苦笑いを浮かべた。

「…まったく。ここまで来とるんなら、病室まで来たらどうなんじゃ。哀くんだってどんなに喜ぶか…」

フカフカの椅子に座り、コナンが博士のために頼んでおいたフレンチトーストがタイミングよくテーブルの前に置かれると、彼は早速それを切り分けることに取り掛かった。その作業をしながら、彼は眉を顰め、コナンを責めたてる。いつにも増して、攻撃的だ。

そんな彼に対して、コナンは大きく溜息をついた。

「…なあ、そのことなんだけど、さ…」

一度言葉を切り、居住まいを正して目の前の未だ解せない表情の博士に声をかける。

「…？」

きょとんとした表情で、博士はコナンの顔を窺う。

「今更かもしんねーけど…その女って本当に灰原なのか？」

博士は一瞬ぼかんと口を開けてコナンを見ていたが、急に可笑しそうに笑い出した。

「何じゃ、まだ疑っておったのかの。哀くんじゃ。間違いない。彼女は灰原哀くんじゃ。…しんい…君は、あの子が他人の空似かと言いたいんじゃない？」

「…？あ、ああ」

「他人の空似であるもんか。人間、世界に3人は自分と同じ顔がいるとは言われているが、あれは似すぎじゃよ。本人としか言いようがない」

「…あのさ、博士」

「それに」

口を開き、話をしようとした新一に対して、博士はさらに言葉をかぶせる。言わせまいとしているように。

「それに彼女自身そう認めておったし。何より長年見ているこのわしが証明しているんじゃない。しんい…コナンくんはそんなわしの目は節穴だというのかね？それとも全てはあれが幻で、わしの幻想でそれほどわしの目や頭は^{もつらく}耄碌していると、し…いや、コナンくんはそういいたいのかね？」

「そうじゃねーけど」

コナンは口ごもりながら、先ほどから自分たちの周りに誰かいるような、いつもと違う少しのぎこちなさを博士に感じていて、それが何かと一瞬考え、「ああそうか」と呟いた。

自分のせいだ、と。

ほんの2日前、もう工藤新一はこの世にいないのだから、自分のことを『新一』と呼ぶなと釘を刺した。だから博士は自分のことを二人だけのときでも『コナン』と呼ぼうと努力しているだろう。と、彼なりに気にしているのだ、と。

…とは言っても、今になっての約束じゃない。それは、幾度となく博士と自分との間で話してきたこと。博士だけではない、自分がもともとは工藤新一だったということを知っている仲間ともその約束してきた。

しかし、それでも周りはいつのまにか『新一』と呼ぼうとする。最初はキにしていたけれど、それでも自分が『工藤新一』として生きた17年があったのだから、『愛称』として呼ばれても仕方ない

のか、と最近では思つて聞き流すことにしていたのだが――なぜか、あの日はイライラして言わずにいられなかった。

灰原哀という存在が目の前にちらついたのである。

自分をこんな目にあわせた、張本人が。

思い出したくもない思い出を、古傷を、思い出さずにはいられなくなつてしまつたのだろうか。

彼女のせいだ。

だから、彼に――

博士に八つ当たりしてしまつたのかもしれない。

自分らしくもない。

――いや、もう既に周りが言う自分らしさは、とつくに捨ててしまつたのかもしれないけど。

だから、今日こそは落ち着いて、博士と向き合おうとそう決めていたのに。

「別にオレは博士がボケてるとか、そう言いたいんじゃないよ」

「じゃあ、何じゃ？幽霊とかドッペルゲンガーとか非科学的なことを君は」

「違うよ、そうじゃない。博士、聞いてくれ」

「何じゃ」

拗ねてしまつたのか、少し口を尖らせ、博士はぶすりとフォークでフレンチトーストを刺し、大きく口にほお張つてみせた。が。

「真面目な話をする」

コナンが急にその言葉どおり真面目な顔をするから、博士は慌てて姿勢を正すとフォークを皿の上に置いた。

「たとえばその人物が本人じゃなくても、近親者すら本人だと思わせる方法があるんだ。整形とかそういう大掛かりな方法じゃなくて

たとえば昔、そう。蘭でさえもオレではない別人を俺と信じてしまったことがあったように……」

「暗示、か？催眠術とか」

「…はあ？そんなことされた覚え、あんのか？…光彦とかも」

「いや…わしらはそんなことはされた覚えはないし、あの子は哀くん本人じゃと信じているけどもじゃな…っ。あの蘭くんがまさか新一君と誰かを勘違いするとかは信じられんから…」

しどろもどろになる博士に、コナンは思わず苦笑し、カップを手にして少し温ぬるくなったブラックコーヒーを一口飲んだ。博士はあのころのことを忘れてしまったのだろう。博士にとっては、日常のほんの一握りのことだったから、当たり前なのかもしれないけれど。

「博士が忘れてんだったらしゃーねーけどさ。あっただよ、そういうことが。それに、その方法だったら博士も光彦も、オレでさえももしかしたら騙せるかもしれないねえ」

「…それは、なんじゃ？」

「マスクだよ」

コナンはまっすぐ博士を見つめたまま、口の中でその言葉を呟いた。博士は思いもかけないその言葉に、はあ？と怪訝そうな顔をする。予期していた言葉ではなかったのだろう。そんな彼に対して、コナンは俄か顔を顰めた。

「おいおい、まさかホントに全部忘れちゃったのかよ。ベルモットやキッドが使うあのマスクだよ。あいつら持っているアレなら本人そのものにへんし…っ。って、そいつらの名前くらい、覚えてるよな？」

途中まで滑舌に喋っていたコナンはピタリと話すのを止め、おそろおそろ確かめるように聞いた。

「勿論覚えておる。けどな、第一そんな哀くんのマスクなんてどこから手に入れるというんじゃ？作りようにも、あんなに本人そっくりにするには、キッドや組織の力しか」

「そう」

博士の話がまだ終わらないというのに、コナンは言葉を上から被せる。

「組織だよ。壊滅していたはずの組織が実は残っていて、そしてその中にベルモットみたいに顔を自由自在に変えることができるやつがいた。覚えているだろ、ベルモットのほかにも以前顔を変えてオレらの前に現れたやつ。何百はいたあの大きな組織の中で、そういうやつが1人が2人くらいはまだ残っていたとしたら。灰原の顔を作ることくらい簡単なんじゃないのか。何しろあいつの顔は組織には十分知れ渡っているんだから。オレや博士以上にあいつの顔を覚えているし、オレらの知らないデータだって沢山持つてる。マスキを作るなんて容易いことだと思わねえか？」

そんな彼の言葉に、博士はまさか、と呟いて、そして鼻で笑った。「それこそ今更な話なんじゃないのかのお？なぜ今になって組織がわしらを殺そうとするんじゃない？万が一今がわしらを殺す絶好のチャンスだったとしても、わざわざ哀くんの姿にならんでも」

「それは組織が卑劣で残酷な集団だから。いや、もしかしたらそれは誰かに頼まれたわけでなく、組織への忠誠心から行動を起した。大ボスを俺たちが自害させたのを根に持っていたのかもしれない。俺のことが憎かったのかもしれない。そして俺の仲間も。」

だから一番苦しむやり方で俺らを殺したかった——。そう考えたらどうだ？」

「何？」

博士の意味のわからない、という暗黙の抗議に対し、コナンは苦々しく笑って補足した。

「つまりこういうことだ。一度灰原の姿で俺らに近づき、そしてしばらくしたら殺す。信じてたのにまたしても裏切られた、という思いを埋め込ませるために。死ぬ瞬間まで俺らのことを果ての果てまで苦しめようとして…そして、いつかここに來たあいつに対して。自分を含みながら死んでいった苦しみを味わわせるために。…やつらはそういうヤツなんだ。…わかるだろ？」

コナンはそこまで言って言葉を切った。フレンチトーストをナイフでさらに切り分ける手を止め、彼が神妙な顔をして自分を見ていたからだ。

「…なんだよ、その顔」

不機嫌なコナンの様子に、博士は少し困ったような表情をして、でも再びゆるゆると口を開いた。

「…のお、新一。君が彼女を灰原哀ではないと思うのは何故じゃ？」

「バー口、誰も頭から否定してるつもりはねーよ。ただ、ただ万一のことを考えて」

「…『万一』のお」

さらりと言ってみせたその言葉に対して、思いのほか博士は反応した。どこがどう引つかかるというのか、コナン自身わからなくて。

「…気持ち悪いいな、何が気になるんだよ、博士は」

きっとその女を『灰原』と信じきってるからこそその足掻^{あが}きだ、と彼は思っていた。しかし博士自身、純粹に何かを思っ^あての発言のようであると思うにおした。

「新一にしては慎重すぎると思っ^あてのお。…本来の君は、一つの疑惑があると、すぐに行動に出る男じゃなかったかのお？組織のことで何か心配事があれば、すぐさま行動にうつす。それが君じゃなかったかね？それをしないのは」

「…」

彼が言葉を切ったのに、自分をじっと見つめているのに、コナン自身は何も言葉を返すことができなくて。ドクン、ドクンと胸が何度も波打って。

「君が一番よくわかっているんじゃないのかね？」

「…」

言葉が出てこなかった。

「のお、新一」

諭すように、しかし確実に突くように博士は言った。

「君は、哀くんに逢うのが怖いのか？」

「なっ…?! バーロ、何で俺があいつに怖がらなくちゃなんねーんだよ」

ようやく出た言葉が、喉の奥から出てきたため、少しだけ素っ頓狂になって。

コナンは動揺をして、思わず語調を強めた。しかし、博士はそれに一切動じることはしなかった。ただ、ため息をついてゆっくりこと言った。

「…君は自分の気持ちに嘘をついてるんじゃないか、と思つてのお」

「俺が…？」

眉に皺を寄せ、コナンは目の前の博士を見つめる。

「…ああ。ひょっとしたら君が一番哀くんに逢いたいんじゃないのかのお？最近の君はそれを無理やり押さえ込んでいるようにしかわしはどうしても思えんのじゃよ」

博士の真っ直ぐな瞳が彼の瞳の奥を見据えた。コナンは何も言えずにただ、ぎゅっと下唇を噛み締める。

「…今、彼女に逢ったほうがいいんじゃないかのお？恨んでる、恨んでないは別にして——…いや、万が一彼女が君の言うとおり哀くんじゃなかったとしても、一度話してみんことには…」

「バーロ」

今度はコナンが博士の話を遮る番だった。

「話をしてどうする？俺がそれで納得できるっつーのか？それがもし灰原だったとしても、俺が今までどおりあいつに接することができるっつーのか？…俺は、あいつに人生をめちゃくちやにされたんだぞ？」

「本当に…本当にそう思ってるのか？」

博士は先ほど切り分けたフレンチトーストの一片をフォークで刺し、それを熱いホットココアにつけながら言った。

「何？」

「哀くんが消えた後の君を見て、最初はわしもそう思った。君は哀くんのことを少しも話そうとしてくれなかったからのお。そう、6年前のあの日を境に、君はキラキラしていたあの頃とは別人のようになっちゃった。しかしそれはこの江戸川コナンという体で一生過ごさなくてはならないことに対する嫌悪感、そして哀くんのことを忘れたがるのは、この姿の原因を作った彼女に対する憎悪の気持ちからじゃと思ってた。でもそれはどうやら違っていたようじゃな」

彼はそう言うが早いか、フォークに指したココア味のフレンチトーストを口の中に放り込む。

「どういうことだよ？」

コナンは思わず声を荒げた。そんな彼に対して、博士はふっと彼を冷やかすような目をする。

「なあに、簡単なことじゃよ。今回、光彦君や歩美くんが学校で哀くん……いや、緋色の髪の女性を見たたん、君はやけに彼女を気にするようになったじゃないか。そのときに思ったんじゃない。君はただいじけているだけだったんじゃないのか、とな」

「……いじけてた、だと？」

「ああ、そうじゃ。彼女が……哀くんが君を残して一人で去っていったということ。もつと一緒にいたかったのに、何も言わずにどこかへ消えてしまったことに対する苛立ち、そして哀しみ。ただそれだけじゃなかったのかのお？」

博士はそう言う、鞆の中に手を突っ込んで「そこそこ何かを探り始めた。そして目的のものを見つけたのか、漸くその手を鞆から抜き取ってコナンの前に翳す。それを見たたん、コナンのは頭から血の気が引いていくというものがわかった気がした。

「これ、なんだかわかるかのお？」

一枚の茶封筒。

薄っぺらな封筒。

そして……、封は。

封は、開けられている。

「……っ！？」

コナンは思わず目をかつと見開き、それを奪い返そうと博士の方へ思いっきり手を伸ばした。その瞬間、がちゃん、と目の前のコーヒークップが倒れ、半分くらい入っていた紅茶が零れる。どくどくとカップの中の紅茶は零れ、白いテーブルクロスに茶色の染みを作っていく。それでも構わずにコナンはただ、博士を、博士だけをものすごい形相で睨んでいた。

「博士、どうしてそれを……。まさか俺の机の引出し勝手に開けて……」

「さあ、どうじゃろ……。それにあの机はもともとわしの研究室の机じゃったし……。それを哀くんのためにあげたものなんじゃ。君の机だなんて、わしは思ったことなんてないぞ？」

鼻歌交じりにそう言っただけで卑屈な笑いを見せる博士。

「博士、てめえっ」

コナンは思わず博士の胸倉を力の限りぐいと掴んだ。

「封も開けたんだな！？勝手に開けて読んだんだな！？」

ほんの短い間の後、彼は口元にいやらしい笑みを浮かべてああ、そうじゃ、と言った。

「……まさか6年もの間、封を開けていないで取っておいたなんて思っても見なかったがのう。知りたいのなら、わしが教えてやろうか。哀くんが何を言ったか、今ここで」

彼はぺらぺらと片手で封筒を彼の目の前にちらつかせて見せた。

「……っ！」

もう限界だ。

コナンは思わず右手を思いっきり振り上げた。

「お客様、困ります！けんかは外でやっていただかないと他のお客様にご迷惑です！」

店長らしい中年の男性が慌てて2人の間を割って入ると声を張りあげて二人を引き離れた。そしてこぼれた紅茶を手際よく布巾で拭き、新しい紅茶をポットから注ぐと、2人を軽く睨みつけてからその場を離れた。

コナンはふつつつと限りなくあふれ出る怒りを何とかして押しとどめようと、どんつと、一度拳を壁に叩きつけた。そして乱暴に椅子に座ると、博士の手からその茶封筒を引ったくる。

そしてそこで彼は気がついた。

これは、江戸川コナン宛じゃない。

――博士宛だ。

彼は開けてある封筒から焦ったようにその1枚の便箋を抜き取った。

そしてすぐさま目を通してみる。しかしその手紙が何であつたか、彼はすぐにわかることができた。これは灰原哀が博士に送った12枚のうちの1枚だ。つまり――

「……博士、てめー……はめやがったな」

彼は胸の奥から出した深いため息とともにその言葉を吐くと、その封筒をテーブルの上に投げ付けた。そんな彼の様子に、博士は肩を震わせてくつくつと笑った。

「なあに、わしはただ昔の君を真似てみただけじゃよ。犯人に決定的な証拠を自ら出させるため。自分が犯人だという証拠をな」

「証拠だあ？」

ふてくされた表情でコナンは博士を上目遣いで見上げる。ああ、そうじゃ、と博士は嬉しそうな表情で大きく頷いた。してやったり、という表情のまま。

「君が哀くんを気にかけているっていう証拠じゃよ。わしは君宛にも哀くんから手紙をもらっているのを知っていたからのお。あの手紙がどうなったか、知りたかったんじゃないよ。…まさか封を開けずにとつてあるとは思わなかったが…」

「読む気がしなかったただだよ。あの時点で、俺と灰原は切れたと思ってたし」

コナンはそういうと、目の前にある新しい紅茶に口をつけ、その熱さに思わず、あち、と呟いた。しかしそんな彼の様子に博士は表情一つ変えずに、

「なら何故捨てなかった？何故それを燃やさなかったんじゃない？」と尋ねた。

「機会を逃してただけだよ。それに手紙を燃やすというその行為自体、俺は好きじゃねーから」

コナンは博士から明らかにそっぽを向き、その言葉を吐いた。しかしもちろんそれでごまかされることはなく、博士の追及はさらに進む。

「…じゃあその読む気がしない手紙の存在を君が覚えていたのは何故じゃ？あの封筒を見せたとなん、

それが6年前の『あの手紙』だと思ったのは？あんなどこにでもある茶封筒見せられて、まさかあれが

哀くんからの手紙だなんて思うのは、それだけ君があの手紙を気にかけているということなんじゃないのかね」

「…」

答えられなかった。

博士のまん丸なメガネのレンズの奥の黒い瞳が真っ直ぐ彼の瞳を見据える。

もう、逃げられない。

コナンはふう、と胸の奥から息を吐いた。それから、わからねえんだよ、と苦々しそうに呟いた。

「何？」

博士が怪訝そうに聞き返す。

「…俺自身わからねえんだよ、あいつに逢いたいのか、逢いたくねーのか。あいつを恨んでるのか恨んでねえのか。ただ…博士の言うとおり、あの手紙のことを忘れたことはなかったし、あいつのことを忘れたこともなかった。それでもあの手紙を開けるつもりはなかった…。開けたって何も解決することじゃねえと思っただし。それなのに…」

彼は思わず俯き、頭をくしゃくしゃとかきむしった。

「光彦の話聞いたあの日から…。あの手紙が何だったのか、何でいなくなっちゃったのか…まるで

あいつが消えた直後の時のように、その考えが頭について離れなくなっちゃった。どうしていいか…わからなくなっちゃった」

喉から何か言葉が次々と飛び出していく。震える体。誰かに聞いてもらいたかった。

まさかその相手が博士になるなんて、今の今まで気づくことはなかったけれど。

「…新一」

博士がほんと彼の肩を優しく叩いた。コナンは俯いていた顔をそっと上げて彼を見た。博士は優しい顔をしていた。

「…開けなさい、その手紙を。それから哀くん…いや、今、病院にいる彼女に逢うか逢わないか決めるんじゃない。その決断については、もうわしは何も言わんよ」

「博士」

「ありがとう。…久々に君の本音を聞かせてもらったよ」

そう言って博士は軽くあまり上手ではないウイंकをして見せた。そんな彼に対して、コナンはただ黙って苦笑する。

「…じゃあ、わしは病院に戻るから…。君は先に家に帰ってゆっくりしてなさい。明日も仕事があるんじゃない？」

「…あ、ああ。群馬の山村警部のところへ」

そうか、と博士は嬉しそうに笑った。それから彼は伝票を持ってレジカウンターに行き、二人分の金を払うと、またよたよたとした足取りで再び出口の方へ歩き出す。カランカラン、と鳴るドアのベルの音。窓の向こうに映る大きな彼の影。

コナンはぼんやりその姿を見ていたが、小さくため息をついて熱い紅茶を再び口にした。が、思い直したように勢いよく椅子から立ち上がり、博士の後を追うために出口を飛び出した。

逢わなくてはいけない気がした。

いや、彼女に今、逢って話がしたかった。

手紙を読む前に、明日ここを発つ前に、彼女の顔が見たかった。

彼女が灰原哀でも、そうじゃなかったとしても。

そしてこのもやもやした霧のような気持ち晴れるのはきっとすぐ先のような気がした。

時刻はじき夜の8時になろうとしていた。

面会終了時間まであと30分。江戸川コナンから呼び出しを受けて部屋を出て2時間。あれから一度も帰ってこない博士。一体どこに行ってしまったのだろう、ふとそんなことを考えて、哀は溜息を一つついてみる。

明日、退院できると担当の医者は言っていた。しかし今の自分には帰るべき場所はない。6年間過ごしたあの町には、もう自分を迎えてくれる人はいない。

けれども、だからといってここへ居続けるつもりもなかった。なぜなら、自分はここにはいてはいけない人間だから。あの日、凍えるような冷たい地下室の中で、そう誓ったのだから。

それなら、自分はどこへ行けばいい？どこへ行けば自分の居場所はあるのだろうか……？

「哀くん、入るぞ」

突然聞こえてきた博士の声と、ドアのノックの音に反応し、哀は哀はそつと黄色のガウンを肩まで掛けなおすと、「どうぞ……」
と言って、そこにいるであろう人物を出迎える準備をする。

キィと軋ませながら開くドア。

そこには案の定、心配そうな表情で自分を見つめる博士がいた。けれど、それだけじゃなかった。

彼の隣にはもう一人。

哀は信じられない、という表情でその人物を見つめるしかなかった。

そこにいるのは、博士の隣に立っているのは、今自分が最も会いたくない、『江戸川コナン』その人だったから。

+++

一瞬、何が起きたのかわからなかった。

目の前の黒縁めがねの少年は、確かに6年前自分が裏切った彼であり。

そしてその彼の瞳は、まっすぐに自分を捉えている。吸い込まれそうなくらい透明な光を帯びて。

「…よお、灰原。久しぶりだな」

長い沈黙の後の彼の第一声はそんな言葉から始まった。

「…工藤…くん」

震える声で哀はコナンを見つめる。

信じられなかった。目の前に彼がいること自体が。

一生逢わないつもりでいたのに。彼と鉢合わせする前にまたどこかへ行こうと決めていたのに。

まさか彼から出向いてくるなんてそんなことが一生あるはずがないと思っていた。

「…どうして？何であなたがここにいるの？」

自分の目も、脳も、全てにおいて信じられない。

これは幻か、それとも悪い夢をまだ見続けているのか。

それともこれは現実で、目の前にいる男は本当に彼なのか、と。
じゃあ、何のために…

「どうしてだあ？それはこっちが聞きてえよ。何でオメーがここ

にいるんだよ、…それから、今まで何処に行ってた？」

彼は一歩一歩ゆっくりと近づいてくる。じっと自分の顔を見ていることは哀自身わかっていた。

あの、何もかも見透かしたような瞳で、ずっと目を逸らさずにいることほどプレッシャーなことはない。まるでイヌワシに狙われた小鹿のような、そんな気分。自分を小鹿と例えるのさえおかしいのかもしれないけど。

「ねえ、お願い…お願いだから来ないで！」

震える手で何とか毛布を掴むと、それを頭から被り、声を震わせて大きな声で叫ぶ。すすり泣きに近いようなその声で、彼女は彼を拒絶した。

「あ、哀くん？」

彼女の毛布越しの肩に、博士の手が置かれる。

一瞬止まりかけた足音がまた再び、ゆっくりとこちらへ向かって近づいてくる。

（来ないで。お願い。今はあなたの顔が見られないの…）

再びここへ戻ってきてしまった。でも、彼に会うわけにはいかない。いや、顔向けができない。そう思って逃げてきたはずなのに。彼に罵られるのが怖くて、彼に軽蔑されるのが怖くて、逃げてきたというのに。どうしてこうなってしまったのだろう。それもまた、天からの罰なのかもしれないけれど。今は、それを受ける心積もりもなくて。

「…おい、失礼な奴だな。せつかく見舞いにきてやったのに、顔くらい見せるよな」

耳元で少し苦笑いした彼の声が聞こえる。そしてぺろりと毛布を少し捲られ、顔だけが露わになる。

そこで彼女はまざまざとその顔を見せ付けられた。

あのころから6年経った、14歳の江戸川コナンの顔を。

大人に少し近づいた、また、あのころの幼さも残したその顔を。

（ああ、やっぱり工藤くんか。）

どくん、どくん、と胸の鼓動が高くなって――

哀は思わず萎縮して目をきゅっと瞑った。

何もしねーよ、そう苦笑しながらも、その手は確実に彼女の顎に伸びていく。

つーと彼のすこしごつごつした3本の指が彼女の繊細な白い顎の線をなぞっていく。

くすぐりたい、なんていう不埒な考えはわかなかった。ただ、首でもしめられるのだろうか……。とは思っていた。でも殺されても仕方がない。いや、いつその今すぐここで彼に殺された方が楽だったのかもしれない。

しかしコナンはそれ以上何もすることはなく、彼女の耳の下から反対側の耳の下まで指をなぞってから、深い溜息をついた。

「……やっぱりオメーだったんだな」

「……え？」

哀は思わず目を開けると、ほんの10センチしか間がないところに、彼の顔があった。彼女は思わず目を逸らした。直視できなかったのだ。

「わりい。オメーのことちょっと疑ってたもんで……」

そう言いながら決まり悪そう笑う、その声を聞いて、それでも、どうしても耳を塞ぎたい衝動に駆られる。

だって。

テノールとアルトの中間くらいのその声。

6年前とは明らかに成長しているその声。その体。

しかし、それはやはり偽りの体。本物だけど、偽り。

彼のものであるはずなのに、自分のせいで、今もまだ本来の姿に戻ることができないのだから。

魔法はいつまでも掛けられたまま。

魔法使いは王子様に魔法を解く術を忘^{すべ}れてしまっ^たなんて――。

「…ごめんなさい…」

哀はぶるぶる震えながらそう言った。

「…私、あなたに…ひどいことを」

「ひどいこと…？」

コナンがちよつと怪訝そうに聞き返した。それから、ポツリと呟く。

「オメーのいう”ひどいこと？がどこからどこまでのことかオレにはわかんねえんだけど」

その言葉に、少し、戸惑う。

「え、どこからって…。…手紙、見たでしょ？」

「…いや？」

短い沈黙が。

「まさか、見てないの？」

哀は思わず言葉をなくした。それから小さく苦笑する。

ああ、だからこの人はこんなに温和でいられるんだわ、と。それだけ彼の顔は穏やかだった。

「捨てたのね」

「…いや、取ってあるよ。ただ、読んでねえ」

「どうして？」

哀は思わず尋ねた。尋ねずにはいられなかった。

彼は少し困ったように彼女を見てから、視線を逸らす。

「…オメーがいなくなっただ、読む意味なんてねえと思ったからさ」

「そう」

知らず知らずのうちに沈んだ声になっていた。

「でもまさかこうしてまたオメーに逢えるとは思っても見なかったけどな」

彼はそう言っただけで笑った。哀はそんな彼の顔をただ朦朧と眺めていた。

きつと、この人は嘘をついている。心に嘘をついて、私に逢っている。

手紙を読まないのは、読む必要がないのは、私が許せないからだ。きつと、今でも私を憎んでいる。

そう思えば思うほど、顔を見るのが辛くなっていく。

これ以上、自分を嫌いになって欲しくはない。

もう、これ以上――。

「…帰って」

哀は震える声でそう言った。もう、彼の顔が見られなかった。

「え？」

コナンが戸惑っている様子が見て取れる。それでも。

「…お願いだから、帰って…」

「哀くん…」

博士が困惑したような表情で何か言いかけたが、それをコナンが黙って目で制した。博士は仕方なしに口をもごもごとさせ、言いかけた言葉を飲み込んでいるようだった。

「…ごめ…んなさい」

俯いて、ただ毛布の端をぎゅっと握る。

コナンはそんな哀の様子を黙って見ていたが、はぐっと深いため息をついた。

「…わかった。…わりかったな、疲れてるのに…。心配すんなって、とって食いやしねーよ。明日からしばらく出かけるから、その前にちよつとオメーの顔見たくなっちまったただけだからよ」

彼はそう笑うと、哀の頭をポンポンと叩いた。まるで6年前と少しも変わらない表情で。

ずきり、と胸が痛む。

哀は小さな声で、やめて…と呟いた。

（お願いだから、もうこれ以上優しくしないで。）

体を萎縮させつづける哀に、コナンと博士は困ったように顔を見合わせた。そして彼は口元に自嘲を含んだ笑みを浮かべて、その手を彼女の頭からの除けた。

「…じゃあ、俺はこれで帰るよ。…『また』な」

コナンはそう言いながら再び病室のドアの出口に向かって歩き出す。

「し、新…いや、コナンくんっ」

あわてて博士は新一の後を追いかけて、そしてばかり、とドアの閉まる音。哀は再び静かになった病室で一人残されて、縮こめていた体をようやく伸ばし、それから小さくため息をついた。

しかしその表情は少しも安堵の色などなかった。それどころか強い力で心を締め付けられるような痛みが彼女の中で生じていた。

6年前のあの冬の日。

あのときの彼の言葉、笑顔、繋いだ手の温もり、そして自分の体を抱きしめた腕の力強さ、全て忘れることができなかった。何度もそれを振り切ろうとしたのに。

ねえ、どうしてあなたはあの日、あの場所にいたの？

ねえ、どうして私たちはあの日、逢ってしまったの？

ねえ、どうしてあなたはあの日、私を抱きしめたの？

ねえ、どうしてあなたはあの日、あの言葉を言ったの？

ねえ、どうして・・・

聞きたいことが山ほどあった。

夢の中で何度彼に尋ねただろう。夢の中の2人は何年経ってもあ

のころのままで。例えて言うなら、同じビデオテープを再生して見ているかのごとく、そのシーンは微塵も変わることはなかった。そう、始まりが同じなら、結末も同じ。夢の中では彼はいつも何も答えてくれなかった。ただ困ったように笑っていた。

それでも自分はしつこいくらいに同じことを問い詰める。ねえ、どうして・・・？、と。まるで駄々をこねつつける子供のよう。そしていつも朝、目覚めてから気づくのだ。無性に哀しくなるのだ。ああ、これは夢だったのだ、と。もう彼と一生逢うことはないのだ、と。

それがその日、初めて頭の中で構成されたばかりの夢であるかのように。そしてそれはきつと永遠に続く夢であると信じていた。今日が来るまでは。

それなのに・・・。

今、見たことは明らかに現実。

確かに彼はここに存在し（い）た。そしてそれは夢の中の彼とは明らかに変わっていた。

低い声で、大きい手で、大きくなった体で。

変わっていないのは、トレードマークの黒縁めがね、そして優しい表情、その口調。ただそれだけ。

いや、それすらもひょっとしたら、ただ自分が気づかないだけで少しずつ変わっているのかもしれない。しかしそれはあたりまえのことなのだ。なぜならこれは夢ではないのだから。

彼はあのころの幼い少年のままではなく、そして24歳の青年でもなく、14歳の、少年と青年の間を歩き始めた現実の少年なのだから。彼は確かにここに、現実には自分の目の前にいるのだから。

そしてそのことが自分を苦しめる。

逢いたくて仕方なかった相手。でも、逢ってはいけなかった相手。彼はずっと自分を恨んでいるのだ。一生償えない罪を自分は犯し

てしまったのだ。

和解なんてありえない。あのころには戻れない。夢は夢で在り続ける方がよかったのかもしれない。

それでも――。

それでも、彼の姿を見て、偽りかもしれない笑顔を見て、心のどこかが微かに華やいだように感じたのは、まだ自分が彼に対して『女』でいるからなのだろうか――。

哀はそこまで考えてふう、と浅いため息をつく、その細くしなやかな10本の指で顔を覆った。

そこで彼女は初めて自分の顔がまるで死人のようにひんやりしていることに気が付いた。

鏡を見れば、きつとひどい顔をしているだろう。青白くて、やつれてて、きつとボロボロ。

「無様ね……」

哀は自嘲の笑みを浮かべて、ポツリと呟いた。

+++

「何や、それで終わりか」

電話の向こうで、がっかりしたように大阪弁の彼が大きくため息をついた。

「それで終わりって、一体何を期待してたんだよ、オメーは」

阿笠邸、回廊のところで腰をおろし、江戸川コナンは7年来の親友、そしてライバルでもある彼にげんなりした顔で尋ねる。服部平次、大阪府警本部捜査一課に配属された新米刑事だ。

去年1年はとある交番で働いていたが、彼の持ち前の飛び出た推理力とその好奇心を買われて、それに加えて、交番業務をほったらかしてまで事件に首を突っ込むのを同僚から迷惑がられていたということもあり、現在の部署に至っている。

「せっかく6年ぶりに逢うたんやろ、あのちっさい姉ちゃんとも
つと濃密でノスタルジックでこう…なんや、エロティックで…痛つ、
和葉、何すんねや！」

受話器の向こうで、彼が叫んでいる。どうやら幼馴染で、今は彼の妻である服部（旧姓遠山）和葉に
何かで殴られたらしい。それが一体何であるかが気になるが。

「あんた、中学生のコナンくん相手に何言うてんの！？ホンマこんな男に騙されたて思うと自分が情けのうなるわ！仮にも大阪府警の刑事やないのっ！もっとしゃきつとしい、しゃきつと！」

遠くの方で、久しぶりに聞いた彼女の声が聞こえる。コナンは思わず微笑んだ。彼女とは、去年の蘭の結婚式以来逢っていないかった。相変わらず元気そうではあった。

「どアホう！いつ俺がおまえを騙したっちゅうんや。『アタシ、平次がおらんとあかんねん』言うたの誰やっちゅうねや。それにいまどきの中学生いうたらなあ…痛つ、オマ、またぶちよったな！？そんなんでぶつなや！この男前えな顔に痣ができたらどうすんねや！」

「どこが男前やっちゅうねや。それにそんな色黒い顔、どこに痣ができて目立たなくてええやないの！それからこの際やから言わせてもらいますけど、平次が最初に言うたんやないの、『和葉をこれから一生守ったる、だから今は逃げる』て」

「な、な、何やお…！？誰がいつそんなん言うたっちゅうねや！？」

「6年前や！」

「アホオ！そんな昔のこと覚えとるか！？」

痴話喧嘩が始まる。いつもと変わらぬ痴話喧嘩。どうやら組織と戦う前にそのようなやりとりが2人の間でなされていたらしい。コナンは思わず苦笑した。しかしもうそろそろ付き合っていられない。
「じゃー、俺、切るから」

げんなりした声でコナンが受話器を置こうとすると、平次がちよ、

ちょ、ちょお待った、とかなりあわてたような声で叫んだ。

「何だよ」

コナンはもうめんどくさくなって言葉に力も何も込められてない言い方になっていた。そんな彼の状態を知って知らずか、まあ聞けやmと平次は先ほどとは声のトーンをさらに落として、低い声で受話器越しに囁いた。

「のお、工藤。今度は絶対離さんようにするんやぞ？大事にしたらよ？」

「…あん？なんだ、いきなり」

唐突に言われたその言葉に、コナンは一瞬の短い間を開けて聞き返す。

「そのちっさいねーちゃんをや。6年前、それに4年前のあの時と同じことをするんやないぞ、て言うておきたかっただけや」

和葉に気づかれないうちに、ボソボソと小声でいうから聞き取りにくかったが、多分そんなことを言ったのだろう。

「何だよそれ。6年前はあいつが勝手にここを出ただけで、4年前や今回とは全然関係ねえだろ」

昔のことを軽々しく掘り起こしてほしくない話題だったから、少し言葉が強かったかもしれない。けれど、案の定平次は言葉をやめることはしなかった。

「全然関係ない。ほーかほーか」

カラカラと電話の向こうで笑う平次に、思わずムツとする。

「…なんだよ」

「ホンマそう思っているのかな思て。オレはどっちも一緒や思おてるから」

「…」

「6年前、工藤がああのちっさいねーちゃんの異変に気づいていれば、今も工藤、あのねーちゃんはオマエの傍にいてたかもしれへんし、4年前に毛利のねーちゃんを止めれば、まだ工藤を待ち続けてたかもしれへんのやぞ？どっちも大切にせえへんかったから、あな

いなことになったんや。どっちにも逃げられてしもうたんや。せやから今度ばかりは…」

「…バー口」

今になってコナンは親友の言葉を小声で、しかし強い口調で遮った。

「言つとくけど。俺は蘭を止めなかったことには後悔してねーぜ。あいつがこれ以上俺を覚えていて欲しくなかったから。あいつに幸せになって欲しかったから。もう、俺は…いや、工藤新一はここに存在し（い）ないんだから。あいつを繋ぎ止めちゃ、いけないんだよ。…早く自由にさせてやらなきゃ、いけないかった」

「工藤…」

平次はかける言葉が見つからないのか、受話器の向こうからしばらく声が漏れることがなかった。そんな様子にコナンも思わず苦笑いを浮かべた。それから真面目な顔になって、ただ、と前置きをして話しはじめる。

「…ただ、灰原については、オメーの言う通りだと思ってる。俺があんとき、あいつの異変に気づいていれば、ってな」

——ごめんなさい…

6年前、自分が退院したあの日。

ちらちらと静かに霽雪が降ったあの日。

震える声で、彼女はその言葉を何度も呟いた。

それは彼女が組織と戦い、そして重傷を負った彼に対しての罪悪感から呟いた言葉だと思っていた。

しかし、それだけではなかった。それを自分は見抜けなかった。見抜けないで、拳句、浮かれてた。

もしかしたら彼女を追い詰めたのは、自分の科白だったかもしれない。自分の行動だったのかもしれない。

――あの日、この手で抱きしめた彼女の体はとても冷たかった。

「何や、工藤。おまえ、随分可愛くなつたやんか」

平次のその言葉に彼は現実に取り返された。

「え？」

「せやから随分自分素直になつたやないか、言つたんや、今」

彼に1度言い直されてようやくコナンは不機嫌そうな顔をしてこ
う言葉を返した。

「…はあ？オメー俺のことバカにしてんのか」

しかし、平次は思いのほか嬉しそうに、

「ちやうちやう。ホンマに心の底から言つとんねや。せやかてお
まえはこの6年の間、少しもあのちっさいねーちゃんの話に触れよ
うとせえへんかったやないか。周りは周りでおまえに對して腫れも
んに触るゆう感じやつたし…。せやからこつちがイライラして
たんや。それが今日になつて自分から そのことについて電話した
ーゆうから、ホンマ驚いたんやで？」

「…ああ、それはこつちも驚いてるよ」

彼の言葉にコナンは思わず失笑すると、それからふつとテーブル
の上に置かれた江戸川コナン宛の封筒に目をやった。

封は。

封は既に開けられている。

もちろん、今度こそ自分の手で。そしてその隣には、何度も読み
返した便箋が一枚。

もう、あれから既に3時間が経っていた。

コナンは思わずふう、とため息をついた。

「…まあ、それがホンマもんのおまえらしゆうて俺は好きやけど
なvvこの6年間おまえは抜け殻みたいなもんやつたし」

「…そうだったか？」

きょんとんとして彼は聞き返した。

「何や、おまえ気づいてへんかったのか？ 呆れたやつちなあ」
本当に呆れた、というように、平次は大げさにため息をついて見せた。

そんな彼の様子に、何やの？と遠くで和葉が尋ねる声がある。平次は電話の向こうであわてて弁解しているが、和葉は疑いを隠しきれずにいるらしい。ホンマに電話の相手、コナンくん？という声が聞こえてきた。それから、彼女が受話器を彼女が取り上げたらしく、

「もしもしー。あんた一体だれですのん？」

という受話器のすぐ向こうで、和葉のかわいらしくも間抜けな声が聞こえてきた。コナンは思わず失笑すると、彼女の電話相手を務めたのである。

もちろん、今までの服部平次の相手、24歳の工藤新一ではなく、14歳の江戸川コナンとして。

——ねえ、…ねえ、お願いだから、行かないで。行っちゃだめ。あそこに一人で乗り込もうとするなんて危険すぎるわ。

——大丈夫だ、心配すんなって。オレ一人じゃねえ。日本の警察もインターポールもFBIも、それに服部を含む世界中の名探偵がいるんだ。ま、何とかなるだろ。そりゃまあ俺一人で追い詰めたいのは山々だけどな…。

——でも、彼らは殺人のプロなのよ？いいえ、それどころか殺すことを楽しむ殺人鬼の集団。もし、万一あなた1人だけになったとしたら？全て死ぬことはなくても、もしあなたが他のみんなとはぐれたときに組織の人間と鉢合わせしたら、一体どうしようっていうの？あいつらにはあなたの正義なんてものは通用しないわ。あなたが手を下さなければ逆に殺られるのよ。

——…ああ、そうかもしれないな。

——そうかも、って…。

——たぶんオメーが考えてるように、オレはそいつを殺すことはもちろんしねーし、だからといって、そいつらに殺られるつもりもねえ。けどな、灰原。俺は希望を持てえんだ。もしかしたらおまえの言う、俺の『正義』ってやつが、あいつらに通用するかも知れねえつつ希望をな。

——ダメよ！彼らに何を期待しても無理ってことぐらい…

——それでも…それでも信じたいんだよ、同じ人間としてな。…ま、それでだめなら片っ端からこのパワーアップされた筋肉増強シューズで何とかしねーとな。時計型麻酔銃はとっておきのために残して。

——待つて、あなた正気？それじゃ死に行くようなものじゃない！

——そうじゃねえよ。…オレは死ぬなんてへまは絶対しない。

——バカ！何言ってるのよ！あなた、まだわからないの！？組織がどんなに残酷で卑劣で…。

——わかってるよ。だけどオレは…

——だめ！行かないで。行くなら私を殺してから行きなさい！私はあなたが憎むべき組織の人間よ。いくら裏切ったとはいえ、あなたをこんな姿にしたのは、多くの何も罪のない人を殺したのはこの私なんだから。倒す価値のある人間…。

——ちょ、何言ってるんだよ、オメー…。

——殺せないの？

——あたりまえだろ？オメーに恨みなんて今はこれっぽちもねーんだから。それどころかオメーはもう…

——だったら…！！だったら、私の言うことを聞いて！恨んでないんだったら、私を少しでも大切に思ってくれてるのなら、も

うこれ以上私を苦しめるのはやめて…。

——え？

——…あなたに、あなたに死んでほしくないのよ。もうこれ以上大切な人を失うのは嫌なの…。ここで手を離したら、お姉ちゃんみたいに突然目の前から消えてしまいそうで…怖いのよ。

——灰原…。

——あなたを…あなたを失いたくないの。

+++

「…くん、コナンくん」

遠くの方で誰かが自分の名前を呼んでいる。

- - -『自分』？

そもそも俺は一体誰なんだ？

いつから自分のことを『江戸川コナン』と認識した？『工藤新一』から吹っ切れた？『工藤新一』は死んだ、と思えるようになった？
蘭を『幼馴染』としか思えなくなった？

いつから、いつからあいつを――

「コナンくん…？」

今度ははつきり頭の中で聞こえた。そこでようやく目が覚める。群馬県警パトカーの助手席で寝ていた自分の顔を窓から心配そうに覗き込んでいたのは、群馬県警の山村警部 だった。

ここは群馬県警察署前の公園。連日起きている連続通り魔殺人事件の協力を依頼されたのは3日前のこと。米花駅から朝一の始発電車でやってきてから既に9時間経っていた。

前々から山村警部にFAXで事件資料を送ってもらっていたし、警察署で詳しい説明も受けたので、大体のことは早々と解決した。ただ、凶器確定とアリバイ証明に時間がかかって、これほどまで時間が過ぎてしまったのだ。

「…どうしたのー？疲れちゃったのかい？」

「え、ああ、すみません…」

コナンは慌てて笑みを作る。

「いや、いいんだけどさ。最近ずっと仕事仕事だったからね。昨日は久しぶりのオフだったんでしょ？…でもその様子じゃ全然眠れなかったようだねー」

山村警部はくすくすと笑った。嫌味も何も感じない笑顔。ただ純粹におかしかったらしい。警察官の仕事としては彼はあまり向いてはいないかもしれない。彼にとって警部が最高位で、出世はもうしないと思っただけで、よく長い間警部を降格しなかったなあ

なんて思ってしまう。留まらせているのは多分自分のおかげだと勿論自負している面もあって。そして彼もそれを認めているからこそこんな長い付き合いになっっているのかもしれない。

しかしそれにおいてもコナンは最近、この人柄を前よりは好きになり始めていた。もういい大人だというのに、いくつになっても子供っぽいというか、なんと言うか、一言で言えば憎めない存在。まあ、それだけ自分も大人になったというだけなのかもしれないが。

「お茶でも飲むかい？ コーヒーの方がいいんだろうけど、生憎切らしちゃってね」

彼は運転席に回ると、水筒から熱いお茶を注ぎ、コナンに手渡した。彼は軽く会釈してそれを受け取ると、一口喉に通した。熱いほろろ茶が胸に染みる。

「今日はありがとねー。…いい旅館用意してるから、ゆっくり休んでいっちゃんさいよ」

山村警部の運転で、車はゆっくり動き出す。

「…いや、いいです。これからすぐに戻らなきゃいけないんで」

コナンがそう言ったとたん、動き始めたパトカーは突如急停止した。

「…うわっ!？」

その勢いで体は大きく前の方へつんのめる。思わず眉を寄せて、一言文句をいおうと口を開きかけたコナンだが、先に声を上げたのは山村警部だった。

「ええええっ？ コナンくん一泊してかないの？ 僕、いろいろ聞きたいことあったりしちゃったんだよ？ お酒とか飲みながらでもさー…。あ、そうそう。お酒といえばね、最近いいお酒見つけたんだよ。実はね、上司には内緒でトランクの中に隠しちゃったりするんだよ。ねー。だからお願い、一泊してよおvvv」

コナンは思わず苦笑した。やっぱり生理的に受け付けないところも確かにまだ存在する。

「…いや、僕、まだ中学生ですし…」

心は成人だけど、と心の中で付け足しながら、彼は山村警部の誘いをさらりと交わした。

「そんなこと言わないでさー…あれ？コナンくんまた寝てるの？弱っちゃったなあ…」

山村警部は本当に困ったというような顔で彼を見ると、大きくため息を吐いて再び車を走らせた。もちろんコナンは本当に寝ているわけではなくて、実際は狸寝入りでその場をやり過ごすことにしたのだけでも。そうして彼はこっそり薄目を開け、山村警部の様子を伺ってから再び目を瞑ると、先ほどまで見ていた夢の続きを考えていた。

そう、あれは確かに夢だった。
けれど実際にあったこと。

6年前、組織が壊滅する前日のこと。組織のアジトに乗り込む前日、灰原哀は確かに自分の前で泣いた。

彼女の涙を見たのは、出会った当初に見たあの日以来だった。

そう、自分が彼女の涙を見たのはたった2回だけ。

あの日は組織に操られ、拳銃殺されてしまった姉を思っ。そして6年前は、組織に行く自分を思っ。

それはただ自分のために死んでいった姉と重ねているだけだったかもしれない。

それでも、彼女の涙を見たとき、彼女の心からの叫びを聞いたとき、とても…

とても、嬉しかったんだ。

「コナンくん、駅に着いたよ」

山村警部のほんの少し甘くしゃがれたその声にコナン再び起こされる。

狸寝入りだったつもりが、どうやらいつの間にか本当に眠っていたらしい。大きく伸びをすると彼はゆっくりと体を起こした。

「予約しておいた部屋は僕が泊まっておくから、君は気にしないでいいからね？」

彼は名残惜しそうな顔をして、それでも笑顔を無理やり作っている。キャンセルすればいいのに、とは思ったが、敢えて口には出さなかった。

助手席を降りると、山村警部は既にコナンの旅行用かばんを後部座席から出し終えていて、すぐに彼に手渡してくれる。

「じゃあねー！何かあったらまた連絡するねー」

「…何かないことを期待します」

山村警部は自動改札口まで一緒についてきてくれた。それでもコナンが階段に上り、姿が見えなくなるまでしっかり見送ろうとしているようだった。

コナンは一度振り返り、そんな彼の姿に思わず微笑すると、ポケットのポケットの中の薄い封筒を指でなぞり、再び階段を上っていった。

+++

阿笠邸。

ほんやり

哀は朦朧とした顔で、地下室に立ち尽くしていた。

部屋の配置はそのまま。しかし、どこか違う。ここには、生活の匂いが感じられた。

自分が知らないこの空白の6年の間に、誰か別の人間がここで暮らしていた。一体誰が……？

……博士だろうか。いや、それはない、と彼女は自分の考えをすぐに打ち消した。

大雑把な彼の性格。いつも物が雑駁に置かれていて、彼女が片付けなかったら延々と積み上げられていくというような状態であつて。しかし、この部屋は違った。こんな整理整頓された部屋に彼がいられるわけがない。というより、こんな綺麗にできるわけがない。と

はいうものの、この6年で彼は変わってしまったただけなのかもしれないが。でも、どこが悪い予感がするのはなぜだろう？

ヒントを得るためにさらに注意深く室内を視観する。

本棚に目を移し、そして次の瞬間彼女は思わず目の動きはそこで活動を停止させていた。

自分の意思ではなく、まるで何者かの力によって石にでもされてしまったかのように。

そこにあつたのは、世界各国の推理小説、事件ファイル、六法全書、宗教関連の本……。分厚い本の数々だった。こんな本、彼が――博士が持っているわけがない。こんな本を持っているのは、この場所で当たり前のように使っているのは彼女の知る限りただ一人。

この部屋に暮らしているであろう人物が彼女の脳裏の中に瞬時に浮かんでくる。おそらく、今、この地下室を使っている人物は――

突然自分のすぐ後ろで、かたりと物音がして、哀はびくりと体を固まらせると、おそろおそろ振り返った。そこにいたのは、博士。一瞬だけ張り詰めていた力が抜ける。そして、彼も。博士も彼女の姿を認めると、ほっとしたように微笑んだ。

「哀くん、そんなとこにいたのか。よかった……。姿が見えんから心配しておったんじゃないよ」

「バカね。何も言わないで何処にも行かないって昨日も言ったじゃない」

「……それはそうじゃけど……」

やはり、心配で堪らないのだ。縋るような視線で自分を見つめる博士の様子に、哀は申し訳ない気持ち

胸がいつぱいになっていた。

「それにしても、部屋が変わって驚いたじやろう？」

気分を変えようとしたのか、急に声の調子を明るくして、博士は

顔をくしゃつとさせて彼女に向けて微笑んだ。

「…悪いのう、今、新一が使ってて…。帰ってきたら移動してもら
うから」

奇しくも彼女を元気付けようと何気なく言った彼のその言葉が彼
女の推測を確信に変え、またさらにその気持ちをどん底に落として
てしまう。

『新一』

彼女の知っている限り、彼が呼ぶ『新一』なる人物は一人しかい
ない。

その人物は、『工藤新一』という本来の姿と名前を持ちながら、
偽りの姿に未だ姿を変えられている少年。彼の顔が俄か頭の中に浮
かんでくる。

「ああ、新一…なんて彼の前で言うと、また怒られてしまうな。
いい加減慣れんと…」

困ったように口の中でもごもごとさういつと、博士はポリポリと、
薄いその頭を困ったように二度ほど掻いた。やつぱりだ。

「…待つて、博士。…何で、工藤くんがここに？」

「え？…ああ。4年前にな、毛利探偵事務所を出たんじゃよ。そ
して名目上、わしが全ての面倒を見るということになったんじゃ」

「…どうして？」

声を震わせ、聞き返す。

どうして、彼がここに来なくちゃいけないの？

毛利探偵事務所は、蘭さんのことはどうなったの？

彼はどういう気持ちでここにやって来たの？

また、私の所為なの？

そんな思いが彼女の中で渦巻いていた。

苦しい。

苦しくて、息が詰まりそうになる。

ここにいて…眩暈が…

「…哀くん？」

心配そうに博士が彼女の体を支えた。ふらり、と彼女の細い体がよろけたのだった。

「…大丈夫、ちよつと眩暈がしただけだから…」

「で、でも…」

そのとき、

p r r r r r p r r r r r . . .

タイミングがいいのか悪いのか、1Fの居間の電話の音が激しく鳴った。はつと我に返り二人は一瞬だけ動作を止めた。

そうして哀はそれをきっかけに固まっていた全身の力を少しずつ抜いて、博士に向けて笑いかけた。勿論偽りの笑みだけれども。

「…ほら、行きなさい。大切な電話だったらどうするの？」

「わしは哀くんの方が…」

「いいから。私も後から行くわ」

そう言つと、博士は仕方なさそうに地下室を出て、ゆっくりと階段を上っていく。哀はそんな彼の後姿を見て深くため息をつく、哀しそうに地下室を見渡し、それから逃げるようにしてその部屋を後にしたのだった。

ずっとこの部屋には居続けたくなかった。
今やこの部屋は自分のものではなかった。

彼のものや、匂いや空気、気持ちが残った部屋。

自分の知らない空白の数年間、彼が――。

よりにもよって自分の罪の塊である彼がここで暮らしていた。
何を感じ、思って暮らしてきたのか。

自分の知らない彼の全てに見られている。そんなプレッシャーで
追い詰められ、押しつぶされそうだったから。

その全てが自分のせいであることはわかっていたけれど。

階段を上りながら、もうあの部屋は入ることはないのかもしれない
い、と臆気に考えていた。

「…ああ。だから、絶対あいつを一人にすんなよ。俺がそっちへ戻るまで、目を離すんじゃないぞ。…うん、じゃあすぐ帰るから…それまでよろしくな」

東京行きのホーム。

江戸川コナンは携帯電話を切ると、ため息をついて停車中の電車に乗り込んだ。

今日が平日の午後だけあって、人はまだらで、ドア付近に立っている数名の人を除けば、辺りの人はみんなのんびりとした顔で座っている。彼はそんな乗客の間をすり抜け、空いている座席にゆっくりと座ると、コートのポケットから再び封筒を取り出した。

昨日から何度も何度も読み返した手紙。
それでも再び封筒から便箋を取り出し、深いため息を一度吐くと、切なそうな表情でそれに目を通し始めた。

▽

江戸川コナン様

工藤君、あなたがこれを読んだときは、私はもうあなたの知らない街にいるでしょうね。

先に謝つとくわね。ごめんなさい。いつかあなたは言ったわね、運命から逃げるな、って。

あのとき、私、とてもうれしかったのよ。だから私も自分の運命と向き合うことに決めた。

でも、もうその約束は果たせないみたい。…ううん、それは少し違うわね。

約束は『果たせなかった』と言うべきかしら。
だって、現に私は既にあなたたちの前から姿を消してしまったのだから。

一体どうして、って思うでしょうね。

それはね、あなたがこれから一生『工藤新一』としてではなく、『江戸川コナン』としての道を歩むしかなかったことを、告げるのが怖かったから。

あなたが組織から奪取したデータを元にして、解毒剤を作ってみた。

多分、それを服用すればあなたは工藤新一に戻れることができたわ。

でもそれをあなたにあげることではできなかった。
だってその解毒剤もある意味恐ろしい『劇薬』だったんだもの。

あの解毒剤もね、普通のヒトがそれを飲んでもなんら変わりはない。逆に、

栄養ドリンクみたいに元気になるかもしれない。でも…

そう、考えてみればA P T X 4 8 6 9で幼児化になる方が珍しかったんだもの。

ジンが投与した殆どの人たちが私の所為で死んだ。その解毒剤だって、

が起こってもおかしくはない。

どんなに優れた医薬品だって、少しの副作用はつきものでしょ？

考えてみれば当たり前よね。咳止めや解熱剤の薬で眠気などの副作用がある

んだもの。

完成品ではなくても、死ぬ恐れがあり、体を小さくさせたりするあんな危険

な毒を持つ薬を、体内から全て追い出す。

そんな魔法の薬に副作用一つもないのはおかしい。

もしかしたら、脳や心臓の一部に何かしら、命に別状にはないけれど何かしら

の障がいを残してしまうことになることも。

だってそうでしょ。あんなに短い時間で元の姿に戻るのに骨や筋肉を萎縮させ、

体にとって大量の労力を使うんだもの。

覚えているでしょう？2日間元の姿に戻る解毒剤の試作

品。何度あなたは

苦しんだ？

動悸、息切れ、体の痛み…。

考えてみて。その薬がもし永遠にもとの姿に戻るものだったら。

定期的に来る痛み、苦しみ。…あなたは耐えられるかしら。週に何度も私の

もとへ来て、痛み止めの薬を打つか、飲み薬を貰って。…そうしてあなたは薬漬

けになる。…でもそのうちそれも効かなくなるけどね。一生あなたは苦しむの。

元に戻った代わりに、いつも体の痛みと動悸と息切れに襲われ。

のんびりと探偵ごっこなんてできなくなる。あなたの愛しい愛しいお姫様も

心配させてしまう。あなたは見てられる？

そんな薬、あなたには渡せなかった。完成品なんて言えなかった。

うつん、本当に完成品ではなかったのかもしれない。私の間違えただけ。

データを見落としただけ。

そう思っ、て、あなたが入院している間、学校にも行かずにずっと調べていた。

そうしてようやく完成したの。計算上副作用は何も出ることはなかった。

これで、工藤くんに向向けができる。私の長年の苦しみが少しだけでも解放

される。そう思っていたわ。でも、そうじゃなかった。

神様は許してくれなかったのよ。

実は先日、博士に隠れて久々に動物実験をしたわ。組織から取り戻した

A P T X 4 8 6 9 を大量のラットに投与するの。もちろん、多くのラットは死んでいった。

幼児化するラットを10匹集めるだけでも、それは膨大なラットが死んでいつ

たわ。あれほど大量のラットが、目の前で苦しんで死んでいくあのコたちの

様子を見たら、とても気分が悪くなって昨日は一日中食欲も出なかったわ。

組織にいた時はなんでもなかったのにね。

それでその後、その幼児化したラット10匹にその解毒剤を与えてみたの。

さあ質問。どんな結果がでたと思う？

1匹めはすぐに死んでしまった。

2匹目と3匹目は数時間おきに動悸、息切れ、痙攣。結局効果は効かなかった

のね、もとの幼児化に戻ってしまった。

4匹目は目が見えなくなってしまった。

5匹目は2匹目3匹目と同じく動悸息切れ、痙攣は定期的に起こってはいるわ。

幼児化にはまだなっていないけれども。入手したデータと同じ結末ね。きつと、

このコは。

わかる？

まともに残ったのは50%。たったの半分よ。データをやっぱり変えるべきでは

なかったのかしら。そうは思っても、残りの半分の可能性に縋りたかった。

でも――

元気に遊んでいたと思われていたラットは、今日、3匹とも死んだわ。

まるでゼンマイ仕掛けのおもちゃのねじが終わってしまっ
たかのように、

ぷつりと2匹とも同じ時間に。

残りの2匹も一見元気に見えるけど。あの様子じゃ、多分
明日にでも死んで

しまうような、そんな気がする。

——つまり、そういうこと。

やっぱり私の研究結果がおかしかったただけなのかもしれない。
い。

完璧であつても、そのラットがたまたま全部弱つていただ
けだったのかもしれない。
ない。

時間もなかったし、もっと休ませてあげておけばよかった
のかもしれない。

もしかしたら、実験材料が、幼児化したラットの量が少な
かったのかもしれない。
ない。

もっと大量のものを使えば、副作用のない健康体のものが生
きて、何事もなく

何年も生きられるものが現れたのかもしれない。

でも、どう説明しても。私の作ったものはまた完璧ではな
かった。

どんなに頭の中を駆使しても、完璧な『解毒剤』はあなた
の前に出せない。

多くのラットの命を、私のエゴでムダにしてまで。
落とさなくてもよかった命を私のせいで失くしてしまう危険に晒すまで。

私はもう新しい解毒剤を作れない。これ以上のものは、作れない。

…なんてね。でも、これは冗談じゃないわよ。本気。私の敗北宣言。

もしこれを手紙じゃなくて、あなたの前で言っていたら、きつとあなたは私の考えをすぐに打ち消して、言っていたでしょうね。

「バーロ、諦めんなよ、残された俺たちの気持ちはどうなんだ？ そんな気持ち踏みにじってオメーは逃げるのかよ。自分の力を信じろよ」

かしら。

それとも、
「…もう作らなくてもいいから。新しいのは作らなくてもいいから。」

オメーは自分の腕信じて、それを俺にくれよ。残った2匹みにピンピン

副作用もなく生きられるかもしれねえじゃねーか」

「じゃなきゃその、組織から持ってきたデータで作った解毒剤を俺にくれよ。」

副作用でも何でも耐えてみせる。蘭の前でも絶対バレないようにする」

「俺を誰だと思ってんだ」
かしらね。

今でも、キラキラ憎らしいほどの笑みを私にぶつけて笑うあなたの顔が見えるわ。

まぶしいくらい。

わかってる。

でも、あなたにこれを渡すのはやっぱり無理なの。

本当にごめんなさい。あなたの期待をこんな形で踏みにじるようなことをして。

もうあなたの前に現れることもないでしょうね。

この1年と少しの間、あなたと出会えて、あなたたちと一緒に過ごすことができて、

とても楽しかったわ。ありがとう。そして、さようなら。

博士や、あの子たちのこと、よろしくね。

追伸。

今日はありがとう。

何でもかんでも、一時の感情だけで女の子を抱きしめたりするもんじゃないわ。

大切な子だけにしてあげなさい。

最後にあなたと話せて、よかったわ。

灰原 哀

『

コナンは読み終わると、遣る瀬無い顔をして大きくため息を吐いた。

「……ったく。まさかこんなことのために6年も姿を晦ましてたなんてな」

ぼそりと呟くと、その視線を窓の外に目をやる。

発車を知らせるベルの音とともに、動き出す電車。景色がゆつくりと変わっていく。

それをぼんやり眺めながら、手にしていたその便箋を大切そうに再びコートのパケットの中にしまいこんだ。

——あなたを…あなたを失いたくないの。

それは夢の中の科白。

しかし、それは6年前の記憶。この6年の間、すっかり忘れていた。

いや、無意識に彼女のことを考えないようにしていた。

それをこんなに明瞭と夢の中に再現される日がくるなんて、思ってもみなかった。

それはきつと昨日の夜、自分と同じ14歳の彼女に逢ったから。

1週間前、光彦が、歩美が彼女に逢ったその日から彼の心は少しずつ変化していた。意識下の奥深く眠っていた心が目を覚まし、ゆっくりと浮上していた。

そして昨日彼女を想う光彦と博士の話にあれば頑だった自分の心が動かされ、彼女に逢おうと思った。

灰原じゃなきゃいい。いや、灰原であってほしい。

病院に向かう道を、博士の後ろについて歩きながら、ずっと思っていた。

逢うことを決意しながらも、心がカタコトと音を立てて揺れていた。

まだ迷っていた。その扉を開けるまでは。

しかし彼女に逢ったとたん、自分の迷いが一気に吹っ切れた。

あの白い肌、人を見透かしたような大きな瞳、緋色の髪。

思い浮かべていたそれ以上の輝きを持って、彼女はそこにいた。

きつとそれが自分のあの記憶を覚ましてくれた封印の鍵。

素直じゃないと思っていた彼女が、精一杯自分にぶつけてくれた気持ち。大切にしようと思っていた当時の感情。全て彼の脳裏に鮮明によみがえっていた。

彼女に逢ったことで、迷いをふっ切るだけじゃない、当時の失われた感情も思い出すことができた。素直になれた。

そう、今、自分は――。

「あのと時の言葉、そっくりオメーに返すよ、灰原」

コナンは虚空を見つめ、ポツリと呟いた。

隣にいた中年の女性が、不審そうに彼の顔を覗き込んだが、それすらも気づかずにいた。

彼を乗せた電車は少しずつスピードを上げながら、確実に東京へ、米花町へ進んでいく――。

10（後書き）

手紙の中身をまた少し変えてしまいました。

コナン小説リング↓Candlelight↓小説家になろう
少しずつ、少しずつですがまともな内容になってきたような気がします。

こつぶ、少し大人になりました。

時刻は夕方5時を少し回っていた。

阿笠邸宅前の公道。そこにいるのは、帝丹中学の詰襟の制服を着た少年2人と、セーラー服の少女。

円谷光彦、小島元太、吉田歩美の3人だ。彼らはそれぞれ半ば緊張した面持ちでそこに立ち、久しぶりに訪れたその家を睨むように見上げていた。

どうして彼らが揃いも揃ってここにいるのかというと、昨日の夜に博士からの電話でその少女が目覚め、自分を灰原哀と名乗り、そして明日の昼過ぎには退院できることを聞いた光彦がそれを今日学校で歩美と元太に告げると急遽彼女を見舞うという次第になったわけ。恐らく本当に少女が灰原哀だということは、博士も、そして子どもたちももう既に信じきって話を進めていた。――というより、そうであって欲しいという気持ちが強かったのかもしれないけれど。

「いいですね、元太君。絶対灰原さんを不安がらせること、言っ
てはいけませんよ」

光彦が顔を顰めて元太に忠告すれば、「おう、まかせとけ！」と彼はどん、と分厚い胸板を拳で叩いてみせた。そんな彼の様子に半信半疑な様子で光彦は首を傾げたあと、優しい表情を隣にいるその黒髪の少女に向ける。

「それと歩美ちゃん。君はまだ病み上がりなんですから無理しないでくださいね」

一瞬その言葉に、「あたし、病気なんて……」と、きょとんとした表情で光彦を見ていた歩美は、すぐに合点した。

「あ、哀ちゃんを忘れてたってことね。大丈夫！心配しないで」

嬉しそくに、力強く彼女がそう言った。最初のころはまだ少し欠けていた記憶もあったようだが、今では光彦自身すっかり忘れていた哀のほんの些細な動作や言動まで歩美は覚えているようだった。そんな彼女に光彦はふっと優しく微笑むと、チャイムを押した。

『・・・はい・・・』

少しの間後、インターホンの向こうで聞こえたのは思いもかけず少女自身の声だった。

消え入るようなどこか生気のないその声に、光彦は思わず身を固まらせる。昨日よりさらに悪化させているのではないかと、彼が思わず不安になったほどに、彼女の声は弱弱しかった。

「・・・哀ちゃんだ」

信じられない、という表情でポツリと呟く歩美。彼女の唇は微かに震えていた。

『え？・・・まさか、・・・吉田さん？』

その言葉を受けて、短い間後、インターホンの向こうで少女は聞き返す。その声の調子から彼女もさすがに驚いているのが感じ取れた。

『・・・ちよつと、ちよつと待ってて。すぐ行くから』

「うん！」

インターホンの向こうでは語尾が遠くなった。急いで切ったような様子が伺える。そうして、歩美もまた、とびっきりの笑顔でインターフォンに向けて頷いた。そんな彼女たちの様子に、光彦と元太は思わず顔を見合わせ、お互い笑みを浮かべたのだった。

+++

阿笠邸宅、居間。

「まさかあなたたちがここに来てくれるなんて、思いもしなかったわ」

博士が用意してくれたホットミルクと、光彦たちが買ってきたばかりのアツアツのたい焼きをお盆の上に乗せて台所からやってくと、彼女は少しはにかんだような笑みを見せた。

「だって…。だって少しでも早く哀ちゃんに逢いたかったんだもん」

一足先にソファに座っていた歩美は、すねたように頬をぷうつと膨らませる。

こんな歩美を見たのは、光彦にとって久しぶりのことだった。年上のお姉さんに甘えたような、どこか媚びたような彼女の表情。さっきなんて哀が玄関のドアを開けた瞬間に、彼女はただ哀に抱きつき、大泣きしたのだ。

——バカバカ、何で歩美を置いていつちゃったのよ！

あんなに表情を露わにした彼女を見たのは、いったい何時のことだっただろうか。記憶をなくした後の彼女はそれまでの彼女とどこか違っていた。それが何かと聞かれたら簡単に答えられることではなかったけれど、ではこんな彼女を見たのは6年ぶりだったのだろうか。

いや、違う。もっと最近のこと。

そうだ、自分はこんな彼女を最近見たばかりだったではないか。ちょうど1週間前に。彼女が、そして自分が校庭で灰原哀を見たあの瞬間に。

そしてそのことがきつと吉田歩美が『彼女らしさ』を取り戻した瞬間だったのだ。

それなら――。

それならあの人はいつ『自分らしさ』を取り戻すことができる？
あのころの『彼』に戻る？

「…円谷君？どうしたの」

怪訝そうに、心配そうに眉を潜めて自分を見つめるそんな哀の様子に、光彦ははつと我に返った。

「いえ…。なんでもないです」

あわてて笑顔を作ってみせる。

これ以上彼女に心配事を増やしたくなかったのだ。それだけ彼女の顔は青白く、まるで蠟人形のようなだった。しかし生気があまり感じられなくて。彼女の周りを陽炎のようなものがゆれているような気持ちさえした。

「…ちよつと風に当たつてきます」

「何だ、光彦、便所か？」

「違いますよ！」

彼はムキになって乱暴に言い返すと、席を立ち、ゆっくりと居間のドアに向かって歩き出した。

「…ったくよー、光彦の奴がオメーが入院してたこと、隠してやがつてよー。入院してるって知ってたら俺、一番に飛んでいってやったのに」

相変わらずの野太い声で哀に話し掛ける元太の声をバックに聞きながら、彼はほんの何気ない気持ちで居間のドアを開けた。

そしてそこで彼は目にする。

玄関のドアを開け、外の様子を何度も何度も確かめる阿笠博士の様子を。

それはとっても奇妙な光景。

+++

どうしたんですか、そう言おうと口をすばめた瞬間、博士は彼の気配に気づいたのか、ぎくり、と体を硬くしてそれから恐る恐る振り返った。

「…何じゃ、光彦くんか」

ほっとしたように彼がぼそり、と呟いた。心からほっとしたような彼の声。

「誰かを待つてるんですか？」

光彦の言葉を受けて、彼は困ったような表情を浮かべながら、こくり、小さく頷いた。

「…まさか。」

彼の脳裏に思い当たる人物が浮かんでくる。
たった一人の人物。その名前は。

「コナンくん。コナンくんが、帰ってくるんですか？」

「…灰原さんがいる、この家に？」

「ああ。…『灰原から目を離すな』じゃと」

ふっと笑って博士が言った。

「え、ホントに、彼は『灰原』って、彼女のことをそう言ったんですか？」

戸惑いを隠せない。

だって、1週間前はあんなに否定してた彼が、である。いつの間に二人の距離は縮まったのだろうか。

「ああ。病院に連れて顔を会わせたら、あっさりと彼女は哀くん本人じゃ、と認めたよ」

「えっ？コナンくん、灰原さんに会ったんですか!？」

あんなに会おうとしなかった彼が？

頭にいくつもの疑問符を抱えた光彦に対して、博士は得意満面な顔でこう言った。

「ああ。…認めさせるのにはずいぶん骨を折ったがの」

その言葉に、思わずぶ、と噴き出した。あんな岩のように頑固な心を持った彼を、彼女のいる病院まで行かせるなんて、一体どんな手を使ったのか。

「病院でな。コナンくんは、哀くん『しばらく』家を開けると言っておいたようじゃが、本当なら『今日中』には帰ってこれる仕事だったそうじゃ。どうやらコナンは哀くんを足止めさせたかったようじゃな」

その言葉に、光彦は安堵の息を吐いた。博士の表情も思わず綻ぶ。

「…心配してくれてたんじゃな」

はい、と光彦は頷いた。博士は嬉しそうに目を細めながら、ようやく彼の方に向き直った。

「…あれでようやく彼は彼なりの答えを出したんじゃろうな。最後はとてもすっきりとした顔をしていたよ」

「…そうですか」

光彦の心は次第に楽になっていた。もう、大丈夫。彼はそう思っていた。

あんな辛そうな彼女の心を楽しむことは自分では到底無理なこと。彼女の心の中にいるのは、彼女のその澄んだ瞳に映っているのは他ならぬ江戸川コナンただ一人なのだから。

「…で？どうしてそんな大事ことを灰原さんに言っておけないんですか？」

「え？」

博士はちょっと驚いたように光彦を見てから、慌てたように笑った。その反応は彼にとって思いもかけないものだった。

「…まだ何か隠してるんですか？」

自然と彼の口調が強くなっていた。責めるように博士を睨み据える。いったいこれ以上の何を隠しているというのか。

「それは…」

博士は少々言いくそうに一度視線を逸らしたが、ちろりと横目で光彦の真摯な表情を見ると、諦めたようにため息をついた。

「哀くんが…哀くんが姿を消した理由は彼にあるんじゃない」

「…そう、ですか」

相槌の言葉は、疑問にさえ変わらなかった。なぜなら、彼には思い当たる節があったから。

甦る記憶の中に映るもの。それは――

短い間の後、確信を持った顔で彼はその言葉を口にする。

「手紙、ですね。彼の持っていたあの薄っぺらな」

博士は何故それを、というような驚きの表情で彼を見つめた。

「6年前のあの日のこと。あなたがそうであるように、僕も忘れることはできなかった。それどころか、彼女と再会した今ではより鮮明にあの日のことが目に浮かんでくるんです」

6年前のあの日のこと。

灰原哀が去った地下室で、江戸川コナンが握り締めていたもの。

茶色の封筒。彼宛につづられた手紙。特別な、モノ。

それが恋文ではないか、と疑ったときもあった。でもそれは彼の態度でわかった。彼は無理に彼女のことを忘れたがっていた。彼女の名前すら口にしようとしなかった。

恋文であるはずがない。きっと自分たちが知らない大切なことが書かれているはずだ。まさかそれを読ませてくれだなんて言えるわけがなかったが、ずっと自分の胸の中にあったことは確かだった。

「何が書かれていたかわしにはわからんが、そこに全ての事実が書かれていたのは確かじゃよ。おそらく哀くんはコナンくんは何らかの罪悪感を感じていたんじゃないかのう」

博士は寂しそうにそう呟いた。

「…そしてコナンくんは今になってそれを許した…」

「いや、彼は…」

彼は何か言いかけたが、考え直したようにあわててごほん、と一つ咳払いをした。

「とにかく哀くんはコナンよりも厚い氷の殻で身を固めてしまっているんじゃない。彼女が自分の意志で消えたあの日からずっと。じやから彼女にコナンが今日中に帰ってくると知れたらまずい。もしかしたら哀くんはコナンがあの子の周りの氷を溶かすまでに逃げ出してしまうかもしれないじゃろ。『自責の念』とやらで」

「そう、…ですね」

「・・・切ないのう」

ため息と一緒に出した博士のその言葉に、光彦は思わず彼の顔をうかがった。博士の虚空を見つめるその瞳は哀しく揺れていた。

「こんなに哀くんのことを思っている、こんな傍にいても、わしの力じゃ何もできんなんて、歯痒いのう」

「…僕も…同じ気持ちです」

光彦はそう言って寂しそうに笑った。

彼女の心を塗り固めている表面は溶かすことはできても、その中核は壊すことは、できない。

自分はなんて無力なんだろう。けれどそれでも彼女が微笑んでくれるのなら。あの子の彼女を取り戻してくれるのなら……。

そのとき、がちやり、と居間のドアが開くと、歩美が顔を覗かせた。

「光彦君、何やってるの？元太くんが光彦くんのたい焼き食べよ

うとしてるよつ。早く来ないと食べられちゃうんだから！」

「え、あ、はい！」

光彦は思わず大声で言つて、居間に向かい歩きかけると、思い直したように踵を返した。博士が物を言いたそうな自分の顔を見つめている。そんな彼の表情に光彦は思わず笑みを作ると、

「大丈夫、コナンくんがすぐに何とかしてくれますよ。それまでの辛抱です。彼を信じて、待っていきましょう」

と言つた。そんな彼の様子に博士も思わず口元を綻ばせると、まあ、それはそれで複雑なんじゃが、とほんの小さな声で呟いた。

「え？」

光彦の怪訝そうなその顔に、聞こえてしまったのか、という顔で決まり悪そうに笑う。

「まあ一種の・・・一人娘を持つ父親の嫉妬みたいなもんじゃよ。まさかこのわしがコナンをそんな風に見てしまうとは思わなかったがの。」

彼の方が、哀くんより付き合いが長いというのに」

そう笑つた博士の言葉に、一瞬耳を疑つて、まじまじと彼を見てしまった。それから、思わずぷつと噴出す。まさかこんなに身近に大きな障害があるなんて、きつと、彼は今は何も知らないだろうに。これで彼が彼女とうまくいったら、一体どうなることやら・・・

「だめつ！！元太くん、これ光彦くんのだってばもう…ねえ、哀ちゃん、何か言つてよお！！」

甲高い声が居間の奥で聞こえ、光彦ははつと振り返る。

「ちよつ、ホントに食べてるんですか！？ダメですよ！食べちゃ！僕のたい焼き！！！！」

光彦は思わず声を上げる。博士は愉快そうに笑つと、ぽんつと軽く彼の背中を叩いた。それに軽く会釈すると、彼は居間に向かって小走りした。

本当は。

本当は、たいやきなんてどうでもよかったけれども。

本当は、彼と一緒に、コナンの帰りを待っていたかったけれども。

けれど、博士と一緒に待つのも照れくさくて。自分の知らない間にいい方向に変わった彼を見るのもなんだか照れくさくて。それから、居間にいる彼女の顔を見て、『コナンくんが貴方に逢いにきますよ！』と言つてあげたくて。

鬱々とした気持ちはいつのまにか清しい気持ちに変わっていて。きつとドアを開ければ、みんな怪訝に思つかもしれない。灰原さんにばれたら一大事。サプライズが台無しだ。

光彦はドアの前で立ち止まり、深呼吸をすると、頬をぴしゃりと強く叩いた。それから「よし」と小さく呟くと、3人のいる居間へ続くノブにそつと手をかけた。

時刻は、やっと夜の7時になったばかりの阿笠邸 寝室。

灰原哀はベッドに身を横たわらせてぼんやりその白い天井を見つめていた。

とりあえず今日はここで眠りなさい、と以前彼女が『寝る場所』として使っていたスペースに通される。そこには、あのころと同じ配置で、あのころと変わらないベッドが2つ置いてあった。

地下室にあったのは簡素なアルミパイプ式のベッドだったが、寝室にあるのはあのころと少しも変わらない、しっかりしたシングルベッド。そのベッドは彼女が使っていた6年前のままで、ふかふかで温かい匂いがして、とても懐かしくて落ち着いた。

なぜこんな状態になってしまったかというところ。

博士にまだ体調が優れないからという理由で、子どもたちを帰すとすぐに寝かしつけられてしまったから。

（今日中にどこか消える筈だったんだけど…）

哀は思わず自嘲の笑みを浮かべると、そっと目を閉じた。

——蘭くんは去年の夏、高校時代からの同級生と結婚したよ。

子どもたちが来る少し前、博士が心底困った顔をして自分にそのことを教えてくれた。しかしいくらその理由を尋ねても彼は他人様のことじゃから、と口を濁して、それ以上のことは一切教えてくれなかった。それでもまだ逃げることもせず、この場所に自分を留めているのは、彼らが自分に見せてくれたたくさんの笑顔だったのかもしれない。

久しぶりに見た子供たちの表情。あのころとは外見はだいぶ変わって見えたけど、内面は少しも変わっていなかった。一緒にいたい、と純粹に思った。

でも。

でもきつともうすぐ限界が来る。ここにずっといればあのヒトはいつか戻ってくる。

きつと、もうすぐ。…ここ2、3日の間に。

そして、いつかは彼女とも逢ってしまふ。

そんなところにいつまでもいられるわけがない。

それにしても一体どうしてこんなことになったのだろう。――

そこまで考えると、彼女はごろり、と寝返りを一つ打った。そしてまた壁を見つめながら考える。

彼女はもうあのヒトを待っていないのに。それどころか彼女は毎日毎日、違う人の帰りを待っている。

一日の初めに家を出て、夕方になれば必ず帰ってくる人。

きつと毎回、彼女とはびきりの笑顔でその人物を「おかえりなさい」と迎えるのだろう。

そして夜になればその人物と口づけをし、また、重なり合っているのだろう。

そのことに彼はどう思っていたのだろう。

今まで自分の帰りを待っていた、両思いだと思っていた彼女の突然の結婚に、何故裏切った、と罵るのだろうか。

いや、彼はそんなことをしない。

そんなことはとうに気づいていたではないか。
きつと彼は笑って彼女の結婚を祝っていたのだろう。
それがどんな心中ではあったか、自分には図り知れないけれど。
なぜなら――

哀はそこでまた思考を止め、思わず目を瞑ったまま、ぎゅっときつく拳を握り締めた。いつかのあの言葉が彼女の頭の中で木霊している。

――もう、あいつの涙は見たかねーんだよ。あいつの中から俺の存在が消え失せることになってもな…

そう。

いつか彼が自分の前で、幼馴染の彼女を想い、呟いた言葉。
いつも強気な彼が、彼女だけのために見せた、痛々しく哀しい表情。

彼のそんな表情はもう見たくなくて、そんな言葉は聞きたくなくて、彼のために、何よりも自分のために絶対元の姿に戻してみせると決意した。

それなのに結局彼を元に戻すことなどできなくて、拳句、彼の大切な人までも、自分の所為で失わせてしまった。またしても自分の罪は増えていく一方だった。

結局何も彼のためにできることはなかった。それどころか自分の撒いた種の後始末すらできていなかったのだ。

（バカみたい…）

思いもかけず出た一粒の涙がポロリと頬を伝って枕を湿らす。

そのとき、そつと誰かに涙を拭われた指の感触を感じた。かさかささえしてないが、少しごつごつした太い指の感触。

自分の胸が――

心臓が、どくん、と大きく波打って。

目を開けられずに、それどころかますます閉じる目に力が籠り――

哀はぎゅつと、下唇を強く噛んだ。

「…泣いてたのか」

ため息交じりにつぶやく誰かの声。

哀はそこではつと身を固まらせた。

この声は聞き覚えがある。

相変わらずのテノールとアルトの中間の声。

昨日聞いたばかりの声。…だけどどこか懐かしいその声。

「悪かったな。オメーがどんなに苦しんでたか気づいてやれねえで」

その声の人物はぼそり、と聞こえるか聞こえない声で呟いた。闇に消えそうなくらい小さな声で。

ベッドのマットの右端の部分がキシリと音を立てて少し沈んだ。

哀はその人物が誰だかわかっていた。わかっただけで、目を開けるのが怖かった。

そつと彼女の髪を撫で上げる感触。あのときとは違う、大きなごつごつとしたその手で。しかし優しいその手の感触はそのまま。

哀はその手が自分の頭から除けられるまで、しばらく身を固まらせていた。

その大きな手が除けられたのはしばらく経つてのこと。

ゆつくりとマットの右端の沈んでいた部分が元に戻っていく。

哀ははっとして一瞬目を開けた。もう既に彼は彼女の前にはいなかった。

「おやすみ、灰原」

遠くで聞こえる彼の声。

優しく、少し切ない彼の声。

それから静かにドアが閉まる音がした。

彼は、行ってしまった。

その瞬間、彼女バネが揺れるように、がばっと半身を起して、誰もいなくなったそのドアを食い入るように見つめた。

「く、どつ…く…」

既にそこにいない彼の名前を呼ぶ。唇が震えて声にならない。彼がいたはずのマットを触っても、温もりすら感じられず。知らず知らずのうちに再び彼女の瞳から大粒の涙が流れていた。

何故彼がここにいるのか、そんなことはどうでもよかった。ただ、もっともつと彼の声が聞きたかった。傍にいて欲しかった。触れて欲しかった。

でも、そんな権利は自分にはない。それは自分が決して抱いていけない感情。

そう思えば思うほど、取り止めのない気持ちがあふれてくる。苦しくて、切なくて。どうしようもない、この気持ち。狂おしいほどの、この気持ち。

彼が - - -

彼が、愛おしかった。

時刻は深夜2時をまわっていた。

辺りは寂々とし、ここには自分以外誰もいないようにも思えた。

しかし1階には博士がいて、そしてそのドアの向こうには、彼女がいる。

この6年、自分の前から、皆の前から行方を晦ましつづけていた人物。

自分の新たな未来を作り出した人物。

そして自分が今、誰よりも大切にしたい人物。

決してもうこの手から離したくない人物。

——灰原哀が、そこにいる。

2階の寝室のドアの前に胡座をかき、デスクライトで手元を照らし、ただぼんやりと推理小説を読んでいる少年。江戸川コナンである。

心ここにあらずといった感じだろうか。彼の様子は目線は本にあれば、文章を読んでいるというよりも、ただページを眺めている、と言ったように思えた。強いて言えば、彼の目は焦点が合っていないのだ。ただ薄弱に、ただ朦朧と、彼はそれを見つめていた。

そんな様子だったから、小説の読み具合は一向に進むわけがなく、彼は漸くそんな自分に気づいたとき、思わず苦笑した。それから一度大きく伸びをすると、再びその視線を文字に向けた――。

+++

コトリ、という幽かな物音を耳にし、江戸川コナンは呼んでいた本のページに小さく折り目をつけて閉じると、その蒼白い顔をそつと上げた。ドアの向こうではなく、こちら側から聞こえたので、誰が発した音かはわかっていたけれど。

半螺旋の階段の脇から見えるのは、大きな白い影。勿論、博士だ。全身、真っ白なシルク生地のパジャマを着た博士。

白地で金色の刺繍糸で縫ったイチヨウのマークがワンポイントに胸元と襟についていて、ライトの光が布地を照らし、仄暗い闇から人物ではなく、布地だけを浮き出しているかのようにも見える。

勿論、それは彼の初恋の女性であり、この7年間、友達以上恋人未満という微妙な仲をずっと保ったままの女性でもあるフサエさんが彼の誕生日にプレゼントしてくれた、彼女の会社製のパジャマなのだが。彼女の会社の、彼のためにフサエさんが選んだというその

パジャマは彼によく似合っていて、それを貰って初めて袖を通したときの嬉しそうな表情は忘れられない。今でも彼のお気に入りのパジャマ。

そんなアイテムを身に着けていても彼女が来てからはここ最近ずっとこの調子で。心配で心配でしかたないのだろう。暗い表情を身に纏った彼に対して、コナンは思わず口元を綻ばせた。

「何だ、まだ起きてたのか？…早く寝ねえと体に毒だぞ？」

そう彼の体を気遣えば、博士は気分を害したのか、闇の中からさっと光が当たる場所まで顔を出し、あからさまに眉を顰めて抗議した。

「バカもん、ワシを年寄り扱いするでない？。それでも昔と少しも…」

「じつとり。」

何か部屋の中で音がして、コナンは目の前の彼に向けて、しつ、と口元に指をあてがった。博士はあわてて自分の口を押さえた。

素早く立ち上がると、彼は物音を立てずに、中を警戒しながらそっと寝室のドアノブをまわした。

少しの隙間から覗き込む何かの影。さっと動いた気がした。慌てて一気にドアを開ける。

まず最初に目に飛び込んできたのは正面の窓。

少し開いた窓からは冷たい空気が入り込み、カーテンをそよそよと揺らしていた。まだ3月にもなっていないというのに。

嫌な予感が2人の脳裏に浮かび、コナンと博士は思わず目を見合わせた。

そしてほぼ同時にベッドにさっと目が行く。

- - - いる。

何も変わりが無い。相変わらずすやすやと寝ているのが、遠目で見てもわかる。

穏やかな表情をして、すやすやと静かな寝息を立てている。

コナンは思わず安堵のため息をついた。そしてまた元通りにドアノブを引こうとした、その時 - - -

ごとり、とまたどこかで音がして、彼らはその音の方向を反射的に視線をやった。

次の瞬間、コナンの口から出てきた言葉は思いもかけず気の抜けた言葉だった。

「なんだ、オメーかよ・・・」

いつのまにに入り込んでいたのだろう。ベッドの下から顔を出すのは黒猫1匹。博士がずいぶん前からえさを与えるようになったメスの野良猫。どうやら原因は『彼女』らしい。

コナンと博士は思わず顔を見合わせて苦笑いを浮かべ、その黒猫の柔らかな体を抱きあげると、部屋を後にした。

+++

居間に戻ると、2人はソファに腰掛け、お互いしばらくは黙ったままで。

コナンは手元にあるブラックコーヒーの入ったマグカップをただ口を真一文字にしたままで見つめ、一方、博士は時折2階に視線をやっては疲れた表情で小さいため息をついていた。

「ホントに、俺が起きてるから、博士は寝てていいんだぜ？」

テーブルの下で温かいミルクをぴちゃぴちゃと音を立て、器用に

飲んでいる黒猫の頭を指の腹で優しく撫でながら、コナンはいつに
なく優しい口調で言った。

コナンだってわかっていた。彼女が起きたときに笑って迎えてあげたい。哀を自分の娘同然に思っている彼なら、きっとそう思っているはずだ。――でも、そのために体を壊しては元も子もない。

しかし博士はその言葉を聞くと、ふっと視線を彼に向け、力なく
笑みを浮かべた。

「……いや、眠れんのじゃよ。朝、起きたら哀くんがまたいなくな
っているような気がして。」

6年前のあの日のように。手紙だけ残して、遠い町に一人行っ
てしまっただけではないだろうか、と。そしてもう二度と帰ってこんの
じゃないか、と不安で不安で堪らんのだ、と。

瞳に涙を潤ませて、ずっと鼻を吸って博士に対して、コナンは何
も言えなくなってしまった。

そして、また『6年前』か、とポツリ、と呟く。

彼らの中で6年前の出来事は心に深い傷を残していたようだった。
博士の中で、歩美の中で、光彦の中で、元太の中で、そして――

「……だがそれは新一。君も、同じなんじゃろ？」

唐突に出たその言葉に、コナンは一瞬驚いたような顔をして博士
を見た。それから、苦笑いを浮かべて、ああ、とつぶやく。

「……俺は、あいつをも手放したくねえ。一生な」

「一生、か」

博士はふふつと小さく含み笑いをし、

「それは哀くんへのプロポーズの言葉と捕らえてよいのかのう？」
と訊いた。

「……はあ？」

数秒の間を開けて、コナンは怪訝そうに博士を見つめる。博士は、

冗談じゃよ、と口の中で呟いてみせた。それから寂しそうにため息をつく。そんな彼の様子にコナンは思わず失笑すると、コーヒを一一口に流して、喉を潤した。

「…そんなじゃねーよ。ただ、これは俺の願いだ。もう二度と俺の目の前から消えないで欲しい…」

「え？」

案の定博士は目を丸くしてこちらを見ている。コナンの言った言葉が信じられない、という表情で。

「気づいちまったんだよ。あいつがいなきゃ、俺は『俺』じゃなくなる…」
「俺は、あいつが好きだ。たぶん、ずっと前から」

そんなコナンの言葉に博士はしばらく呆けた顔で、まじまじと彼の顔を見つめた。

「…本当か？本当に君は、哀くんを…」

「…そんなの嘘言ったってしょうがねーだろ」

コナンはなぜかふてくされたように博士から背を向けた。その言葉にコナンは、そうか、と低く唸るようにつぶやくと、その柔和な表情をぴりりと強張らせた。

「なら早くその思いを彼女に伝えんとな。さもないと哀くんは君を誤解したまま、ここを去ってしまうことにもなりかねん。今さらかつこっけは不要じゃよ、新一」

説教じみた博士のその口調に、コナンは明らかに不快そうな顔をして彼の方へ振り返った。

「バー口、そんなのわかってるよ。だからここに帰ってきたんじやねーか。…もう、俺のせいであいつを苦しめたかねえんだ。何に縛られることもなく、あいつの思うが儘に、自由に生きて欲しいんだよ」

「新一…」

「まあ、俺の気持ちを言ったところであいつが救われるとは到底思えねえけどな…」

彼はそう付け足すと、手で軽く自分の顎を2、3度しゃくつた。

「どういうことじゃ？」

博士は訝しげに訊くが、コナンはただ、ふっと痛々しそうに笑い、
「…それだけ根が深いっつうことだよ」
とだけつぶやいた。

それからソファから立ち上がると、テレビ棚がある場所へゆつくりと歩き出し、棚の上に伏せて置いた写真立てを起こした。

写真の中の彼女は相変わらず笑っていた。

彼はその写真を手にしばらく見つめていたが、腹の底から大きくため息をつくとき、それをまた元の場所に戻したのである。それから、
「ああ…」と思い出したように振り返った。

「また、新一と呼んでしまったな。すまなかった」

その言葉に、そういえば、と一連の会話の中でのことを思い出す。
が。コナンは柔和に口を緩ませた。

「この前のことを気にしてんだったら、別にもういいよ。呼びにくいんだろ？博士は。この6年何度言ったって変わらなかったんだし。どうしたって博士は俺をコナンと認めようとしなないんだ」

「そ、そんなことは」

慌てる博士に、冗談だよ、と軽く笑う。

「歩美たちの前ではちゃんとコナンと呼んでるようだし、呼びにくいんだったらそれでいい。好きなように呼んでくれ。俺は確かに工藤新一として博士と生きてきたんだし。これから生きてくんだと思う。勿論、表ざたには出ないけどな…正直、俺をどう呼ぶかいちいち困ってやりにくそうにしている博士を見てられねーんだよ」

「そ、そうか…それなら、よかった」

コナンの言葉に、博士は嬉しそうに満面の笑みをこぼした。心からほっとしたような表情で。それを見て、コナンも穏やかな気持ちになっていく。実際こんなに彼と話したのは久しぶりだろう、とも

ここ数日で、一体どれくらいの時間の分話しているのだろう。
それもまた、2階で今もスヤスヤと眠る彼女のおかげ。

「なあ、博士」

「なんじゃ？」

「…灰原に、伝わるかな」

今の自分を。

自分がどう生きてきたか。何を思っているか。
自分の気持ち。

「伝えようとすれば、伝わるさ。蘭くんだって、そうだったじゃ
ろ？」

「…ああ、そうだな」

コナンは少し哀しそうに視線を博士から外すと溜息をついた。

「大丈夫じゃ、大丈夫」

博士が大きく頷くその横で、テーブルの下にいた黒猫がコナンの
膝に乗る。それから、彼の頬に顔やしっぽや体を摺り寄せて「にや
あ」と一声鳴いた。ガンバレと言っているような、そんな気がして
彼は思わず噴出した。

頬が痛い。

ぬめつとしたような、それでいてざらざらしている何かが、自分の頬をしきりに撫でている。

胸が息苦しい。

何かが乗っているような重みを感じる。

しなやかで、柔らかい何かが・・・。

がぶつ。

「っ!？」

突然自分の頬に鋭い痛みを感じ、灰原哀は思わず飛び起きた。

ビロードのように黒くつややかな毛並み、しなやかな肢体。とんがった耳に、小さく豆粒のように可愛げのあるツンとしたピンク色の小鼻。金色に輝くアーモンド色の瞳を持つ、絶世の美女。目の前にいる、それは・・・

「きゃっ!」

にゃああ、とその黒猫は一声上げると、ようやく彼女の体から退けた。

「猫…?」

哀はしばらく呆然とそれを見つめていたが、突然ふつと口元を緩め、黒猫を抱き上げようと手を伸ばした。一度ベッドの下へ逃げ込んだその猫は、彼女に手を差し伸べられると素直に顔だけ出して、ピンク色の鼻先を押し付け、ふんふんと匂いを嗅ぎ、彼女の指先をぺろぺろと舐めはじめる。そんな黒猫に優しい瞳を向けながら、哀

は語りかけた。

「おはよう、あなたは博士の家の子なの？」

哀の問いかけに答えるかのように、その猫は顔を上げ、にゃん、と短い鳴き声を上げる。それから彼女の指元から離れると、尻尾をたおやかに揺らしながら少し開いてあったドアに顔を押し込ませ、ドアの向こうへあつという間に消えていってしまった。

哀はその後姿を見つめながら、思わずくすりと微笑んだ。

しかし再び静寂が戻るとその笑顔が嘘だったかのように、暗い表情に変わってしまった。

自分以外いなくなってしまった部屋。窓の向こうの東の空はうつすら白じんでいて、昨夜はあんなに綺麗に輝いていた星は既に霞んでいた。新しい朝がきたのだ。

隣には博士はいない。糊の効いた白いシーツ。綺麗に畳まれた布団。

6年前までとは違い、体も大人に近づいた一人の女性の隣に寝ることに躊躇があったのか、ベッドは少しも使った形跡がなかった。哀はほっと小さくため息をつく、そのしなやかな5本の指で顔を覆う。

喉が渴いていた。

パジャマの上から黄色のカーディガンに袖を通し、スリッパを履くと、ゆっくりと部屋の出口に向かって歩き、それから何歩目かで部屋のドアにたどり着き、ノブを回した。

半分ほど開いたところで、何かにぶつかり、彼女は注意深くその隙間から顔を覗かせた。

「っ！！」

それを見たたん、彼女は驚きで言葉が出ず、そこで制止したま

ま動かなくなっていた。

ドアを開けたすぐ横の壁、そこには座ったまま、体を壁面に寄りかからせて微かな寝息を立てている人物がいる。コナンだ。

彼は両腕を組み、柳のように頭を垂れて眠っている。寝相の悪さのせいで体勢が崩れたのだろう、彼の体が少しだけ哀がいたドアを塞いでいた。もしかしたら自分が夜中のうちにどこかへ行かないようにここで一晩中見張っていたのかもしれない。それを裏付けるように、彼の手元には点けっぱなしのデスクライトと、1冊の長編推理小説が置かれていた。

「バカ…」

思わずそう呟くと、その言葉にコナンはそこでようやく目を開け、その顔をゆつくりと上げた。それから彼女の姿を認め、一瞬驚いた顔をした。それから、全てを思い出したかのように苦笑いを浮かべ、

「…よお」と言った。

かなり眠そうで。目をこすりつつ、彼はそれでも嬉しそうに僅かに表情を綻ばせている。そんな彼の表情に思わず顔を強張らせると、しばし目を逸らした。が、思い直したように再び彼の目を見つめ、少し早口ながらも平静を装ったまま、

「…昨日は悪かったわね。もう、大丈夫だから」

とだけ言い、逃げるように早足で階段へと続く回廊の方へと歩いていった。

「そうは見えねえんだけど…」

背中では聞こえる彼の声。

それでも聞こえないふりをして、哀はつかつかと歩きつづけた。

「…俺、あれからあの手紙、読んだんだ」

唐突に切り出されるその言葉に、ぎくりとして哀は足を止める。

「それで？」

精一杯の強がり。

彼女は溢れる動揺した気持ちを無理やり押さえ込みながら、口角の筋肉を必死に上げて何とかその言葉を言った。

「今更な事かもしれないけど、…あのときおまえが消えなきゃいけない理由なんて一つもなかったんだぜ？」

思いも寄らない彼の言葉に、彼女は――灰原哀は、そこでようやく踵を返した。振り返ればまっすぐな瞳が自分を捉えていた。

「…どうして？…手紙、読んだんでしょ、だったら」

「ああ。何度も読んださ。その上で言ってるんだよ。だけど全然わかんなかった。…なんでお前が俺の前から消えなくちゃいけないかったか。あれは全部おめーのせいだったのか？違うだろ。『できなかった、ごめんなさい』…それで、よかったのに。あの解毒剤は俺らが望むものにはなりえなかった、ただそれだけだろ？おめーは俺の今後の健康を見込んでそう言ったんだろ。だったらそれでよかった。それを伝えれば俺だってどうすつか考えたさ。それからよかったのに…」

そんなこと言えるわけない、そう言おうと口を開いた矢先、彼がわかっていたかのように一言も言わず、その言葉を遮った。

「なあ、灰原。言っただろ、いつか。『俺はオメーに恨みなんて今はこれっぽっちもねーんだから』って」

彼の言葉に、哀は目を真開いた。一瞬だけ思考が止まってしまふ。

「何、言ってるのよ」

気がつけばその言葉を呟いていた。なぜなら。

それは組織に乗り込む前日に彼が言ったセリフ。

組織に行くなら私を殺せ、と言った自分を嗜めるために、今と同じ、少し困惑したようで、それでいて優しい表情を浮かべて彼が言ったセリフだったから。

けど。

「…あのときと今とでは、明らかに状況が違うわ。あの時は未来があった。組織を倒すことができれば工藤新一に戻り、大好きな彼女と今までどおりの生活を送ることができるといふ未来があなたにはあった。だけどそんな微かな希望さえ私は叶わなくしてしまった。何もかも、この手で…あなたの進むべき道を閉ざしてしまったのよ」

そこまで言つて、哀は思わずその白い手を握り締め、天井をそつと仰いだ。涙がこぼれてきそうだった。そんな彼女に、コナンの言葉がさらなる追い討ちをかける。

「未来…。確かにおまえの言う一つの道はなくなっちまったかもしれないけど」

ずきり、と左胸が痛んだ。

「けど他にも未来への道つつうやつはいろいろあるはずだぜ。俺らは死んだわけじゃねえんだし」

「死んだじゃない、あなたは。・・・『工藤新一』は」

哀は思わず声を上ずらせて彼の言葉を遮った

「そりゃそうだけど・・・でも、『江戸川コナン』としての俺は・・・」

『そりゃそうだけど』

その言葉に哀は再び自分の胸がずきん、と痛むのを感じた。

どうして、

どうして、そんなことを言うの？

哀の心は今、ざわざわと騒いでいた。

それでも必死に平静を装おうとした。

これ以上彼に自分の弱いところを見せたくなかった。だから――

だから。

哀は何とか蔑みにも似た表情を浮かべ、あら、と言って不器用に口元を緩ませた。

「あん？…何だよ、その表情^{カオ}。」

コナンはその整った片眉を少し吊り上げ、訝しげに哀を見る。

「…時は人をここまでして変えるものなのね。昔のあなたならそんなセリフ死んでも吐かなかったのに」

違う。

そうじゃない。

こんなことを言いたかったんじゃない。

こんなことを言う権利は私にはない。

彼にそんな言葉を言わせたのは、自分自身ではないか。

彼を変えたのは私が――

「…昔の俺って何だよ」

案の定、不機嫌そうに彼は彼女を軽く睨んだ。

「…ごめんなさい、何でもないわ」

哀はあわてて口の中で呟くようにその言葉を言つと、くるりと向きを変え、再び歩き始めた。

「待てよ、灰原…っ」

背中を聞こえる、彼の声。そして近づく足音。思わず早足になっていた。

つかまりたくない。

彼から逃げ切りたかった。

「待てって！」

彼の力強い手が、自分の手首を捕まえる。

顔が、見られない。

「…離して」

彼女は震える声で、それでも精一杯声を振り絞って小さく叫んだ。

「なあ、灰原。…俺は…」

「聞きたくないの。もう、あのころのことは忘れたいの」

忘れる？

そんなことできるはずない。

一生自分が背負わなくてはいけない罪。

そんなこと始めからわかってることではないか…。

みるみるうちに自分の手首を掴む彼の手は弱くなった。

彼の温もりを感じていた場所が次第に冷めていく。

外の空気が徐々に手首にぶつかっていく。

つめたい、空気。

哀は戸惑ったような顔をしてコナンを見上げた。

「…俺は忘れたかねえな、もう二度と」

ぼそり、と彼が呟いた。

その瞬間、涙がはらり、と一滴落ちる。

透明な、純粹な涙が一滴だけ。

それを彼に気づかれなくて、彼女はじっと俯いたまま、拳に力を入れ、床を睨んでいた。

「俺らが戦い続けたあの2週間、俺らが誓ったあの約束。俺にとつてはもう二度と忘れたくない記憶だよ。例えそれがおまえにとつてはつらい2週間だとしてもな」

「…どうして？それはあなたにとつても辛い記憶だったはずじゃ

ない。2年間ずっと追ってた組織を倒したから？あなたの探偵の血が忘れたくない、と言ってるの？それとも」

「違うよ、灰原。探偵とか、組織とか、そういうのは全然関係ない」

コナンが哀の言葉を遮るように強い口調で、しかし優しさを含んだその声で言った。

「…ただ単純に忘れたかねえんだ、あのころのことを。おまえが俺に見せてくれた全ての気持ちを」

「…え？」

哀は思わず彼の顔を凝視した。再び自分の手首を掴む彼の手が強くなる。

「気づいちまったんだよ。俺はオメーが――」

彼の口はある5文字の言葉のために動いていく。

それは自分のために動くことはなかったはずの言葉。

しかし、哀の耳には届かなかった。

まるで何か催眠術にでもかかっているように、その言葉だけは聞

こえなかった。

「何を、言ってるの？」

震える声で彼女は聞き返す。

「だから、…俺はおまえが」

『すきなんだ』

彼の口は確かにそう動いていた。

「…取り消して」

その言葉を口にしながら、自分の唇が微かに震えているのを感じていた。

もう、怖くて彼の顔が見れなかった。その唇の震えを隠すように、ぎゅっと下唇を噛み、下を向く。

「今すぐその言葉、取り消しなさい。聞かなかったことにしてあげる」

「…何で？」

意外と落ち着いたような声で彼は訊いた。こう答えるのがわかっていたのだろうか。

哀はその動揺を隠し、そこでようやく挑むような視線で彼をまっすぐ見上げた。

「思い出しなさい。あなたが好きなのは誰？ずっと思い続けてきた人は誰？…そして、その人と永遠に続く筈だった幸せを踏みにじったのは誰？…あなたを、こんな目に合わせたのは誰？私を恨むこそすれ、『好き』だなんて感情、履き違えてるわ」

「……………なあ」

しばらく両腕を組み合わせ、考えていたようであったコナンだったが、ゆっくりと顔を上げ、彼女を見据えた。

「もう、終わりにしねーか、そんな考えはさ」

「何言ってるの、終わりにできるわけじゃないじゃない!!」

思いもよらず、ヒステリックになって。そんな自分に気づき、彼女はさつと彼から目を逸らせた。相変わらずコナンの視線を感じつつ、でも、もう一度彼の顔を見ることができなくなっていて。

「…どうして、そんなこと、言えるの…？」

何で、そんなこと普通に言えるの？あなたは。

涙が胸の奥から湧き出てきそうで、必死に飲んで、なんとか彼の顔を見ようと前を向いた。

はっとするほど優しい、心底心配そうな表情をして、彼は自分を見つめていた。

やっぱりそんな視線に耐え切れず、思わずさつと下を向いてしまう。やっぱり彼の顔は直視できない。

震える声で、気持ちで、彼女は言葉を続けた。

「私の…。私のせいで、蘭さんはあなたを諦めて、結婚したのよ？私がいなければ、あの人は貴方と今頃結婚していたし、私が逃げないで研究を続けていればもしかしたらあなたは…」

あの人の隣で幸せな家庭を築いていたはずじゃなかったか――？

全てを諦め、投げ捨て。

彼にその事実を打ち明けることもできずに、彼を捨てて、『父親』を捨てて、友達を捨てて。

この町を飛び出した。

諦めなければ、事実を打ち明けていれば。

もしかしたら何かしらのことがあったのかもしれない。
でもその道を選ばずに、逃げ出した。

空白の6年の間に、交わることのしなかったこの6年の間に、彼の愛する人は、彼を諦め、別の男性と恋に落ちた。

その元凶を作った自分に対して、どうしてそんなことを言えるのだ。

もし、それが本心で言ってるとしても、きっと彼が今抱いている感情は偽りであって、それに気づいていないだけなのだ。

そう、いつになっても自分は彼女の代替品であるに過ぎなくて。

そんなことで不満を感じる権利も自分にはないけれど、でも彼にとってそれは絶対間違っていると思うから。

罵って欲しかった。憎んでほしかった。こんな言葉、間違っても自分に言ってほしくなかった。

「殺してやる」と首を絞めて欲しかった。こんな視線を向けるのは、自分じゃない。ただ一人であって欲しいのだ。たとえもうお互

いが結ばれることがなくなったとしても。

――それは自分のエゴでしかないのだろうか。我儕にすぎないのだろうか。

「違うんだよ、灰原」

ポツリ、彼が言った。溜息と共にポソリと吐き出されるその言葉に哀は何かを感じて思考を止めた。

そうじゃねーんだ、口の中で再びつぶやくコナンの声が哀の耳に幽かに届き、そこで彼女は上目遣いに彼を見た。彼はその視線を感じたのか、ほんの一瞬哀から目を逸らし、それから覚悟を決めたように、再び彼女を見つめ返した。

14（後書き）

違う違う違う違う♪そうじゃない♪…っという歌、ありましたよね。

実はこれを作るとき、それを思いながら書いてたという。。

…あ、今知らない情報？（笑）。

こつぶでした。

ちよつとあとがき書いてみた。（笑）

なんだかリメイク番だというのに、皆さん毎回読んでいただき、ありがとうございます。嬉しいです。

読みやすくは行とか変えたり、ちよこちよこ加筆修正とかしていたり。少しは読みやすくなっているかな。

Candlelightのときは、文章を変えたり、加筆修正もしましたが、またちよつと文章が可笑しなところとかあつて。ちよこちよこ直すのは楽しいです。リハビリにもなります。

なので、がんばります。

…ッといつても、今ぷーなのでできることであつて（笑）。

早く仕事見つけよう。こつぶでした。

茜色の夕日に照らされ、俺たちはあの日、そこにいた。

あのころよりほんの少し幼さが消え、背が高くなった俺と、髪型を少し変え、化粧も薄く塗り、また一段と綺麗になった蘭。

あの日、俺たちは同じ歩調で歩き、夕飯の買い物を済ませ、彼女の父親の待つ家路へと向かっていた。それはいつもと同じ光景。何も変わらない光景。

—— ねえ、コナンくん。夕日、綺麗だね……。ちょっと寄り道してかない？

ふと足を止め、その言葉を口にしたあいつの表情。

その時の表情は今では取り分けてはつきりと思い出すことはできない。

それだけいつもと同じようにみえたからだ。

そう、いつもと同じ。

ただ穏やかに笑っていた。

だから俺はその言葉の真意に何一つ疑うこともなかった。

俺たちがこれから行くところとする場所で、一体あいつが何を喋ろうとしているかだなんて少しも考えてもみなかった。

あいつが俺に向けたその『提案』を、ほんの些細な気紛れだと思っていた。

だけど、それは違っていた。

俺は――

俺はあいつを心のどこかで、軽視していたのかもしれない。

+++

阿笠邸。

高い天窓から薄白んだ陽光が部屋の中に射していた。

少しずつ、少しずつ明るくなっていく光。

その光の下に二人は立っていた。

お互い、相手の目から一秒足りともその視線を逸らそうとはせず、ただ見つめあっていた。

2人の中で、長い時間が過ぎていたようにも思えた。

そんな静寂の中に、2人は、いた。

「どういうこと…？」

長い沈黙を破ったのは他ならぬ哀だった。

「ねえ、答えて。…あなたと彼女との間に、一体何があったの？」

その言葉を聞いて、コナンは大きく溜息をつく。

今日になって、この短い時間の中で吐いた何度目かの溜息。

哀が混乱しているように、コナンにとってもその心中は少しも穏やかではなかった。

今から話そうとしていることが哀にとって、そして自分にとって吉と出るか凶と出るか、それはわからない。本来ならばこんな記憶、自分ともう一人の彼女の間にだけで留めておきたい話だった。

しかしそれでもこの話はしなければならぬということだけは彼には十分過ぎるほどわかっていた。ここで足踏みするわけにはいか

ないのだ。少しでも哀を樂にするには、ここに、自分のもとに彼女を留めておくにはこの方法しかなかったのだ。

それが喻え何パーセント、というほんの小さな確率だとしても。僅かな可能性がほんの少しでもあるのならば、その可能性に賭けたかった。そんな自分の性分を哀はわかっていて、だからこそ彼女を余計に苦しめさせていたのではあるが――。

「おまえが…」

ほんの少しの間の後、コナンはようやくこの話を口にしようとしていた。

緊張のせいか、痰が喉に絡まりうまく言葉が出ない。コナンは軽く咳払いをすると、覚悟を決めたように、目の前の彼女のその大きな瞳を、睨むような視線でじつと見つめた。

「…おまえがいない間に状況は大きく変わったんだ。あいつは俺が工藤新一だったってことも知ってるし、俺が何故こんな姿になったかも知ってる。何もかもわかった上であいつは結婚したんだよ。自分が心から愛した男とな」

「…そう、それじゃあ」

「でも、それはおまえの所為じゃねえ」

彼女が何か言う前に、コナンは早口で遮った。

それに対して彼女の反応は、綺麗に整った眉根がぴくり、と動いた。ただそれだけ。それ以外は何も前と変わったところはなく、彼女は平常を保っていた。

しかしそれはつくられたものだとかコナンは確信していた。哀が考えていることぐらいお見通しだ。というより、耳にたこが出来るくらい、彼女からはそのような話は何度も聞いている。それぐらい罪の意識で哀自身を苦しめていること。

だから。

もう、その口から言わせなくなかったのだ。もう、何も考えてほ

しくない。彼女が考えることを、心配ごと全て1つずつ取り払ってやりたかった。

実際、半分以上は自分の責任なのだ。

彼女の。

哀のせいじゃない。

だから、そんな顔をしないでほしかった。

次の言葉を待つように、自分の顔をうかがっているその端正な彼女の顔を見つめ、コナンはゆっくりと口を開く。言葉を選びながら

「…ばれてたんだよ、あいつにはとくに。…おまえがまだここにいるときから。『江戸川コナン』つつうガキの正体と、そいつ自身すら気づかねえ心の内もな」

目の前の彼女の表情の変化を探る。やっぱり、少しずつ蒼ざめていく哀の表情^{カオ}。コナンはその力オを見つめながら、さらに言葉を続けた。

「…でも蘭はそれを口には出さずに、ずっと知らないふりをしてきてくれた。だから俺も『コナン』のままでいられた。あいつの苦しみも哀しみも気づかねえで、のうのうと生きてることができたんだ。…あいつを氣遣うつもりで、逆に奥へ奥へと追い詰めていたことすら知らずにな」

馬鹿だよな、と、コナンはその言葉だけは何かまずいものでも吐き出すかのような表情で呟いた。

一瞬目をつぶり、額を片手で覆う。

そうして、ゆっくり目を開けた。

脳裏にはつきりと映るのは、当時の記憶。
丹精して磨かれた窓ガラスのように、それは、彼の頭の中に明瞭に映し出される。

4年前。

西の空へ、少しずつ、少しずつ沈んでいく夕日を、公園のベンチに腰掛け、2人は眺めていた。

綺麗だね、と彼がいつものように無邪気な子供の表情を作ると、彼女は少し寂しそうに笑った。

どうしたの？、彼は思わず目の前の『幼馴染』に尋ねる。

小学4年生の『居候』としてではなく、一瞬だけ、隣の彼女と同じ20歳の青年に戻っていた。

——私ね、告白されちゃった。高校時代のクラスメイトで、とっても優しい人よ？…ねえ、コナンくんはどう思う？

突然彼女はその言葉を口にした。赤い夕日が思いのほか眩しくてそれに背を向けた彼女の輪郭が赤くゆらゆらと浮き出て見える。赤い光の羽衣を纏った天女。

しかしどこかその天女表情は美しく、儚げで。

（・・・“どう思う”、とは？）

彼は彼女が投げかけたその問いかけに答えることができなかった。「告白された」という言葉自体にはそれほどショックを感じることはなかった。

その言葉のニュアンス的に、彼女は相手に気持ちが行っているようにも思える。

だったらこちらから背中を押すべきではないか、と彼は思っていた。

自分が『工藤新一』に戻ることができない限り、そして彼女の傍にいつもいない限り、それを止める権利はどこにもないし、逆に勧めてあげなければならないこと。

ガキの姿の、ただの居候の身分である自分は、10も年が離れた彼女を、本当の意味で幸せにはできないし、彼女の幼なじみである自分は、その彼女の想いに電話でしか答えることができない。

そんな細い絆で彼女を自分のもとに繋ぎ止めるのは彼女にとって酷なことだから。

そしてその気持ちは、組織があり、消えた少女がまだ自分の傍にいたときから思っていたことだし、また、そのことは今になっても少しも変わることもなかった。

けれども実際彼女にそんな話をされたら、快く彼女の科白を受け入れる、とは到底思えなかった。

少なからずのショックは覚えるだろう。たとえその相手が彼女の永遠の伴侶ではないとしても。

彼はそう思っていた。しかし――。

しかし、思いもかけずそのときの彼にはそんな感情よりも、蘭が最後に彼に言った、「ねえ、コナン君はどう思う?」という言葉の方に気が行っていた。

それだけ彼にとつて重大で、衝撃的な言葉にその前の彼女の言葉が霞んでしまったからだ、と彼は自身で解釈した。けれども、それは違っていた。それだけではなかった。それがわかるのは4年も経った後になってからのことなのだが――

(…“どう思う”、とは?)

目の前でじつと自分の見つめる彼女が今何を言いたいのか、自分に今何を言って欲しいのか、彼自身、その意図を汲み取ることができなかった。

いや、汲み取りたくなかったのかもしれない。

認めてしまえば、必然的に彼女が何を知っているのかが見えてくる。

そのことを認めたくなかった。

彼自身が3年間彼女に隠し通していたことを、彼女がその生涯を終えるまで、知らないままできて欲しかった。所詮そんなことは無理だとわかっていても――。

だから、こう答えた。

——好きなの？その人のこと。

え、と彼女は戸惑った表情で彼を見つめる。
彼は子どもを演じ続けていた。

——蘭姉ちゃんが好きだ、って思えるならいいんじゃないの？
・新一兄ちゃんをふっきるいいチャンスだと思っよ？

ダカラ 俺ノコトナンテ モウ 忘レロヨ・・・

彼は心の中で呟いた。

自分を見つめているであろう目の前の彼女の表情を見るのは辛かった。

彼の言葉に、蘭は一瞬視線を床に落とす。そして再びゆっくりと顔を上げた。

——あなたは、それでいいの？

今度は彼が驚く番だった。思わず蘭を凝視する。
が、すぐにいつもの無邪気な笑顔を作ると、あたりまえじゃない、と答えた。

僕はいつでも蘭姉ちゃんの味方だよ、と。

屈託のない笑顔。

表面は10歳の少年。

しかし、実際は20歳の青年。

彼女が今まで待ちわびていた相手。

——それが、自分。

彼女はそっか、と呟くと、しばらく考え込んだ様子で足元を見つめていたが、突然表情を崩して、微笑んだ。

それからありがとう、と一言、震える声で言った。

小刻みに震えた、薄紅色の唇。

ぼとり、ぼとり、と透明の液体が彼女のスカートの上に落ち、染みを作る。

それは嬉しくて泣いているのではないというのは彼にもわかっていた。

思わず、その小さな手を彼女の手の上に重ねる。

が、蘭はその瞬間、そっと彼の手をもう片方の手でのけた。

彼は驚いて蘭を見上げる。

怒ってはいない、けれども決して笑ってなどいない。ただ、哀し

そうな顔で彼女は自分の顔を見ていた。

そして、さよなら、と呟くと、彼女は――。

彼女は、彼に口づけた。

柔らかい唇が彼の唇に触れる。

彼の唇に伝わっていくのは塩辛い水。

彼女の、涙。

別れの、涙。

それはほんの一瞬だったのかもしれない。

数秒のことだったのかもしれない。

しかし、彼女の哀しみは全身に彼の中に十分すぎるほど伝わっていた。

それが自分に対して、『工藤新一』に対しての別れの言葉だという――。

そしてようやくそのことが自分の中で確実に理解していく。
否定できない事実。
蘭は。

——蘭は、知っていた。

「あいつは…知っていたんだ。俺が『工藤新一』だってことも、これから先もあいつが求める『工藤新一』になれないってことも」
再び現在。

目を瞑っただけで、瞼に映る幼馴染の泣き顔。ゆるゆると目を開ければ、憔悴しきった表情で自分を見つめる別の少女に切り替わる。

「ねえ…」

その少女、灰原哀が声にならない声をゆっくりと発する。

「…いつから？…いつからあの人は気づいていたの…？」

声を震わせながら何とか口にした哀の言葉に、コナンは小さく「さあ」と呟いた。

「さあ、いつからだろうな…」

何度も何度も疑られて。そのたびになんとか切り抜けてきたつもりだった。

回を増すたびに決定的な証拠を見せ付けられても、なんとか寸で誤魔化せていたつもりだった。

けど。

いつからだろう、あいつが俺のことを『工藤新一』だと疑うことをしなくなったのは。

いつからだろう、俺の前で『工藤新一』の愚痴を話すことのなくなったのは。

いつからだろう、俺の…。工藤新一の話が出るたびに、悲しそうな表情をするようになったのは。

「それに気づかされたのは、あいつに別れを告げられてからだな

んて…。ホント『探偵』が聞いて呆れるよな」

いや、探偵の前に。あいつの前では一人の人間。

：大切な『幼馴染』いや、それ以上のはずだったのに。

なのに、相手には見抜かれ、見透かされ。それでも何も言わずに、知らないフリをし続けて。

どうして途中でも、せめてあの告白する前に気づくことができなかったんだろう。今でも考えてしまう。

「あいつは、俺にとって最大の罪だよ。いくら償っても消えない罪」

もう、引き返すことはできなかった。

あの日、あいつの前で嘘をついた罪。江戸川コナンを演じ続けた罪。

彼女一人を愛し続けずにはいらなかった罪。

あいつを一人にしてきた罪。

江戸川コナンになってしまった、罪。

気づいてしまったことが、次々と頭の中を覆っていた。

2日前、6年来の親友でありライバルである服部に、自分は確かにこう言った。

『4年前、蘭を止めなかったことは後悔していない』

それは嘘偽りないこと。

しかし、その時、彼女を傷つけていたのは確かだった。

ひょっとしたら別の言い方があったかもしれない。それについてしばらく悩んだのも確かだ。

元凶となつた自分を彼女に見せたくなくて、またそんな彼女を見たくなくて、彼女の実父である毛利小五郎が止めるのも聞かず、その日のうちに毛利邸を飛び出したくらいなのだから。

阿笠邸に向かうその足で、蘭の携帯電話の留守電に江戸川コナンの声のままで、真実を全て打ち明けた。

自分が工藤新一であること、組織を倒したが元に戻る術をなくしてしまったことということを簡潔に告げた。きっと返事は返ってこないだろうし、もうしばらくは逢うことはないだろう、と彼は思っていた。どんな理由にしろ、『別れ』ということで彼女を傷つけたのは確かだったから。

「…今にして思えば、俺も灰原と同じことをしていたんだな」

コナンは思わずひとりごちた。哀はその言葉が聞こえなかったのか、首を傾げる。そんな彼女にコナンはただ笑って、何でもねえ、とだけ言った。哀はそんな彼をしばし見ていて答えを待ったが、諦めたように小さく溜息をつく、と、話題を変えた。

「…それで？ 蘭さんとは、そのままなの？」

「いや。何もなかったころの幼馴染の關係に戻った、それ以上の關係になった…とは言えないかもしれないけど」

そこで言葉を切り、手すりに全身を預け、それから大きく息を吐いた。

「…俺が今探偵に戻れているのは、あいつのおかげなんだ」

「…え？…どういう」

意味が解らない、という表情で自分を見つめる哀。その様子にコナンは思わず苦笑した。

「…オメーが消えた後、しばらくして少年探偵団は活動停止したし毛利のおっちゃんもぼちぼち仕事ができるようになってきたから手を貸さねえようにしたんだ。…それに何より、俺が探偵の仕事をやりたくなくなった、っていうか」

「…あなたが？」

哀の顔が驚きの表情に変わる。信じられないのだろう。3度の飯より1つの事件を大切にしていた自分しか知らないのだから、そう思うのも仕方ない。

そんな彼女に対して、コナンは思わず苦笑して頷いた。

「それをあいつが救ってくれた。あいつがその男と付き合うと決めたとき、俺に電話で報告してくれたんだ。そのときにあいつに叱られたんだよ。いつまでそうしているつもり？あなたは日本の救世主、でしょ？ってな」

コナンは思わず表情をほころばせた。

驚いて、哀はコナンを凝視した。

「…つまり、そういうこと。あいつは何も変わらなかったんだよ。あんなに傷つけてもそれでもやっぱり心配してくれて。江戸川コナン」工藤新一ってことに気づいた後も、俺がもう昔の俺にはなれないって気づいても。…俺にあんな傷つくようなことを言われても。あいつはいつでも俺を見ていてくれた。…そういやあいつはそういうやつだったな、なんて今更思っちゃって」

そこで、言葉を止める。

「弱かったのは、逃げてたのは俺のほうだった。いつでも、俺のほうだったんだよ。…な？オメーのことなんて言ってられねーだろ？」

「…工藤くん」

自嘲の笑みを浮かべたコナンに対して、哀は戸惑った様子で言葉を失くし、視線を泳がせた。

「それでも罪の意識は無くなるはずもなく、懺悔してもしつくないことも沢山あったけど。けど、そう思う一方で」

一瞬言葉を切り、彼はその唾を飲み込んだ。

「ホントはこんな感情絶対持つちゃいけねえんだろうけど。…すげー、嬉しかった」

「え？」

哀は思わず顔を上げて、コナンの顔をまじまじと見た。この話の流れで彼の口からそんな言葉が出てくるとは思わなかったから。

「…都合のいい話かしんねーけどさ…。一方で救われた気もしたんだよ。俺の、蘭を…あいつを大切にしたいって気持ちは変わらなかったから。…それが『恋愛感情』として繋がることはなくても、願わくばずっとあいつの幸せを見守っていたっていう気持ちは変わらなかったから。だからそれが蘭の言葉から、俺に向けての気持ちと同じだっていうことが感じられたから、本当に嬉しかったんだ」

「…身勝手ね」

「…だよな、やつぱ」

「男の風上にもおけないわ、ホント…。あのヒトが優しすぎたからこういうこともありえたのに。ホント、信じられない。サイテーだわ」

哀の自分への言葉が一つずつ羅列されることに、コナンの心はズンと重くなる。先ほどの雰囲気はどこに行ったのやら。

それでも。

彼は複雑な気持ちで心が一瞬折れそうになりながらも、反論する。

「けど、しゃーねーだろ。そう思っちゃったんだから。俺と蘭はきつところなる運命だったんだよ。姿形が変わっても、ずっと繋がっていく運命。なんだかんだでいろいろこんがらっちゃったかもだけどな。多分、ずっと繋がってく」

その言葉に、少し救われたのか、ほっと哀の表情が緩んだ。それを見て、コナンもほっとする。心の中のもの少しでも軽くなることは出来ただろうか、と。

「…で。今度はオメーに対しての想いは聞かないのか？」

「…やめとくわ」

「言わせろよ」

「嫌よ、聞きたくないわ」

プイと哀がコナンから背中を向ける。思わず不機嫌になって文句一つでも言ってやろうと口を開きかけた。

彼女の肩が少しだけ、震えていた。

「はい、ばら？」

「聞いたら、泣いちゃいそうなもの」

「既に、泣いてんじゃねーか。言わせろよ」

ふつと笑って、彼女の手を引き、体を自分に向けさせる。潤んだ瞳で自分を見つめる哀に対して、コナンは抱きしめたい感情でいっぱいだった。

「だめ」

その言葉に、コナンはようやく少し浮いてきた自分の気持ちを沈ませた。

自分を見つめるその瞳は未だ震えていて。幸せの色ではなく、悲しみの色だということにようやく気がついたのだ。哀しかったから泣きそうだったから、『かわいくない』言葉をずっと連ねてたというわけか。今になって合点がいく。哀の手を握ったまま、彼は尋ねる。

「…なんで？」

次の瞬間、彼が握るその手はゆっくり彼女によって離され、哀しそうに哀は目を伏せて言った。

「…だって私はあなたに愛してもらう資格がな」

「~~~~っ!!!あのなあっ!」

その言葉を最後まで聞かずして苛苛とした様子で彼は声を上げた。

「どうして…どうして、おめーはそう頑固なんだよ、そんなに俺の気持ちが信じられねえのかよっ」

「そうじゃないわ。あなたの気持ち、嬉しかったし、それに私も工藤くん。あなたのことが好きよ。正直、惹かれてる」

その言葉に、コナンは一瞬目を大きく開いた。

「それじゃ」

「でもね」

その言葉に続きがあった。嫌な予感がした。

「『でも』、なんだよ」

訝しげに整ったその片眉を上げて、彼は次の言葉を待つ。

「それでも、私は自分を許せないの。今、こうしてあなたの目の前に立っていることも、こうして話をしていることも。貴方に好きって言われていることも、許せないの。……あなたは綺麗すぎるわ、そして私は穢れてる」

「は？！おまえ、何言ってる…」

「私ね、今まであなたに話せなかった過去、本当に沢山あるの。」

組織で暮らした十数年間、私がしたことは結果的に人殺しの薬になったあれを作る以外にも、あの男と何度も」

「やめろ、灰原」

思わず、コナンは遮った。何を言おうとしているかぐらいわかる。こんな哀しい言葉、聞きたくないし、言わせたくないのだ。哀は、泣きそうになりながらもギリギリで泣くまいと我慢しているようだった。とても痛々しくて見ていられなかった。それなのに、彼女は言葉を続けようと口を開く。

「あなたは正義の白。私はいくら繕っても黒は黒。罪は消せない。今でもね、あの男が吸っていたタバコの匂いを嗅ぐとあのころのことが鮮明に浮かび上がってくるの。目の前で命ごいをする男の悲鳴、鉄砲の音、それから」

「もういいって！…もう、いいから。…いいよ、灰原」

再び遮って、コナンは今度こそ逃すまいと彼女の手を握った。

「オメーは止められなかったんだろ？…辛かったんだろ？今までずっとそれも抱えてきたことだったんだろ？ごめんなさいごめんなさいってずっと謝ってきたことなんだろ？」

いくら組織の中にもいても。

『灰原哀』でも、『宮野志保』でもなく、組織の中の『Sherry』という一人の冷酷な若き天才化学者だったとしても。いくつもの殺人の現場に、まさに人を殺すその瞬間を何度も立ちあつていたという事実がたとえあつたとしても。

それでも、いくら姉を殺されて組織から抜けようと決意したって、組織を恨んでいたからって。

『灰原哀』として生きようと決意したって、博士や子どもたち、周りの人のいい人間に絆されたって、本来の彼女の性格などがなくなるわけではない。

博士や子どもたちに見せた優しさや心遣い。動物に向けるそのまなざし。

時々自分にだけ見せる弱音。そして、女の子らしさ。

あのころコナンが哀に感じたのは、『普通の年相応の女の子』だったということ。

それが本来の彼女なのだろう、と。心の優しい女の子なんだと思つた。

幼馴染の蘭や、歩美とはまた別のタイプの。

そんな彼女が過ごした組織の中の十数年間。

『Sherry』だったとき、彼女はどんな地獄を見てきたのだろうか。抱えてきたのだろうか。

あのころよく考えていたことだった。それをコナンは今になって思い出していた。

けれども哀は、今でもまだ、それに苦しめられていた……

「ゴメンな、灰原……」

いろんな思いが頭の中で駆け巡り、気がつけば言葉として彼女に告げていた。

「何をあなたが謝るの？あなたが私に謝る必要はないはずよ？」
眉根に皺を寄せて、哀が自分を見る。本当にわからないといった様子で。

その思いを口にするつもりはなかった。けど。

「あるよ、沢山……」

やっぱり、言葉に出てしまう。一度言葉にしてしまえばポロポロと。まるで袋に穴が開いてしまったかのように、小さな穴に米粒が少しずつサラサラと零れていくように。知らず知らずのうちに、少しずつ言葉が落ちていく。

コナンの言葉に、哀が不思議そうな顔をした。そんな彼女をただ、コナンは見つめるしかなくて。そうして、考える。

何でもかんでも背負いすぎる女をどうして自分は好きになってしまったのだろう。

守ってやりたいと思うのだろうか。救ってやりたいと。結局それは、事件を解決する時のようにすんなりと行くものではなくて、気づかなかつたり、ダメにしてしまうことが多すぎた。

蘭に対しても。哀に対しても……。今からでも、間に合うだろうか。間に合ってほしいと願った。

迷った拳句、彼はまた一つ告白しようと、ようやく今口火を切った。

「あのさ、灰原」

「え？」

「いろいろあるけど、一つだけ言っていいいか。オメーに謝りたいこと。これから付き合う上で」

「ちよつと待って、だれがあなたと付き合うだなんてっ」

顔を紅潮させて怒る哀に対して、コナンは慌てて両手を胸の前で振った。

「あ、いや。付き合っつてそういうのじゃなくて、広範囲に於いてだな、いろんな意味で…っ」

その言葉に哀はピクリと眉根を動かして、コナンを見つめた。

「広範囲？」

「…ってオメーまさかここにいること自体考えてねえとか言うんじゃないだろうなっ!？」

思わず、両手で彼女の薄い肩に手をかけてしまう。力を込めてしまったのか、哀はよろけ、壁に体をぶつけた。

「痛っ」

「ごめ…」

慌てて手を離すと、コナンは哀の様子を窺った。

「…大丈夫、びっくりしただけだから」

そう言い、哀はなおも体を壁に預けたまま溜息をつく。そんな哀に対して、怪我がなかったことの安堵と、それからその変わらぬ頑固なほどの頑なな気持ちを持ちを動かせないもどかしさに溜息を深くついた。

そんな彼に対して、哀はごめんなさい、と呟いた。

この数日で、何度この言葉を聞いただろう。彼にとってのトラウマ。

いや、もっとずっと前から。彼を苦しめた呪言のようなその言葉。6年前の、あの凍えるような雪の夜、彼女が何度も呟いた言葉。

また、聞いてしまった。心がシクシクと痛み出す。

「…あのさ、灰原」

でも、次の言葉は、少しだけ前向きな言葉に変わる。

「…もう少し、…もう少しだけ考えさせて。…整理がしたいの。
…それは工藤くん、私があなたと付き合うとかそういうことじゃなく、『広範囲』の意味で。…全てに於いて」

「え」

「いろんなことを言われたって頭の中がついてかないわ。そのとき、あなたが謝りたいこと、聞けるかもしれない。でも今は…」

「あ、ああ」

思わぬ展開に、コナンは目を丸くする。

考えてみればイエスカノーなんて早すぎたのかもしれない。今彼女に向けて言おうとしていた言葉は、本当に重大なことで、彼にとってはとっておきの告白のプロローグみたいなものだったのだけども——

にやああというその間延びした声に、二人はハッとして声をする方を見た。先ほどの黒猫がいつの間にかこちらを見て金色の目をランランに輝かせ、ちょこんと座っている。そうしてその後ろには決まり悪そうに博士が立っていた。

「お、おはよう。ジャマだったかの」

コナンは思わずジト目をして博士を睨んだ。

「ったく、また盗み聞きかよ、博士は。趣味わりいぞ」

「す、スマンスマン…」

その様子に、哀はふっと表情を緩ませる。

「あら、ジャマじゃないわ。おはよう。起こしちゃったのね、ごめんなさい」

いつもなら、ここで謙遜する彼だが、

「そうじゃな…哀くんが心配で心配で眠れなかったから、もう少し睡眠が欲しかったかな、欲を言えば」

と苦笑いを浮かべた。コナンと哀は思わず顔を見合わせる。彼らしくない少し棘の入った言葉。

無言だが少し申し訳なさそうに肩を落とす哀を見て、コナンは慌てて博士に一言言つてやろうと口を開きかけたとき――

「お詫びに哀くんの手料理が食べたいのお。哀くんの作った少々味が薄めなベーコンエッグ。じゃないと寝不足で倒れてしまう」

につこり笑つて哀とコナンに向けてウインクをする。きよんとしている哀に、なるほど、とコナンも一緒になって同調した。

「最近博士、糖尿病の気が酷くなったんだ。全部オメーがいなくなつたせいだぜ？」

「そうじゃそうじゃ」

しばらく茫然としていた哀だったが、にやあと自分を見上げて鳴く黒猫に我に返った。そうして

「…だから展開が早いって言ってるのに。…ついてけないってば」と、小さく呟いた。でも、その表情が笑っているのをコナンは気づいていた。そうして、博士も。

「…仕方ないわね。私がいる少しの間でも、もう一度博士の栄養管理を教育しなおさなくちゃ。ねえ博士、覚悟はできてる？」

少しずつ、少しずつだが哀の自分たちに対する表情が確実に昔のものに変わっているのを、二人はひしひしと感じていた。

16（後書き）

リメイク3段にして、ここのシーン大幅に変えました。展開も。スミマセン。

3月。

桜の蕾もゆっくりゆっくり膨らんで、花を咲かせる頃合いを今か今かと待ちわびていて。

温かい風に誘われて、花の香りもいつそう引き立つ季節。

小鳥の囀り、柔らかな陽光、うつすら黄緑色をした新緑・・・。

何もかも春の訪れを祝福しているように思える。

しかし、それだけを祝福しているのではなく。たとえば——
たとえばそれは一人の少女の新たな門出を祝福しているかのよう
で。

今宵は居待ち月。

その少女は、電気も点けずに、ただぼんやりと真ん丸より少し欠けた白く光るものを眺めていた。

彼女の身長よりもはるかに高くて広い天窓から、その紺色の空に浮かぶ白い月。

「...なんだ、ここにいたのか」

その声に振り返ると、案の定、彼女の思うメガネの少年が立っていた。

「…何か、飲むか？」

風呂上りだったのか、体から湯気がもくもくと湧き上がるのが見える。彼は紺色のパジャマと真っ白なタオルを首にかけ、心配そうに自分を見つめていた。

そんな彼の様子に、少女は僅かに笑みを浮かべて、ただ黙ってゆっくりと首を振る。

そうか、と彼は口の中で呟くと小さく笑い、それからそっと彼女の横に立つと、かみ締めるように、

「いよいよだな」

と呟いた。少女は彼の言葉にしばし間を空けてから、ええ、と小さく頷く。

そして、窓の外に再び視線を移した。

雲ひとつない紺色の空。

煌々と光る白い月。

がらり、窓を少し開けると、より景色は鮮明に輝いて。

ふんわりと花の香りが鼻腔を擦った。

すう、と息を吸い込んで。

やわらかな空気と、美しい花の香りと、そうして希望を全部取り込んで。

全てが胸の中に入りこんだのを確認し、少女は僅かに口元を綻ばせた。

「また、はじまるのね」

+++

帝丹中学 2年B組。

今日は修了式だ。明日から始まる少しの休暇を一体この時期の彼らはどう過ごすのだろうか。

来春の自分の進路が、希望で一杯になるために春季講習に通い出すもの、部活動に明け暮れるもの、映画やデートに費やすもの、特に予定もないままだったら家で過ごすもの、それは様々だろう。

円谷光彦の場合は、やはり春季講習に望む勉強組であつて――。まず5月初旬にある実力テストのために今から実力を高めなくてはならない、光彦はそう思っていた。

体育館で式が終わり、担任の短い話の後、配られるのが通知票。勉強の成果だろうか、今回の成績は

すこぶる良い。ほとんどが5だ。光彦はそれを机の中に丁寧にしまいこむと、少し俯き、ほうつと深いため息を吐いた。

「な」にそんな暗いため息なんて吐いてんのよ。ため息つきたいのはこっちだつての」

不意に耳に飛び込んできたその声に思わず顔を上げれば、隣の席の栗毛の少女が、頬をぷうつと膨らませて彼を睨んでいた。今日はその肩より短い髪を2つに分けて結わいている。いつもは髪を下ろしたままなのに。それが新鮮で、それに加えて、その髪型がよく似合っていて、光彦は思わずどきりとその胸を高鳴らせた。

「きつとまたツブツチ、4と5ばかりなんでしょ？どーせあたしは1と2しかないですよ」だ」

いじけというか、とばっちりというか、それともただのちよつかいというか……。少女はぽこん、と通知票を丸めて筒状にして彼の頭を軽く叩いた。

（つ、ツブツチって……）

思わず言葉を失う。そんなあだ名、初めてだ。

「佐塚にあたし個別に呼ばれてるんだよね。数学特別悪かったかなあ。……きつと春休みどっさりプリント出すつもりなんだよ？あいつ。前の冬休みも半端ないほどれちゃってさ」。遊びどころじゃなかったんだよあ？」

「君の点数がよくなるように……じゃあないんですか？ほら、実力テストも近いですし」

光彦はそう言つて苦笑する。

「そりやそうだけど…」

栗毛の少女はそれでもまだ物を言いたげな表情をしていたが、後ろの席の少女に呼ばれ、振り返った。どうやら近く武道館で行われる今人気沸騰中の若手ミュージシャンのライブの話題のようで、憂鬱だった彼女の表情はみるみるうちに明るくなっていく。

光彦はそんな彼女の表情の変化に苦笑しながら、視線を別に向けた。

廊下から1番目、後ろから2番目の席。

江戸川コナン。

彼と最後に会ったのは3週間とちょっと前、光彦が灰原哀の姿を6年ぶりに見た日以来のこと。

光彦が元太たちと見舞いに訪れた日の翌日に彼はまた一人阿笠邸を訪れた。

あのこと知リたかつたからだ。

コナンは無事、哀の元にたどり着けたのだろうか。彼女を、博士が言う『自責の念』というものから救うことができたのだろうか。そして、彼自身も自分の気持ちに気づくことができたのだろうか。あのころのように戻れたのだろうか。

聞きたいことが次から次へと、まるで谷底から湧き出る水のように、彼の頭から次々と溢れていた。

なのに、そこには誰もいなかった。

灰原哀も、江戸川コナンも、博士でさえも。

次の日も、また、その次の日もずっと…。

テストが始まったこともあり、それから光彦はしばらく阿笠邸に行くのをやめた。しばらくして、歩美が陸上部の練習で遅くなったときに阿笠邸に灯りが点っていたというのを耳にしたが、何となく足を運ぶことができなかった。

もし、訪れたときに灰原哀が再び姿を消した、という話を博士から聞かされたら、という一種の不安に駆られていた。だから、訪れなかった。

光彦はちらちらと江戸川コナンの様子を眺めていた。

コナンはぼんやり通知票を眺め、薄笑いにも苦笑いにもつかない表情を浮かべていた。

彼の何気ないその表情に、思わず光彦は彼を凝視する。表情が柔らくなつた、と感じるのは気のせいだろうか。その視線を強く感じたのか、不意にこちらを見たコナンの視線。あわてて光彦は目を逸らそうとしたとき、彼はゆっくりと微笑み、よお、と言った。

その言葉に光彦は少し決まり悪そうにため息をつくと、気だるさを感じながらゆっくり立ち上がり、彼の席のもとへ歩み寄る。

少しだけぴりりとまるで電流のように何かが走り抜けて、光彦は少しだけこくり、と唾を飲み込むと、口を開いた。

「まさか、…成績、最悪だったんですか？」

「…いや。…つつうより、何も書いてねえ」

鼻で笑って、彼が無造作に開いたその結果を見れば、全て単位免除のはんこが押されているだけで、味気も何もない。そんな彼に対して、光彦は、つと憎まれ口を叩く。

「自業自得ですよ。…コナンくん、今学期授業出たところ見たことないですもん。皆と一緒に進級できるだけありがたいと思ってくださいよ・・・本気で心配したんですよ？僕たち」

「…だよなー…」

彼の反省を含んだその表情に、光彦はつられて笑みを浮かべていた。

一方で、自然に笑って話ができている自分に多くの驚きを感じていた。

それは、自分が変わったのだろうか、それとも、彼が変わったの

だろうか。

多分後者なんだろうな、と臆気に考えられずにはいらなかった。何か彼に起きた。きつとそれは彼女のこと。

だけど、その『彼女』が姿を見せないのは何故だ？声を聴かないのは何故だ？

彼女はどこにいるんだ？

疑問が頭の中を駆け抜ける。

「…んで？光彦の方はどうだったんだよ？オール5でも取ったか？」

ひょいと唐突に通知表を覗かれて、光彦ははっと我に返り、慌ててそれを裏にした。

「ばつ、コナンくんじゃありませんし、そんなわけないじゃないですか……。松沢さんみたいなこと言わないでください」

「松沢？…誰だそれ」

きよとん、とした表情で自分を見つめる彼の様子に、光彦は思わず眉を顰めた。

「僕の隣の子ですよ。…クラスメートの顔と名前ぐらい覚えてください」

「あゝ、わりわり。そのうち覚える」

「そのうちって…。今日もう終了式ですけど」

これでクラス替えなんてされたらどうするつもりなんだ。思わず

心配してしまう。

確か3年もこのクラスだと聞いてはいるけれど、それでもこのまのペースだったら、きっと彼はクラスメートの名前なんて少しも覚えないまま卒業するような気がして。

それでもいいのだろうか、なんて思ってしまう。
クラスメートなんて。

友達なんて、彼にとってはそんなものなのだろうか、と。

「…今のコナンくん、完全に浮いてますよ…」
「だろうな」

にやり、彼は笑った。

「だろうな、じゃなくて!!!」

思わずムキになる光彦に、コナンはからからと笑った。

「…ま、だいじょぶだよ。もうちゃんとガッコ行くようにすつから。心配すんなって」

「…………え」
「ちゃんと行くから。…今まで、すまなかったな」

真面目な顔で、自分を見つめるから。

光彦は急に自分の鼻の奥がつんと痛くなって、慌ててずずつと音を立てて、鼻を齧った。

「そうですね…。一体どれだけ心配させれば気がすむんですか…」
「だからわりーって言うてるだろ、ったく…」

口調は悪いが、顔は本当に優しい表情で、穏やかな表情で。そんな顔の彼を久しぶりに見るから、余計に感極まって・・・。ああ、なんかもうぼろぼろだ。

姿を他のクラスメートに見られないように、彼は思わず机に突っ伏した。

「泣くなよ、そんなで」

「泣いてませんよ…っっ！」

突っ伏したまま、ムキになって思わず大声になってしまい、光彦はさらに泣きたくなった。

はあ…というコナンの大きな溜息が耳につく。

呆れているんだろうか。しかし、その後で、「フッ」という鼻で笑った音が聞こえた。

「オメーはちつとも変わらねえなあ。…あのころと」

「なっ!？」

さらにムツとして、顔を上げれば、目の前にはコナンが思いもよらず表情で自分を見つめていて、驚いた。

そうしてそれは彼が素直に漏らした言葉だと理解する。

嫌みでも卑屈から来た言葉でも何でもない、彼の素直な心。

コナンの目線は、しばし自分に向けられていたが、すうっと教室の後ろの方で通知表を見せあいっこする元太と歩美に移される。

2人はまさか自分と彼がそんな深い話をしているとは思わないのだろう。自分たちがそちらを見ていることに気づいたようで歩美の方がにつこり笑って小さく手を振った。

コナンはそれに応じて片手を挙げてみせた。それから、再び目線

を光彦の方に戻すと、口元だけで笑った。

「…俺さ、正直、おめーらが羨ましいって思ったこと、何度もあったんだぜ？」

「え？」

その言葉の意を探ろうと、彼の横顔を見つめれば、彼は思いのほかすぐに口を開いた。

「ガキのころからいつだって真っ直ぐで、一生懸命で。誰かの…とくにあいつらのことになる、こつちがヒヤヒヤするくらいに行動ばかりして。ガキのくせして、っていつも思ってたよ」

『あいつら』というその言葉に、一瞬ドキリとする。歩美ちゃんと、そして『灰原さん』だ。だけど、動揺を彼に見破られたことなく、光彦はわざと頬を膨らませた。

「何一人大人ぶってるんですか。いつも一生懸命なのは僕たちだけじゃないし。…というより、コナンくんが一番危ないことしてたじゃないですか、一人抜け駆けして。いつも一人で手柄貰って僕たちの間で、陰で何言われてるか知ってるんですか？」

「…何？」

悪い予感を感じたのかコナンが眉間に皺を寄せたから、僕はにやりと笑った。

「自己チュー人間。あのころ流行った、『KY』はコナンくんのためにある言葉だ、って。そういつて笑ってたんですよ」

「…げっ、マジかよ…」

本気で顔を蒼くする彼を見て、光彦はおかしくなってしまう笑みが零れた。

「でも一方で。すごく頼りがいのある人で。憧れだったんですよ。そして、だからこそ彼女たちも君を好きだったんですよ」

そうやって笑って、ちらりと横目でコナンの顔をうかがった。どんな顔をしているのだろう、と思った。思った表情と違う表情カオをして。困ったような、何か考えているような。

「コナ…ンくん？」

「…おまえたちとは違ってちょっとズルしてたから。そう思われてもしゃーねーし、当たり前なんだよな」

「…え？」

驚いて、光彦がコナンの顔をまじまじと見つめると、少しだけ遠い目をして、彼が言った。

「だから、ちゃんとあいつらのことを、あの当時で守りきれたおめーらはすげーと思うよ」

「あの当時って…コナンくん、さっきから何わけのわからないこと…」

戸惑いを隠し切れずに、朦朧とコナンから未だ目を離せずにいた。

「…今のおまえでも、わけ、わかんないか？」

逆に真っ直ぐな蒼の光を残した魅力的な瞳で見つめられるから、言葉さえも出てくることもできずに。光彦はしばし彼を見つめていた。

「…それって、つまり、あなたは」

江戸川コナンくんであって、江戸川コナンくんじゃなかったっていう、ことですか？

もし、それなら、あなたは一体…。

「そう。…俺は」

ごくり、唾を飲み込む。

「悪を貫く正義の味方仮面ヤイバーvv………なんつってv」

「…はあ？」

光彦が思わず口をあんぐり開ければ、してやったり、という表情でコナンが腹を抱えて笑う。

なつかしいだろ、なんて言うて。

急激に怒りが頭だけでなく、体中に血流と一緒に駆け巡る。

「もう！何こんなときに、冗談なんて言わないでくださいよ！何考えてるんですかつ」

「あー、わりわり」

「わりわり！じゃないですよ…！しんっじられない！」

この怒りをどうぶつければいいか、本気で思う。

顔を見ればまた暴言が飛び出そうで……。だから今はどうしても顔を合わせたくなくて光彦はコナンから背を向けた。…なのに。

「…俺さ、この6年、ガキにも大人にもなれない、中途半端なやつだったんだ」

「…え？」

すぐその思いも破れ、気がつくと光彦はコナンの表情をまじまじと凝視する。

彼が今一体何を言わんとしているのか、少しもわからなかったの

だ。

コナンの視線はいつのまにか窓際を見つめている。が、光彦の視線の先に自分がいることに気づいたのか、ゆっくりと彼の方に視線を落とした。うつすら笑みを浮かべて。

「俺さ。情けねえけど、そのことをオメーのおかげでようやく気が付くことができたんだぜ？」

まあさ…。オメーにしてみれば今更だ、って笑われちまうかもしれないけど」

…ありがとな。

そう言つて、彼がほんと光彦の頭を軽く叩くと、席を立って教室のドアの向こうに歩き出す。

「ど、どどど、どこ行くんですかつ！？」

思わず光彦は声を吃^{ども}らせながらも、大声になってしまう。

「…便所」

彼は一度踵を廻らせてそう言つと、茶目つ氣たつぷりに笑つた。そんなコナンの様子に抵抗を感じ、光彦は一度目を逸らしたが、コナンが再び歩き出す足音が聞こえると思わず顔を上げた。

氣がつくと、彼を目線で追っていた。

ドアの付近には他クラス、上級生、下級生問わず、多くの生徒がコナンを待ち受けている。それを当たり前のようにサインや写真撮影要求に応じている彼。その姿を見ながら光彦はポツリと呟いた。

「…どういつ、意味ですか？」

期待して、いいんですか、と。

その笑顔に、その言葉に。

光彦は深いため息と共に、コナンが今まで見つめていた窓際に視線を戻した。

さきほどまで誰もいなかったその場所に、いつのまにか小さな人だかりができていた。

あの時と同じように。

その光景に、ある種の予感を感じて、光彦は早足で窓際に駆け寄った。

…まさか。

彼の脳裏に映るのはただ一人。

光彦は思わず女子生徒の横を陣取って、身を乗り出していた。そこで光彦は目撃する。

彼がクラスメートと、3週間前に目撃した同じ場所で、同じ人物を。

ウェーブがかった緋色の髪の自分と同じ年代の少女を。

「…はい、ばらさん」

そこにいるのはまさしく、灰原哀、その人で。

あのときのように校門に背をもたげて、誰かを待っている様子。

あのときと違うのは、彼女の身の纏うもの、…帝丹中学校の制服。紺のセーラー服。

スカートの裾はひらひらと柔らかな風にふかれて揺れている。

誰かを探しているのだろうか。校舎を見上げたまま、彼女はその視線をその場所以外他に移すことはなく。1階、2階、3階と視線をスライドさせていく。ただ、柔らかな表情で。

そしてその場所で光彦の姿を見つけると、安心したような表情で、にこり、と微笑んだ。

そのとたん、どきり、と左胸が高鳴る。

2週間前には見られなかった、6年前の、いや、それ以上に優しく綺麗な笑顔。

2週間前にはあんなに生気のない顔をしていたのに。いったいこの2週間の間にどんな変化があったのだろうか。何が彼女を変えたというのだろうか。

光彦ははっとしてドアの方へ振り返ると、案の定、そこには既にコナンの姿はなく。

「…コナンくん!？」

あわてて光彦は廊下を飛び出すと、きよろきよろと辺りを見渡した。

—— 見つけた。

男子トイレとは反対側の、階段に向けて踏みしめるように歩くコナンの後ろ姿。

その姿を見て、光彦は思わず安らかに微笑んだ。

「……まったく。消えたり現れたり。幽霊かよ、オメーら。……俺らは別に幽霊研究会でも不思議サークルでもねーつつの」

帝丹中学校裏庭。

校舎の裏の小高い丘にある桜の樹の下で、コンビニから買ってきたおでんのだいこんを口いっぱいにはお張りながら元太が言った。その瞬間、若干冷めてしまっただけだけど、溢れんばかりの汁がぼたぼたと彼の胡座の上にぼたぼたと落ちていき、咄嗟に自身の太い腕で口を拭う。

「汚いなあ。口の中入ってるのに、喋るからいけないんですよ。それに幽霊なんて人聞き悪い」

そんな光景に思わず顔を顰めて光彦が抗議する。

光彦の隣には元太、歩美、そして自分と同じように、桜の木の下で肩を並べて校舎を見下ろしている——江戸川コナンと、灰原哀。光彦は、何気なしにそんな2人をちらり見てから、それに、と言葉を続けた。

「幽霊じゃありませんよ、僕らの前に2人は今こうしているんですから」

そう、確かに目の前に彼らはいて。透けてもいないし、足もある。それでも、光彦は元太がそういう皮肉を言ってしまうのもわかる気がした。なぜなら——。

「でもさ、…そう言いたくなるのも無理ないよ。光彦くんだって、ホントはそう思ってるんでしょ？」

その言葉に吃驚して、光彦は歩美を見る。もちろん、元太も、そして、まだここで一言も喋られてない、責められている張本人である2人も。

「綺麗事はやめようよ。もう、ホントに今聞かないと、答えてくれないかもしれないよ？またいなくなっちゃうかもしれない。今までと同じになっちゃうかもしれない」

いや、そうじゃないと、光彦は思った。今日の彼の言葉、そして先ほど見た灰原哀のあの微笑みを見て。

でも、その彼の言葉を聞いていない歩美には、不安が沢山あるのだろう。光彦にだって、先ほど自分の前で意味深な発言をコナンがしなければ、きっと今でも不安で胸が押しつぶされる気持ちでいただろう。それほどまでに彼らのこの2週間の行動は、自分たちにとって、あまりにわかりかねた問題ばかりで。

灰原哀だけじゃない。コナンの行動すらも。

事件を追っているときのコナンとはまた違っていて。それが彼らには不安なのだ。

「ねえ、哀ちゃん。私ね、哀ちゃんに聞きたいことがいっぱいあるんだよ？ううん、私だけじゃなくて、みんな。思っていることはみんな同じ。哀ちゃんにどうしても聞きたいこと」

「…ええ」

歩美の顔は、誰から見ても、怒っているように見えた。口数が少ないのもきつとその所為だ。

とうとう歩美が核心に迫ろうとしている。そのことはきつと誰も

が気づいていた。

「私も、貴方たちに早く言わなくちゃいけないと思ってた」

ぼつり、そうつぶやいた哀に対して、両手で歩美はぎゅっと耳を塞ぎ、イヤイヤをした。

「嘘、嘘！そんなこと言って、またいなくなっちゃうんでしょ？
またあの時みたい、2週間前みたいに、あゆ。私たちを置いて、
行っちゃうんでしょ？！で、またフラフラ戻ってくるんでしょ！ほ
とぼりが冷めたときとかにまた帰ってきて、またみんなを糠喜びさ
せて、それで陰で笑ってるんだ！陰ですつと哀ちゃんの帰りを待つ
ていた私たちのことをバカな子たちってわら」

歩美ちゃん！！」

思わず光彦は声を張り上げた。ハツと歩美は我に返る。そうして、
言い過ぎたと思ったのか、さつと俯いた。そうして、暫し、唇をき
ゅつと噛み締め――

けれど、ゆつくりと顔を上げ、また彼女の瞳を見つめる。その瞳
は悲しみに濡れて、揺れていた。

「でもね、私、ホントにホントに嬉しかったんだよ。もうどこに
も行かないと思って。これでまた

前みたいに哀ちゃんとずーっといられるって思ってた。元気はなか
ったけど、哀ちゃんらしい笑顔も

見られたし、子供のころみたいにお話できたし。なのに、また消え
ちゃって。…夢だったのかなあ、

なんて思っちゃって。何度も、泣いたんだよ…？」

「…ごめんなさい」

「そうだよ…それから」

歩美の目線は横のコナンに移される。とっても鋭い視線。

コナンも、まさか自分に今、火の粉が降りかかるとは思っても見なかったらしい。少し身じろぎをした。

「コナンくんだつて何か知ってたら、教えてくれたらいいじゃない。…コナンくんだけが哀ちゃんが

いなくなつて、寂しかったんじゃないんだよ？心配してたんじゃないんだよ！哀ちゃんがなくなつて、塞ぎこんで、自分ひとりであるの考えるくせして。なのに、一度哀ちゃんが帰ってきたらみるみる元気になつて…。知ってるくせに、哀ちゃんが何をしてるか、何を話してのか、知ってるくせに、私たちには何も教えてくれなくて、知らないふりなんかしちゃつて。

ねえ、どうしていつも、そうなのよ。何でいつも隠し事ばかり。

私は…私たちは友達じゃないの？！

コナンくんにとつても、…哀ちゃんにとつても！」

綻るような表情で、哀とコナンの両方の顔を見比べる。その顔は今にも泣きそうで。

それでも、必死に堪えていたのが光彦には、いや、その場にみんながわかつていた。

けれど何も言っていないか、言葉が見つからなくて。元太も、光彦も、お互いをチラチラ見つめていた。コナンが口を開こうとした、そのほんの0.1秒前に、哀が言った。

「…友達よ？私は、あなたの、あなたたちの」

そうして、歩美の手をとる。しっかり、彼女の潤んだ瞳を見つめ
――。

「それは、本当よ。失くしたくない、かけがえのない、友達」

「…嘘」

「ホント。…本当に感謝してるわ、貴方たちには。ここを離れてたとき、ずっとあなたたちのことが気がかりで、仕方なかった。6年間、ずっと、あなたたちのことを忘れたことはなかったわ。だけど」

言葉を止め、哀は小さく息を吐き、俯き、そうしてまた歩美の目を見つめた。

「帰るわけにはいかなかった。ホントはずっと帰ってこないはずだったのに…。やっぱり、帰ってきてしまった」

震える睫毛。そして指先。そんな哀の姿を歩美はじっと見ていたが、ふっと優しく笑い、哀の手を握った。

「…長かったね、6年間」

ポツリ、呟く。

「ずっと、待ってたんだよ。なんで消えたのかはわからない。それは博士とコナンちゃんと哀ちゃんだけの秘密かもしれない。でも、その秘密がわかったら、その事実を私たちが受け止めることができたら哀ちゃんを助けてあげられるかもしれないってずっと思っていた。だから躍起になってた。…結局何があったか、コナンくんも博士も教えてはくれなかったけど、でも哀ちゃんの姿がまた見られたからよかった、のかな…。とも思っ」

精一杯の歩美の言葉。そうして、それは光彦や元太の言葉でもあ

った。それが哀にもわかっていた。だから。

「まだ。…心の準備がいるの。あなたたちに言わなくてはいけないことは山ほどあって。…それを言うにはまだまだ長い時間がかかりそう。ごめんね、意気地なしで」

えっ、という表情で、歩美はさつと顔を上げて、哀をまじまじと見つめた。それからにっこり笑う。

「いいよ」

「え？」

「私だつて哀ちゃんに隠してたことあるし。おあいこつていうとまた不公平かもしれないけど。また気持ちが楽になったときでいい。無理に引き出すことはないわ」

驚いて、哀が歩美を見ると、背中越しに光彦、元太もにっこり頷いた。

「ただ、何でもまたいなくなったかは知りたかったけど。それも言いたくないなら」

「言うわ、それは勿論」

「え？」

「私が今までどこにいて、何をしていたか。それだけは今ここで、はつきりと」

その言葉に、歩美は振り返り、元太、光彦、そしてコナンの順にぐるりと見渡し、目線を交わした。もちろん、意見は同じであつて

「…うん。…もちろん。その言葉を、私たちは待ってたんだよ」

歩美はにっこり微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0694/>

またあした...

2010年10月9日18時59分発行